昭和八年七月七日第三種郵便物認可
昭和九年八月廿五日印刷納本　隔月一回一日發行
昭和九年九月一日發行

精神分析

第二卷第七號

昭和九年九・十月

性慾心理研究號

――（裏面に續く）――

東京精神分析學研究所出版部

文藝

時評

資料

講座

內外彙報

相談

第二巻 精神分析 第七號

巻頭言

勇ましく生きむとする人々へ

世の中を夢見て暮さうと思ふものは本誌を讀むな。現實を正しく認識しようとの强烈な意慾あるもの丶みが我等の友である。無知——美しい表現が好きならば、無邪氣と云ひ換へてもよい——は一つの快樂であるが（何となれば、それは幼兒的な、ナルチスティッシェなリビドーの自己への引揚げを意味するから）、現實を如實を知ることは當然一つの苦痛である。まづこの苦痛を克服しなければ、現實の支配者となることは出來ない。夢の中に逃避することに依つて不健全な快樂に淫しようとする神經病的傾向者は、本誌を讀むことに依つて却つて人生がつまらなくなるかも知れない。併し一度さう云ふ卑怯な逃避を笑殺することの出來たものは、分析を學ぶことに依つて愈々大きな希望の大道を發見し得るやうになるであらう。

性慾新考

諸岡存

フロイドの『リビドー』libido といふ言葉は、羅典語の快樂、慾望（Lust, Wollust）といふ意味の文字から誘導した言葉であるが、其意味が廣汎で、生物的現象の內の心理現象を電流の如く量的に概念しようとして採用した考へ方である。

かう云ふ考へ方とこの考へ方に基く研究結果とには、固より我々の期待すべきことは多いが、なほ醫學や生物學との隣接領域（グレンツゲビーテ）に於いて、殊に性慾問題については、期待すべきことが多くなければならない。その意味に於いて私は醫學や生物學の方面から、この問題を新考して見たい。

×

種族保存本能の現れが、性慾であり、個體保存本能の現れが食慾であるといふ、此の、色食二つの本能は、昔から生物學上の二大本能と見られてゐる。さうしてフロイドもこの見方をシルレルに從つて採用してゐる。此の二つの本能は、相對的のものではあるが、其根本は一で、性慾はつまり、食慾の變形と見ても差支へない。フロイドもやはりさう論じてゐる。

扨て性慾本能は、生理的に見ると、今の處、全然性ホルモンの作用と見る可きである。性ホルモンと稱するのは、主として生體內の生殖腺（睪丸・卵巢）の內分泌作用、及び其の附隨器管、例へば腦下垂體、副腎等のホルモンの働きの總和を指すのである。最近の研究によれば、此性ホルモンの幾分は、男女の尿中にも含まれてゐる事が判つた。

それは、女性にあつては姙娠時、男性にあつては靑春期に特に多いとの事である。又性ホルモンの活動の手近な例證としては先づ明かに下等動物に見られるのである。例へば哺乳類の犬に於て、交尾期といふ現象がある。それは、生殖腺が一定期間丈けその活動を表はすことであつて、而してその活動が止ると、性の現象も亦こゝに消失する。殊に面白いのは、水陸兩棲類に屬する蟇の產卵期に於ける現象である。此際、雄の腕掌に瘤伏突起が出來るのである。これは交尾期のタコと稱へられて居るもので、產卵期間だけ、特に雄の手掌の筋肉が強く發達して、雌の產卵の際雄が助產夫の働きをするものである。此れは生物界に於ける最も珍奇な現象の一つである。これは全く性ホルモンの直接の結果である事は、其の時期が經過すると自から消滅する事によつても明かである。又動物にせよ、人間にせよ、去勢卽ち生殖腺を生體から取り去る時には、其の性ホルモンの作用が消失する事は周知の事實である。此他性慾の發動は、動物によつて、其形式や、樣態は千差萬別であるが、何れも其の源泉は性ホルモンに他ならないといふ事は、現今では、最早少しも疑ふ可き餘地はないのである。

×

此等性的現象は、下等動物の、野生狀態であればある程、それが露骨に明白に表れて來る。反之、家畜及人類にあつては、榮養や、濕度、其他の人爲的關係からして、其狀態が餘程變つて來る。現在に於て、鷄等の家畜に於いてすら、最早や自然の交尾期等を見る事は出來ない。彼等は四季を通じて、相等に性慾活動を現してゐる。特に現今の吾々人間生活狀態では、それが著しく變化して、性慾も最早や四季の別なくして、殆ど常住發動し得るものである。併しよく之を注意して觀ると、やはり人間にも猶ほ、その週期的の消長はある。

女性では、規則として、一ヶ月每に月經を見るが、それと前後して、特に色情の亢進を見る定まりになつて居る。男子に於ても、亦稍これに似寄つた、色情の定期的消長を見る事が出來るのである。元來、戀愛は生殖を目的として起つて居るといふ理論は、大體に於ては勿論、正しい。併し必ずしもさう許りでない事は、自然界に於て旣に之を認める事が出來る。例へば、吾が國の櫻の如き、又、山吹の如き、花の美其ものが、旣に其目的となり了つて居る。これ

等植物の、花は美しい許りが目的で、或は結實しても繁殖の用をなさなかつたり、或は又全然實を結ばぬ花もあつて花そのものの本來の目的にもとるものと見られるものが多い。卽ち、彼等は目的を忘れた變態性慾を示して居る。さりとてこれ等を、全然病的とのみ見る譯にはいかないのは明かである。人類に在つても、こんな例は多く見られるのである。例へば、藝術家、宗敎家等は嚴密な意味で、性慾其者を壓服してゐる場合がある。併し之を變形して、美術的製作、或は宗敎的活動としてあらはして居る。世間では、これ等を決して病人とは見て居ない。却つて之を尊敬してゐるのである。又、政治家や、敎育家の如き、獨身で、所謂一寸の不行狀もなく、全く禁慾狀態で、彼等の所謂「天職」に專念して居るものも、古來から少からずあるのである。勿論これ等を目して病的といふのは間違つてゐる。これによつて見ても、性的活動に、性慾其のものゝ直接發動と、更に之れが變形した派生的性慾活動の、二方面がある事が明かである。第一が第二に變形する手續きをフロイドは昇華作用（ズブリーミーレン）といつてゐる。これは恰も固體の昇汞が直接に氣體に變化する化學變化に比して、借用術語である。（フロイドはよく化學の言葉を借用する癖がある。精神分析が正に其適例である。）此の昇化作用、卽ち美化作用は、心理治療の手段として極めて大切なものである。

×

性心理を一般的に論ずる事は、此際必要もないが、性慾の性質中、最も重要な一つの特質を玆に述べて見たいと思ふ。それは他でもない。性慾及戀愛が其所期の目的を達するに、極めて迂遠緩漫なる手段經過を取る事、卽ち換言して、戀愛が時間的に非常に不經濟であること、その事である。これは所謂、交感神經系統の作用に屬してゐるからである。卽ち性的活動は、それが筋肉系統にせよ、又感覺方面にせよ、無意識的及不隨意的現象が多いからである。又化學の術語を借りて言へば、性慾現象は定性的であつて、定量的ではない。卽ち性的感覺は極めて漠然、只だ不快の感覺のみであつて、其分量とか、度合等には、無頓着である事である。倫敦の神經醫ヘッドは此方面に於いて極めて正確なる實驗的研究を遂行した。彼は男性生殖器官、特にグランス・ペニスの感覺が極めて原始的である事を證明した。卽ちグランス・ペニスは全然交感神經的のものである。其の感受性は極めて漠然たるもので、冷熱の度も、大小も、

將又精粗の識別能力が全然存在して居ない事である。女性に於ても、此れとやゝ相似た現象を示すものなる事は、既に婦人科醫がこれを知つてゐる。

ヘッドの研究は非常に興味あるものである。つまり、これは性的生理が大體に於て內臓生理であることを示して居るのである。卽ち、生殖器官は一部外面に露出してはゐるが、それは特に內臓の一部が露出してゐる迄の事で、生理的及心理的作用はやはり依然として內臓生理及び內臓心理である事を示して居るに他ならない。所謂、性的亢奮とかエレクシオン等いふ性的現象は、大體、不隨意前の痙攣である。オルガズムといふ現象は、つまり、ヒステリー性痙攣發作に他ならない。蓄積された性ホルモンのエネルギーが發散されるのも、つまり痙攣に分泌作用を起すに他ならない。併し、此等分泌作用は大體何うして起るかといふに、それは原始的の感覺による、或意味の、痙攣的、旋律的、不隨意的筋肉運動に他ならないのであるが、其の之を起すに到る刺戟の性質が、此れに相當して亦非常この特異性を示してゐる事である。卽ち性的刺戟は、蓄積作用・階段作用を表すものである。刺戟に對して直ちに反應が起るのではなくして、一定量迄蓄積して、其後はじめて急に發作的痙攣を起すのである。

卽ち性的反應は、普通の意識的・心理作用に見るやうに、刺戟に應じて直に其の場に反應はしない。所謂、精神反應時間が、極めて不規則である。彼女は全く反應しないか、又は全力を以て反應する。それは總てか又は零である。一般に戀愛は、一時にその場で反應しない。小さい刺戟が引き續き漸次蓄積された結果、それが絶頂に達して始じめて、忽然と反應する。其の反應たるや、それが起る迄は、一見何等の反應がないといふ所が、特に注意を要する點である。これは普通人士の考へて居るよりも、遥に驚く可き程、長き時間を要するものである。只だ現代の社會狀態に於ては、此特質を忘れ勝ちである迄である。これが、現代の性的活動が不自然的に陷り易く、從つて、雜多の障碍を起す原因となるのである。卽ち反應時間に此特質ある事を忘れて居る爲に、性急なる現代人が、完全なる性的準備を怠る所に、性的不滿と障碍とを起す原因が、伏在するのである。此事は古代人、特に古代漢土の學者が、却つてよく理解してゐるのである。

以上述べたやうに、性的活動は、大體反射作用であつて、殆どその大部分が不隨意筋の發動であるやうに思へる。併しこれは一定の範圍に於て只ださうであつて、性的行爲の全部が、決して悉く不隨意的のものでない事は、少しく之を注意すれば直に氣附く處である。併しそれが、どの程度まで隨意的のものであるかは、極めて漠然たるものであつて、而かも、人々によつて、非常に異つてゐる關係にあるのである。卽ち、統制の出來る人と、出來ない人とでは其の間に非常な隔りがある。或人の性慾現象は、特に理性的であるに反し、或人の戀愛行爲は著しく本能的である事がある。

×

そこで玆に戀愛心理に一つの矛盾、卽ちパラドックスがある。性慾は本來不隨意的であるが、又同時に非常に意識的である事である。例へば、性慾乃至戀愛現象の大部分が、空想或は錯覺の上に成立つてゐる事である。或意味から言へば、戀愛は全然妄想に他ならない。戀をする人は、自己の頭の中で、勝手に『デッチあげた』戀愛觀を基礎としてそれで性的活動を起して居るのである。換言すれば、自己戀愛も同性愛も、將又異性愛も、その性慾の對象其者の美醜・良否には關係なしに只だ、唯心的、主觀的に自己の胸中に於いて、自己の想像力によつて、『デッチ上げた』ものに他ならないのである。佛敎の『色卽是空』といふ語の最も適切な實例は、實に此性慾現象である。卽ち性慾の對象は、妄想であるが、其實體其物は、自己の內部にある。卽ち自己のホルモンに他ならない。それが妄想の徑路を辿つて發現する迄の事である。

『リビドー』其者は、盲目的な、我等自力の肉體中に在存してゐる一つのエネルギーである。が、それは、空想の樓閣中に戀愛の燈火を發現する。而して其入り口の過程は、寧ろ有意識的、心理的である。卽ち性慾の準備の遂行は想像で、大腦の作用である。それで、吾々は、我々の體中に貯へてゐる活力の源泉をみだりに枯渇せしめてはならない。のみならず、又一方には之を旺盛ならしめる方法を講ぜなければならぬ。是れが卽ち、リビドーを強くする所以で、

それは大脳卽ち有意識心理作用でやらねばならぬ。だから、リビドーの取扱に就いては、我々は主として、隨意的に行扱ふ可きである。

×

それは結局、吾々の性的動作の大部分を、徐々に、併し確實に、出來る丈け、意識的、統制的に發現する事を練習しなければならぬ。これは大體に於て、練習——卽ち、意志の力によつて、支配す可きである。それは、又他方廣く我等の器官の解剖と生理と研究して適當なる姿勢と方法とを工夫す可きである。昔から、坐禪法・腹式呼吸法等の精神修養法があるが、此等は何れも無意識的生理作用を有意識的に統制する工夫に他ならない。

我々は、これと同樣の方法を、性的活動にも應用する事が出來る。斯くて我々は始めて、有意識的に、隨意的に、全く無駄のない合理的性生活を營む事が出來る域に到達し得られるであらう。（昭九・七・三〇）

ある性的犯罪者に就て

式場隆三郎

私は最近ある殺人犯の精神鑑定をした。彼は色情狂と稱ばれてゐた三十六歳の獨身の男であるが、精細に調査したら他にも種々な病的症狀のあることが判明した。一體世間でいふ色情狂といふものは、我々から見ると症狀名であつて、性慾だけが異常で他はすべて正常であるといふことはない。さうした病的性慾者には必ず他にも病的な證候があつて、もつと別な病名をつけた方が正當と思はれることが多い。性慾の異常はどんな精神病者にも現はれ得るもので特定の病氣に必發するものではない。

被告は父系にも母系にも精神病者の遺傳があり、父は田舍廻りの旅役者で彼も幼少の折子役として舞臺に立つたことがある。その後父は一座の女優と一緒になつて母は離縁されてしまつた。かうした家庭に育つた彼は東京へ出て勞働者となつたが、十八の時に淺草の賣笑婦を知つた。種々な仕事についてみたが、どれも永續きせず歸省して無爲な日を送つてゐた。彼は他家へ再婚した母に小使をせびつては酒色に惑溺した生活をつゞけた。金錢に不自由な彼は人妻や未亡人を脅迫しては慾望をとげることを覺えた。彼が兇器を持つてゐる色情狂であるとの噂を知つてゐる村の人々は、襲はれても訴へ出るものが少かつたが、被害者はかなり多かつたらしい。犯行の當夜も彼はある未亡人の家へ侵入し脅迫して目的を達し、空腹だと云つて飯を焚かせて食した後再び夫が出稼ぎに行つて不在の人妻の家へ入り、脅迫したが應ぜぬので遂に頸部を刺して卽死せしめたのであつた。裁判所の記録の中にその時傍に寢てゐた尋常一年

生の子供の調書があつたが、母の慘殺を目撃した可憐な少年の陳述は涙を誘ふものがあつた。彼が私の取調に答へたものの中から數ヶ所を拔いて見よう。

「私が殺したのは〇〇といふ三十三の女です。その女は身代りです。私のやつたのは正當防衛でした。つまり自分の身を守るのです。私は三十六にもなつて獨身です。二十の時に嫁を貰ふつもりでしたが後妻の爲に破談になり、十八年間憂鬱に暮しました。三十六です、それで無妻です。世の中に三十六にもなつて妻を持てぬ男がありますか。それで決心をしました、貰つて見せる、この恨みを晴らすのです。そしてあの女が身代りになりました。私としてはあの女を尊敬します、私のお神さんになつたのです。女には亭主があると云ひますが、それは問題でありません。その男は又別の女を貰へばいゝのです。私は三十六まで忍耐したのです、そして恨みを晴らしました。私は美人をねらつてゐました。その女に關係してから殺して終ひ、自分は絞首臺へのぼるつもりでした。三十六にもなつてお神さんがないとは不名譽ではありませんか、これでやつと私は名譽恢復したといふものです。私は世間からきつと褒められるでせう。私は正當防衛をやつたまでゞす。無罪になると思ひます。」「もう一つ私が人殺しをした動機があります。昨年チブスにかゝつて入院しましたがその時實のお袋から貰つた小使が二十圓ばかりになつたのです。退院してから料理屋へ行きましたら一晩で十五圓もとられて終ひました。餘り高いので訊くとビールは一本五十錢だと云ひました。何といふ暴利でせう、私はその恨みを何時か晴したいと思つてゐたのです。これも私が三十六にもなつて獨身でゐるから馬鹿にされたのです。だから女を殺す動機に深い關係があります。」「もう一つ理由があります。私は近所に少し借金が出來ました。僅か一圓位ですが返せぬので弱りました。家名にかゝはります。その不名譽を今度の殺人で恢復したのです。世の中に生命に代へられる大切なものがありますか。私はその大切な生命をとつたのです。だから私は親孝行をした譯です。」「あれは美人だし亭主も留守だし、私の永年の恨みを晴すには理想的だと思ひました。それであの晩行つたのですが斷はられ、大聲をあげたので殺すのはこの女だと思ひました。私は社會に恨みがあります。三十六にもなる私に嫁を持たせず、自分達は花嫁を貰つてはこれ見よがしに披露をします。どこを見ても妻のない男はあ

りません。楽しい夫婦生活をしてゐる者ばかりです。私だけが不幸なのです。私は二十の時に妻を持てばもう七人位子供があつて、樂しい生活をしてゐられたでせう。それがこの寂しい現狀です。腹が立つのが當り前でせう。このまゝでゐれば私は狂ひ死をします。それを防ぐために女を殺したのです。だから立派に正當防衛の證明が立つてゐます。」殺された女の無殘な寫眞を見せて、氣の毒に思はないかと問ふと、——「はゝ……、思つたより美人ではなかつたなあ。私に氣の毒なことをするから自分もこんな目にあつたのです。私は女を見ると辛抱出來ません。それだのにあの女は斷りました。私は女を我慢すると頭が變になり身體にも毒なのです。それを防ぐためにも女は必要です。それを失敬にも斷りました。自業自得といふものでせう。しかし女も私の妻になつたのです、却つて喜んでゐるでせう。刑務所へ入つてからも二三度枕元に姿を現はしましたが、お禮に來たのでせう。」

君は色情狂で刄物で脅迫するので皆から嫌はれてゐたといふではないかと云へば——

「私が世間の様子を見たところでは普通だと思ひます。夫婦者は私以上だと思ひます。私は一日に七〇〇〇〇〇〇〇滿足できませんが、三十六にもなつて獨身ならこれは當前でせう。私が刄物を持つのは女が素直に云ふことをきかぬからです。他の男には從つても獨身の私を馬鹿にしてゐるから、おどかすのです。これも私が世間に腹を立ててゐる理由です。三十六の獨身男、誰も相手にしてくれない、この不滿が爆發してあんな人殺をしたのです。軍人が戰場で人を殺しても罪にはならぬでせう。私が女を殺したのもそれと同様です。私は正當防衛で立派なことをしました。今度世の中へ出て行つたら、女共も感心して嫁に來てくれるでせう。」

被告は自分の性的亢奮を制することが出來ず、脅迫しては目的を達してゐたものであるが、犯行に關しても悔いることなく平然としてゐる。三十六迄獨身だつた不滿に憤激し、社會の夫婦生活を嫉妬し、自分の暴擧は身を護るための正當防衛だと主張してゐる。彼の陳述の中に、世上に信じられてゐる「あまり性慾を抑壓すると身體に害になる」といふ思想の入つてゐるのも注目すべきだ。彼は三十六まで獨身を強ひられてゐる者は、どんな手段に訴へても女を得ねばならぬと思つてゐた、だから云ふことをきかねば殺してもいゝではないかと主張する。

身體を調べると横痃の手術の瘢痕があり、全身數ヶ所に文身をやつてゐた。左側の前膊には波の文身があつてその上に「萬龍」の二字を彫つて居り、右の大腿部に女の顏、その膝の下に桃の文身があつた。最も注目すべきは下腹部、性器直上の波に岩の文身である。これらは二十歲頃から二十五歲位の間に自分でやつたり友人にやつて貰つたといふ。犯罪者や精神病者に文身の多いことは諸學者の注意する所で、變質者は殊に文身を好む。而して性器或はその附近の文身は變質の烈しい證左といつてもよからう。この性的犯罪者にもそれが見られたことは興味深い。私は曾て某刑務所の受刑者の文身を調査したことがあるが、只一例ではあつたが、Glans penis に彫つてゐた者を見た。彼の說明をきくと、そこは最も痛みの烈しい場所で入れる者も少いから、自分が如何に辛抱强いかを誇る爲に入れたのであると云つてゐた。女で大きな文身をするのは餘程凄い者に限られてゐようが、蛇の頭部がそこを狙ふやうなもの、或は入つたやうに彫らせるものがあるときく。ともかく文身と性的異常との關係は無視出來ないと思ふ。

被告の既往症を調べて見ると、十九歲頃から時々精神異常の徵候のあつたことが判明した。現在の精神狀態を檢查すると、性的亢奮の烈しい他に智能が減退し、誇大妄想、關係妄想、被害妄想等があり、感情は鈍麻して常同症があり、時々故なく空笑することが明かになつた。これは精神乖離症といふ精神病に當るもので、被告は十數年前から本病に罹つてゐたのであるが、今迄性的異常のみが注意されてゐたものと見える。被告は記憶も惡くなく、辯舌も相當で一見常人の如く見えるが、深くその心理を觀察すれば幾多の病症が發見されるのであつた。

私は今迄に强姦致死や未遂の犯罪者の精神鑑定を屢々やつたが、さうした者の中には低能者や精神病者の衝動的の行爲が多く、本當の意味での性的異常は少なかつた。しかしこの被告の場合は明かに性的異常が重要なモメントとなつてゐた。彼の生活は文字通り性慾生活に終始してゐた。彼は刑務所に收容された後も依然として性的亢奮にかられて困ると告白してゐた。しかし彼の性慾異常は倒錯的のものではなく單に興奮性の亢進であつて、俗名の淫亂症に相當する。彼は犯行を正當防衛だと云ひ、女も滿足してゐるだらうとも云つてゐるが、殺して樂しむやうな殺人淫亂症

的な所は全くない。女が應じたら殺しはしなかつたと思ふ。（彼は前から犧牲になる女をねらつてゐたし、自分は絞首臺に上る覺悟だとも云ふが、辯舌の巧みな彼の逃げ口上と思はれる。彼は死刑になるとは思つてゐない、無罪を信じてゐる。

精神病者といふと皆色情狂の傾向があるやうに考へられ易いが、亢奮狀態の時にはさうした症狀も見られるが、感情鈍麻が進むと色情は寧ろ減退を示すので、世人の想像してゐる精神病院と我々の日常見てゐる實狀とは違ふ。性慾異常は變質者に多く現はれる症狀であるが、さうした中間者は我々の診療を求めることが少い。我々は性慾減退に惱む神經衰弱の患者は屢々診るが、異常亢進、倒錯症等の惱みで診療を求められる場合は稀である。日本の醫學界は性慾に關する業績に乏しい。これは醫者を賴りにしない患者の不信のためだらうか、或は內氣な民族性によるものだらうか、それとも事實患者が少いのであらうか。或は醫學者も亦內氣でさうした研究を發表しようとしないのであらうか。我々は何時も外國の學者の說を引用せねばならない事を殘念に思ふ。性慾を文學や通俗讀物の題材ばかりにせず、科學者ももつと手を染める必要があると思ふ。（完）

幼時定着と其の愛情生活への影響

霜田靜志

一

總ての人は幸福を求めて居る。何人も不幸を希ふものはない。幸福を得んとする願望は總ての人に共通なる願望であると言つてよい。

併し何が幸福であるか。貧乏人は金持を羨み、金さへあれば總てが幸福になると思つて居る。しかし金持になつて見ると、金があるだけでは決して幸福になれるものでない事が、はつきりと分つて來る。金持は金持である事のために、どんなに多くの不自由な生活をして居るか知れない。それだから外部から見て、金もあり地位もあり、何不自由なく暮して居つて、あの人位幸福な人はない、と思はれて居る人が、其の人の身になつて見ると、幸福どころか、始終不平の絶えない生活をして居る場合が隨分と少くない。さうかと思ふと、ひどい貧乏の中にあつて、而も周圍の樣々の迫害を受けて居るといふやうな人で、本當に氣の毒なと思はれる人が、實は御當人は一向それを苦にせず、極めて朗かな幸福な生活をして居る場合がある。

其處で結局は幸福といふ問題は外面的な地位や境遇の問題でなくて、内面的な、自分自身の心の問題である。それ故に幸福は外に向つて求むべきものでなくて、内に向つて求むべきものであると言つてよからう。

此の意味からして、幸福を得るの道は、結局「安心立命」より外はない。而して此の「安心立命」は何によつて得

らるゝかと言へば、自分の心の中に「悟」を開く事より外はない。ところで此の「悟」を開くの道は樣々あつて、或る人は宗教によつて之を得、或る人は哲學により、或る人は藝術によつて之を得て居る。もつと卑近な所では、日常の生活の中から、或は社會の動きを見て居る中から、或は草木の生ひ育つ樣を見て居る中から、「悟」の心眼を開いて、幸福の生活に入る者もあるのである。

二

併し、どうしてもさうした「悟」に入り、心眼を開くことの出來ないものがある。自分の持つて居る偏見が禍を爲して、物の正しい見方が出來ない。或る婦人が「私ほど不幸な者はない」と口癖のやうに言つて居るので、其の內容を聞いて見ると、一向大した事もない。あなたなんかが不平を言つては罰が當りますよ、と言つてやりたい程の境遇の人である。世の中にはまだ〳〵不幸な人は何百萬といふ程ある。此の婦人の境遇などは、勿體ない位幸福な境遇である。觀點をかへて「私ほど幸福な者はない」と思へば、いくらでもさう思へる身分である。然るに自分の心の中のわだかまり、其の偏見が禍を爲して、何事に對しても氣に入らない。夫を恨み、子供を罵り、世間の人々を惡し樣に言つて居る。

凡そ斯うした人間程不幸なものはない。結局自分を不幸だと思ふ者が、世の中で一番不幸な譯である。而してそれは何によるかと言へば、自分の心の中に出來た偏見であり、迷執である所のものに原因して居る。卽ち、それは自分の心の中に結ぼれ來つたコンプレクスに因ると言つてよい。

それ故に、物の正しい見方を誤り、平和の心境を破壞する者は、此のコンプレクスであると言つてよからう。されば人間の幸福への道は、無意識の底に沈んで居るコンプレクスを意識の上に持ち來し、これを雲散霧消せしむるより外はない。之によつて明朗な心境を開いた時、始めて其處から正しい物の見方や考へ方を進めて行く事が出來るやうになるのである。

私は教育の仕事に携はつて、常に意を用ひつゝある事は、屢々迷執とまでなつて居る此のコンプレクスを如何にして解放し、子供を自然の姿に返し、明朗な心境に到達せしめ得るかである。教育の要諦は、決して多くの知識を詰め込む事ではない。如何に良き人間を作るかである。而して良き人間とは、結局、偏見、迷執に捉はれない、正しき物の見方の出來る人物である。此の意味で、問題の子供とはコンプレクスを持つ子供であり、コンプレクスの解決が問題の子供の解決であると言つてよい、而して教育によつて此のコンプレクスが解消されず、コンプレクスをコンプレクスの儘に持ち越して成人となつた時、其の人は決して眞の幸福には至り得ないであらう。

三

コンプレクスは其の性質によつて分類する時、色々あるが、私は此處には、最も普遍的なるエヂポス・コンプレクスに就いて述べて見たい。エヂポス・コンプレクスとは、同性の親を憎み、異性の親を愛する心的狀態である。卽ち男の子は父親を怖れ、憎み、母親を特に愛する。反對に女の子は母親を嫌つて父親に甘へようとする。斯うした心理は、殆ど總ての場合に見られるのであつて、違ふのは僅に程度の差に過ぎない。多かれ少なかれ、誰にも斯うした心理の動きはあるものである。

私の知つて居る子供で、父に死なれて母一人子一人の者がある。母親はわが子が夫の忘れ片身であり、一つぶ種でもある事とて、何とかして之を立派な者にしなければならぬと、あらゆる苦心をして來て居る。それにも係らず、子供は學問は出來ないし身體は弱い。始終病氣ばかりして居る。此の狀態を分析的に言へば、子供は母にとつては夫の身代りである　それ故に母は亡き夫に注ぐべき愛情をまで、子供の上に注ぎかけて居る。其の結果として小供は必然的に母を自分の意の如くにしなければ承知しない。此の子供が外に出ては殆ど人前で口もきけない內氣は性質であり乍ら、母の前では我儘一ぱいに振舞つて居るといふ事は、決して理由のない事ではない。それ故彼が屢々病氣をするのは、實は母に甘へたい無意識的願望の結果であると言つてよい。卽ち、病氣をすれば學校に行かないですむ、そし

て終日母の看護を受ける事が出來る。勿論、意識してそれを考へ、意識の上で病氣しようと考へて病氣して居るのではない。けれども彼の無意識の願望は、彼を驅つて病にまで至らしむる力を持つて居るのである。

子供が小學の六年生になつた時、此の母親は再婚した。先方は三人も子供があつて、妻に死なれた人で、こちらは前述の一人子を連れて嫁した譯である、此の再婚は子供の上に大きな變化を來した。不思議なことに、それ以來子供は殆ど病氣をしなくなつた。之によつて見ても、此の子供の病弱だつた事は、明かにエヂポス・コンプレクスに因るものであつたに相違ない。

フランスの精神分析學者シャール・ボードン Charles Baudouin の書 L'âme enfantine et la psychanalyse の中には、次のやうな例話がある。

ピエールといふ十一（日本流に言へば十二）になる男の子。此の子供は此の年まで快活な性質で、相當勇氣もあるよい子供であつた。然るに此の子供が突然不平を言ひ出し、甘へてすねて、どうしても學校に行かない。此の子供は今まで喜んで學校に行き、妹を連れて行つてやる事までしたのであつたが、斷然之を拒否するやうになつた。そして家に居て終日母親に食つついてばかり居た。此の時彼は文字通り母親の腰巾着になり、母親の家庭に於ける仕事を邪魔してばかりして居た。父親は之を見て幾度か無理に學校へ連れて行つて見たが、子供は敎室の隅ですねて居るか、さもなければ何時までも泣いて居て、手がつけられなかつた。

此の事件はピション E. Pichon 氏の報告によるものであるが、氏の話によると、此の子供は病氣に罹つて、その回復期の間、兩親の寢室に一緒に寢かされた。そして或晩兩親の××を見てしまつた。それ以來眠つて居たエヂポス・コンプレクスは猛然と頭をもだげて來た。子供は斯くの如き兩親の親密さを默許する事が出來なかつた。彼は無遠慮に父の愛撫から母を引離し、自分に引き付けて置かうとして、學校に行く事を拒否し、母にまとひ付いて、どうしても離れようとしなかつたのである。

ボードンの書には、此の子供に就いては之から先の事が書いてないが、斯うした子供が此の儘大きくなつたなら、

決して幸福なる生涯は開かれて來まい。斯ういふ子供は、大きくなつてから結婚の相手を求めるに際し、どんな女に會つても滿足しない。それは彼の心が餘りにも强く母に結びついて居るからである。彼が妻を求めるのは母の代りである。併し代りはいつまでも代りであつて、彼を心から滿足せしめるものとはならぬ。從つて彼の結婚生活は幸福なるものとならぬのである。

四

此の種の實例は、私の知つて居る人々の中にも隨分と數多くある。幼時に於けるエヂポス・コンプレクスが其の儘持ち越されて、結婚生活に入つても滿足が得られず、自分を不幸にし、周圍の者に常に不愉快を與へて居る者が、かなりに少くないのである。それの代表的な例として次のやうな者がある。

或る地方の財產家の娘に生れた某女。男一人女二人の中の末の子に生れた彼女は、最初から父の寵兒だつた。殊に親達が年とつてから生れた娘の事とて、父の可愛がり方は並大抵ではなかつた。彼女が十二の時母は死んだ。それから後、父の彼女に對する盲目的な愛は倍加せられた。娘に着飾らせては、それを資產家の誇であるやうに思つて居た父は、それが娘をどんなに損ふかを知らなかつた。彼女が女學校の四年生になる頃は、見榮坊で、おしやれで、もう全く手のつけられぬ我儘娘になつて居た。

完全なエヂポス的の愛に溺れて盲になつて居た父は、それでもまだ氣がつかなかつた。娘の言ふ儘に小遣はねだられさへすれば幾らでも與へ、欲しいと言ふものは何でも買ひ與へた。併し娘の心には變化が起つた。それはエヂポス・コンプレクスから、若い男を求める戀愛への轉化だつた。娘に男が出來た時、父は烈火の如く怒つた。表面的に言へばそれは道德的な意味によつて娘を責めて居るのではあつたが、分析的に言へば此の時父親は、エヂポス的愛から裏切られた事に對する憤激であつた。父は激怒の餘り娘をしたゝかに打つたが、その時耳をひどく打つた事が原因となつて娘は中耳炎を起し、それがどうしてもよくならず、後には聽力が甚だしく弱つて全く不具に近い者となつた。

父と娘との爭鬪は此の時から始まつた。前にはあんなにも溺愛して居ただけ、之に對する反動は更にひどかつた。父の方はそんな碌でもない奴は娘とも思はないし、娘の方は、それならそれでいゝ私は勝手にすると、とう〳〵家出してしまつた。

父の金をいくらか持ち出して彼女は早速愛人と小さい愛の巣を營んだ。併し、多くの場合がさうであるやうに、薄情者の男は、金がなくなると女を捨てた。それから後、彼女の男から男へ轉々とした生活は始まつた。そして最後にたどりついた男と、此度は眞から心も融け合つて結婚生活に這入つたが、一旦蝕まれた心は何とも致し方なかつたものか、彼女の貞潔は保たれなかつた。結婚後も色々と問題ばかり起して、少しも平和な家庭は維持されなかつた。彼女が斯うなつて行つた事については、單に彼女を道德的に責めるだけでは濟まされない。彼女が自らを全く臺なしにしてしまひ、且つ夫をまで不幸にしてしまつた抑もの原因は何處にあるか。言ふまでもなくそれは、遡つて父との關係、エヂポス・コンプレクスにある事明かである。されば彼女が一生を臺なしにしてしまつたのは彼女自身の不品行にあるとは言へ、斯くなるべき素因を作つた事に就いては、父親に大きな責任のある事を見逃す事が出來ない。世の親たる者、謹むべき哉である。

五

もう一つの例話を語らう。――これも女の場合であるが、此の女は或る田舍の中產階級とも言ふべき農家に生れた。これも前の例と同じやうに末子で、兩親がかなりの年になつてから、もう出來ないだらうと思ふ頃になつて出來た子供である。兄一人姉二人で、子供は四人だつたが、兄や姉とは年齡に於て、ずつと隔つて居た爲に、彼女は殆ど兄や姉と一緒に遊んだこともなければ、親しみを感ずる事もなかつた。

父母は健在であつたが、どういふものか、父と母との間はうまく行つて居なかつた。父親は身體の丈夫な元氣な人であつたのに、母親はどちらかといふと身體の弱い方だつたので、多分は父親の方がまだ性的能力のある中に、母親

の方はもう全くさうした能力が無くなつてしまつたものであらう。年をとつて仲の良くない夫婦といふものは、大抵斯うした性的能力の不釣合に原因して居る。父親は母親に對して、何時も不機嫌でやかましかつた。けれども其の反對に末の娘に對しては甘過ぎる程甘かつた。娘のほしがる物は何でも買つて與へた。父親は酒が好きなもので、娘はよく酒買ひにやられたが、娘はいつもきまつてお釣をくすねてしまつて、返した事がない。それでも父親は、「しようがない奴だ」といふ丈けで、娘のするまゝに任せて居た。

父親がこんなに娘に甘くするのを見て、母親は快くなかつた。「お父さんのやうに甘くしては、今にどんな者になるか知れない。」と母親は口癖のやうに小言を言つて居たが、父親の態度は少しも改らなかつた。母親がさういふと却つて娘に對する溺愛は高まつて行くばかりであつた。それは全くエヂポス・コンプレクスの典型的なものであつた。彼女は斯うした中にあつて、父の寵愛を一身に集めて、我儘一杯に育つた。斯うした女が、後にどんな女になるであらうかは、察するに難くない。事實、彼女は自分が一度言ひ出したら、誰が何と言つても、どうしても聞き入れようとしない、強力なる自我の持主となつた。

彼女が小學校の尋常六年の時、卽ち彼女の十三の時であつた。其の頃兄は既に嫁を貰つて居たが、夫婦仲がどうもよくない。それに兄はよく父と衝突して、ひどい言ひ争ひになる事が少くなかつた。其の頃兄は家を外にして遊ぶ事が多く、夜もおそくならなければ歸らない、時に外泊する事も珍らしくなかつた。さうした事のために、父と兄とが言ひ争ふのを見て、彼女はいつも苦々しい事に思つて居た。そして何と言つても放蕩をする兄が憎らしく、いつも父の立場に同情して居た。

ところが或る晩、兄が外泊して歸つて來なかつた折の事である。彼の女は夜中にふと眼覺めて、兄夫婦の寢む隣の室から思ひがけない聲をきいた。「いやです、いやです、よして――。」低いけれど力強い、それはたしかに嫂の聲だつた。氣がついて見ると、彼女の脇に床を並べて寢て居た筈の父が居ない。彼女はハツとした。まだ男女間のことについては何も知らない彼女ではあつたが、此の聲を洩れきいて彼女は

自分が辱しめられたやうに感じ、顔が眞赤にほてるのを覺えて思はず蒲團を冠つてしまつた。

此の事があつて後、彼女は何にも言はなかつたが、父に對して尊敬する氣持は全く無くなつてしまつた。併しそれならそれつきり父の懷を離れたかといふと、さうではなかつた。父を輕蔑し乍らも、父から離れる氣持にはなれなかつた。從つて彼女は父の前では益々我儘で執拗で、手のつけられない娘になつて行つた。

年頃になつて彼女は結婚した。父親は離し難く思つたけれど、懇望せられて見れば反對も出來ず、しぶ〳〵之に同意した。父親が彼女が家を去つて行く事を喜ばなかつた事は、無意識的な行爲の上に現れて居た。今迄四人の子供の中誰よりも可愛がつて居た此の末娘に對して、その婚禮の支度として父親が自分で買つて來てやつた簞笥や鏡臺を見ると、それは今まで上の娘達に買つてやつたどれよりも貧弱なものだつた。此處に此の父親のエヂポス的愛は明瞭に現はれて居る。卽ち、父親はやりともない心を無意識的に娘への買物の上に現して居たのである。

斯うしたエヂポス・コンプレクスを其の儘持つて嫁いで行つた彼女が、當然夫に期待するものは父に求めた所と同じものであつた。彼女の愛は自己中心的なものであつた。それに今一つ困つた事に、彼女は性的無能力者ではなかつたにも係らず、夫との性的交涉を、非常に卑しいものに考へて居た。之は明かに嘗ての悪い印象がたゝつたものであらうが、これで夫婦の間が圓滿に行く筈はなかつた。それでも始めの間暫らくは妻も夫も、互に抑制することによつて、どうやら平和な家庭は保たれて居たが、やがて子供が出來て見ると、彼女の心は夫の上より子供の上に、より多く移つて行つた。

其の頃ふとした事から夫に女が出來た。妻によつて滿たされないものゝある間隙に巣喰つて、さうした三角關係も生れ出たのであらう。其のために隨分とごた〳〵もあつたが、元々夫は善良な人だつたので、自分の非を謝して綺麗に女と手を切つてしまつた。夫は更新した生活に再び步を踏み直すつもりだつたが、彼女は夫をどうしても信ずる事が出來なかつた。彼女は夫を輕蔑した。否、すべての男を輕蔑した。父に於て嘗ての日見せられたものを、夫に於ても亦見せられたといふ事は彼女にとつては誠に堪え難いものであつた。夫が自らの非を詫びて更生の生活を誓ふのを

見て、意識の上では立派に夫を許して居乍ら、無意識の上では彼女は到底許せなかつた。彼女の夫に對する抗議は、其の後色々な別の形をかりて現れて來た。

それから後十年、此の夫妻の生活は決して幸福ではなかつた。其處には最早、嘗ての日の如き三角關係の問題は起らなかつた。けれども彼女にとつては夫のする事爲す事が、いつも氣に食はなかつた。其の結果として、いさかひは絶えず、家庭はいつも砂漠のやうであつた。時には地獄のやうにさへも思はれた。彼女の樂しかつた思ひ出は、僅に結婚當座の數ケ月に過ぎない。それから後の彼女は全く不幸な月日を過して居る。彼女は此の不幸の原因を全然夫に歸して居る。夫さへ立派な人間であつて呉れたら、こんな不幸な生活に陷る筈はなかつたのにと、每日歎いて居る。

併し之を分析的に冷靜に判斷して行つて見る時、彼女の不幸は明かにエヂポス・コンプレクスに原因してゐる。彼女の父は彼女にとつては餘りに有難過ぎる存在であつた。彼女は此の有り難過ぎる程の寵愛を夫に求めた。彼女は夫を父の身代りとして求めて居た。けれども嘗ての日父にせられたやうな愛撫は求め得べくもなかつた。其處から彼女の不幸は生じて來たものであるに違ひない。されば彼女の不幸は畢竟するに、夫に對して餘りに多くを求むる所から來て居るに相違ない。此の點に眼覺めざる限り彼女は永久に救はれないであらう。

六

以上私は幼き日のエデポス定着が後年の生活を支配する幾つかの例を擧げて、此の問題を明かにしようとした。之等の事實によつて、人間は誰しも幸福を求めて居ながら、しかも幸福を得られない禍根が、果して何處に横はつて居るかといふ事が見出されるであらう。人間生活に於て、お互を不幸にするものは、何と言つても偏見であり、迷執であり、無理解である事が、動かし難き眞實として認め得るであらう。さればこそコンプレクスの解除は、問題の鍵を握る所のものであり、此の點に精神分析學が、大きな光明を投ずる學である事は明かである。隨つて人の子の教育に於ても、斯學が大きな根底を與ふるものであるかは、言ふ迄もない事であらう。（完）

性交と受胎の生物分析（フェレンチー）

高水力太郎譯

以下は故フェレンチーの「性慾論」,,Versuch einer Genitaltheorie"の末節結論の一部を譯したものであるが、譯者は生物學的素養に乏しい上に多忙のために妨げられて全譯し得なかつたことを遺憾とする。フロイド説に暗示を受けフェレンチー獨特の生物分析を試みたもので、實に重要な論文であるから、全讀者諸氏の精讀を期待する。フェレンチー個人については本誌第一卷第四號に於ける追悼文を參照ありたし。

吾人の考へ方に依れば、性交は個人が母胎又は母性の原型たる海の中へ退行して後、本能を滿足させて同時に重き緊張から解放せられることに外ならない。果してさうならば、何故に、また如何にして、かゝる本能滿足の傾向が種族保存及び蕃殖の傾向（これ等と本能滿足との間には一見何等の關係もないやうに思はれる）と混合し、それ高等動物の性器的活動となつて表れるのであるか、それが分らない問題である。かゝる事實の說明として我々が從來與へ得た唯一の考へ方は、當人の全體が性器的分泌物に同一化せられてゐると云ふことであつた。その考へ方に依れば、人間がその性器的分泌物を非常に大切に保護すると云ふことは、人間以外の諸動物がその排泄物を同樣に大切に扱ふと云ふことゝ、さして變りはないのである。この排泄物は排泄者自身の感じから云へば、彼等自身の一部分であり、これが身體外に出て行くことは、そこに損失の感じが伴ふのである。殊にその出て行くものが液體や氣體でなく、固形體（糞）である場合には、一層この損失に對する遺憾は大きいのである。

併しから云ふ說明はどうかと思ふと云ふ向きもある。殊に性交と云ふことは性的分泌物を一つの確實な場所に置くことであるのみならず、また受胎と云ふ過程は性を異にする胚芽細胞が合一し、發展が空間的にも時間的に

も一つとなつて開始せられると云ふことを思へば、右の說明は一層不滿なものと思はれて來るのである。ところで我々としては、承認しなければならないことがある。それは、受胎行爲と云ふものには、我々が性行爲の場合に於いて解決せんと努めたのとは全然別種の謎が存すると云ふことである。が、受胎と云ふことは性交に於ける雌雄の一時的合體と云ふことよりは、遙に古代的な過程であるのだ。實際、我々は性慾とその實施器關の發達がたゞ水陸兩棲類の動物に於いて始めて見られることを知つてゐるのである。併し受胎に依る蕃殖と云ふことは、既に最下等の單細胞物、卽ちアメーバに於いて見られるのである。して見れば我々は、これまでの考へ方を一轉して、動物學者の說——性行爲なるものは悉く、云はゞたゞ性細胞の出來たために、それに促されて强迫的に行はれることで、その强迫に依つて個體は胎芽細胞を出來るだけ安全な場所へと置かうとするに過ぎないとの說——が正しいのではなからうかと調べて見なければならないやうに感ずる。動物界に於いてもやはり、性交機能の發達以前に、性殖細胞保護の目的のための種々の方策が立てられてをると云ふことは、かゝる（動物學者の）說を決定的に裏書きするものである。さうして我々分析學者が母胎への退行、母胎象徵としての海への退行と云ふことを假定するその說が全然覆されたのであらうかと自問せざるを得ない。

この難局から脫する唯一の道は、兩者が同根から生じてゐるとの思想の歸結に依ることである。生物の發生過程に於ける生活環境が事實上、原始生存狀態の再現である（例へば胎兒の母胎羊水中に於ける存在をこれであると我々は考へるのであるが）ならば、卽ちまた受胎と云ふ過程や、胎芽細胞の發展（精蟲と卵子）に符合する何事かゞ種族發展史上にも存在してゐなければならない筈である。その『何事か』と云ふのは、太古に於いては單細胞物が存在し、それが太古に於ける宇宙の大變動のために變革を被り、他の單細胞物と合一することになつたと云ふ事でなければならない。これはやはりフロイドがその著『快不快原則を超えて』の中で下してゐる假定であつて、この假定はプラトーンが『シムポジオン』の中で與へてゐる詩的想像に基いてゐるのである。この想像に依れば、萬物は元、男女合體の者であつたのが、或る大變動のために男女別々になり、この二者が互に別れた相手を求めそれと合一することに依つてそこに有機體としての活動が開始せられると云ふのである。併し次のやうな考へをそこに附加したとしても、そのために右の想像的假定は必ずしも根本的に變更されたことにはなるま

い。卽ち、胎芽細胞が發育する間、受胎の間に、原始生物時代からの歴史的發展が反覆される、從つて生物は始め無生物から獨立し發展したものであるが、或る新たな大變動に依つて元の無生物に還元せしめられることになつたのであると。また單細胞生物の內には、過渡期的な生物がある。その生物は水陸兩棲類の或るものゝやうに生殖のために合體する生物と合體せぬ生物との中間に位置を占めるものである。現に博物學書を繙いて見ると、このやうな原始的生物の或るものは、自己の生命を脅す如き狀態（例へば、身邊が乾燥しさうな危險狀態）に遭遇すると、相互の間に合體の流行病の如き狀態を惹起し盛んに性殖的結合を行ふのである。然るにかの學才あるベルシェ W. Bölsche（譯者曰、ドイツの生物學者、多分現存すべし、ダルヰンに關する研究書などあり）は、そのやうな結合が本來、相互喰合ひの一つの洗練された形式に外ならないと云つてゐる。して見ると結局、最初の細胞合體は、我々が最初の性交を考へたのと全く同じやうにして起きてゐるのである。水を離れた魚類が最初に性交への試みをしたのは、失はれたる水中の濡れた養育の場所を他の魚の體內に再發見しようとの試みであることを意味してゐる。が、それと似たやうな、併しもつと古代的な大變化が起きて、單純細胞生物は相互に喰合はねばならなかつたかも知れない。そのやうな喰合ひに於いては相手を無くして了ふことは出來ないのだ。そこで一つの妥協的な結合（一種の寄生狀態）が生ずることになる。このやうな結合狀態が暫く續いてゐる內に、常に再び原始狀態へと退行して行く。卽ち受け容れられたる細胞からして再び『原始細胞』„Urzellen"（最初の胎芽細胞）が分れ出て來る。このやうにして胎芽細胞の結合（受胎）と胎芽細胞の分離（精蟲と卵子）とが永久に輪廻することになる。このやうな考へ方とフロイドの考へ方との唯一の相違は、前者が生命の無機物からの發生と受胎と云ふ過程の發生とが時間的に相互的に繼起してゐるとするに對し、後者は兩者が同一の原始大變動に依つて同時的に發生したとするにある。

併しまた受胎過程は、（動物界に於ける性交機能の發生の原因であると我々の見做したのと同樣な）原始大變動の反覆に外ならないとしても、我々は恐らく我々の性殖器說を放擲するには及ぶまい。さうして我々の性殖器說と『性器發生以前』の生物の生活狀態の確かな事實とを調和させやうと試みることも出來る。これを調和させるためには、たゞかう云ふ風に想定するだけで十分であらう。——卽ち、性交行爲並びにそれと同時に起る受胎行爲に於いては、單に個人的大變動（出產）及び最後の

種族的大變動（乾燥）のみならず、生命發生以來の從前のあらゆる大變動が一つに混融されてゐる。從つて有機體の感情の中には、母胎內の安泰感、親熟せる環境に於ける安泰なる存在のみならず、生命發生以前の安泰感、卽ち無機物的存在の死の安泰感（譯者曰、フロイドの所謂死の本能）もまた表現せられてゐる…と。原始動物時代に被つた大變動の危險を人間として廻避する方法、卽ち受胎は實は模範として役立ち　また受胎及び性交の各々獨立的の兩本能をして一つに混融せしめるに寄與したのだ。受胎と云ふことが模範となつてそれが個人（が何か現實の危機に會した時にその個人）の反應の仕方に影響を及ぼすと云ふ考へ方は、個人的見地から云へば現實的危機（大變動）の緊張も個體發生的大變動や種族發生的の大變動の緊張と同樣にたゞ重苦しい不快に外ならないと云ふことゝ、必ずしも撞着はしない。

性交機能と生殖機能とが一致してゐることは不思議のやうであるが、併し性交機能が以上述べた通り、水陸兩棲類に於いては、（それよりもつと古代的な生物の被つた大變動に際しては當然必要であつたのと）同じ變動危機廻避法（他生體との合一）をとつてゐることを考へて見れば、この不思議は不思議でなくなる。統一化的傾向（Unifizierungstendenz）と云ふこと、卽ち二三の事柄がその意義の類似のために一つの行動に統合されると云ふことは、あまねく心理にも行亘り、而も肉體にも顯現してゐるが、併しそれにしても、下等有脊髓動物に就いての二三の取調べに依ると、現實の排泄物（糞尿）、性器に集約されてゐる性的緊張、並びに（胚芽原型質中に貯へられてゐると我々の考へてゐる）不快材料などの統一が見られると云ふは、敢へて不思議でない。

×

男女（雌雄）が性交し、同時に（或は直後に）卵子が精子を受胎することを考へて見ると、雌雄の肉體が胚芽細胞の活動を細かいところまで模倣してゐるのだと云ふ印象を受ける。男性器が膣內に這入る如く、精子は卵子の小孔に侵入する。少くとも性交の瞬間に於いては、雄の肉體は單なる大精子に過ぎず、雌の肉體は單なる大卵子に過ぎないと云つて差支へないやうに思ふ。と同時に例の學界一般から輕視せられた『アニマルクウリスト』たち（生理現象、病理現象を微細動物の所爲として說明せんとする學派）の考へ方にも理解を持つやうになる。彼等は、精子と卵子とを固有の生物、微細動物と見なすものである。吾人も亦、精子や卵子は或る意味で極微動物であると考へてゐる。精子卵子は始めて性交した細胞の復活したものである。

そこで性細胞の包みである肉體は、元來これを守護するだけの使命を有するに過ぎないものであつて、この第一の使命を果し、且つ現實原則の必要に順應するの役割を終つた後には、性細胞結合を共に享樂することを自ら敢へてせず、かくてそのための特別裝置たる性交器關が發達して來たのだと云ふ風に考へられる。……總て發達と云ふことはかゝる方途を辿るのである。卽ち始めの程は現實の必要に應ずるための使命を果し、後には（一時已むなく放擲されてゐた）頭初の事情（立場）を復活させるのである。

以上のやうに考へ來つた後には、我々は恐らく次のやうな考へ方を受容れることはさして困難でなからう。卽ち、個人の性生活の亢奮が滿たされざる場合にはその亢奮契機は性器に集約せられそこから發散せられると同樣に、種族的發展途上のあらゆる大變動の記憶痕跡は胎芽原型質の中に集約せられてゐると。これ等の記憶痕跡が胎芽原型質中から働き出すことは、丁度、外傷神經症患者の障害されてゐる亢奮が患者の心理中から働き出す、（とフロイドの云ふ）のとその意味が同じである。この記憶痕跡は嘗ての苦しい立場を繼續反覆する方へと自ら强迫する。（尤もその强迫の仕方は質的に量的に非常に微弱な程度に於いてゞはあるが……。）かくして反覆の度毎に、偉大な不快緊張の一小部分が解消せられるのである。で、我々が遺傳と名付けるところのものは、恐らく外傷的不快反覆の大部分を子孫に遺すことに外ならないであらう。併し遺傳總體としての胚芽原型質は祖先から受嗣ぎ、子孫に依つて更に持續せられる外傷的印象の總量である。で、これはつまり、生物學者たちが採用した“Engramme”の意義であらう。フロイドの死の本能說——無機物に還元して安泰を得んとの傾向があらゆる生物を支配してゐるとの說——を受容するにしても吾人はなほこれだけの事を附言しておかねばならない。卽ち、外傷的な障害に依る亢奮材料が一時代から次時代にそのまゝに讓渡せられる間に、個人の生活に於ける亢奮それ自身は經驗それ自身に依つてさへ發散せられ、かくて（もしそこに新たな障害、又は大變動が加はつて來ないならば）漸次に全然無くなつてしまふ。この事は當該種屬の絕滅すると云ふことゝ同じ意味である。

性的緊張は受胎に際して弛められるが、その緊張の不快感の本性こそは、旣に述べた通り、性器と排泄器關とが合一した窮極の原因であらう。去勢の傾向は非常に一般的に行亘つてゐるが、殊に精神病者に於いて激しく現れるが、これも要するにこの不快感に堪えられぬまゝになされることであらうと云ふことは、嘗て吾人が指摘して

おいた。この考へ方を恐らく種族史上から支持するものは、高級哺乳動物に於いて男性器腺と女性器腺との垂下と云ふことが始まつてゐることである。胎芽腺は下等動物に於いては終生存續してゐるが、高等動物に於いては胎兒期の終りまで存し腹膜が後になつて裏返つて骨盤腔内に沈下し、睪丸が睪丸嚢皮を被ぶつて外方へと出る。この垂下がたゞ交尾期にのみ見られて、その期が濟めばまた元のやうに上つてしまふ如き種類の動物(鼴鼠)もある。またその胎芽腺がたゞ交尾の際にのみ自然に垂下する動物もゐる。

排泄器關への空間的近接傾向と並んで、垂下物の中には胎芽腺が全部的に自由にならんとする傾向が表はれてゐる。自由になつて遂に腺の排泄物の排泄を以て滿足せんためである。丁度、吾人が性交の分析に際して、勃起を性器全體を放出せんとの傾向あることとして解釋したと同じやうである。併し、かゝる傾向への意圖は結局、射精としての放出だけに限定されることになつてはゐるが――。

我々は受胎と云ふ過程を惹起す動機を、それと符合する性交動機(これまたやはり心理的に研究し得るものだ)この類似點からばかり知らうと欲するから、受胎過程に受胎の方へ驅立てる不快てふ契機が、並びにそのやうな性質を「快樂的」に反覆する傾向が、共働してゐるかどうかと云ふ問題に就いて、何も判然とした事を云ひ得ないのだ。如何にして我々がその動機をエロティッシュな本能として、緊張を蓄へておいてはその緊張を弛めることの快樂を享受する本能として、他の本能から區別したかと云ふことに就いて、何事かを云ふことが出來ないのだ。併しながら我々はこの可能性を無視すべき理由はない。性交の生理的過程に於いては、純粋に外傷的な强迫と、色慾的な壓迫とが妥協して發現してゐると云ふことを假定する勇氣があるならば、さうして胎芽原型質とその細胞的要素とに、不快を動機とする融合の傾向が存すると云ふ見方を避けないならば、卽ちこの結合に於いてもやはり同樣に、快樂追及の動機が共働してゐる筈だと云ふ風に考へることは我々の慰めとなるわけである。

(未完)

オスカァ・ワイルドのサディズムに就いて（コリアット）

西澤揚太郎譯

以下はアメリカの精神分析學雜誌『精神分析評論』"The Psychoanalytic Review," Vol. 1, Nr 3, July, 1914 所載 "The Sadism in Oscar Wilde's 'Salome'," by Isador H. Coriat, M. D. の譯である。筆者はマサチウセッツ洲のボストンに居住してゐるが、ニウヨウク精神分析學會に屬してゐる。なほ、この中に引用のサロメの臺詞はすべて日夏耿之介氏の譯文を借用したものであることを斷つておく。

×

ヘロデの娘サロメの求めによつて聖ヨハネの首を斬つた話は、マコ傳に誌されてあるが、それはすでにマタイ傳に述べられてある事件を敷衍したものにすぎぬ。この兩つの物語ではヨハネの斬首は、彼がヘロデの結婚——その兄弟の妻との婚姻——を不法にして近親姦的だと批難したゝめに行はれたもので、その目的は政治的並びに宗敎的であつたと述べてある。ヨセフスはこの物語に就いて實際上同一の説明を與へてゐるが、グレーツ Graetz はまた彼のユダヤ史の中で斬られた聖ヨハネの首を皿に載せて持つて來る、その話は『ほんのお話』に過ぎないとしてゐる。舊約聖書にあつては、サロメの母ヘロデヤが舞ひの報酬としてヨハネの首を要求するやう娘サロメに勸めたとあるが、英國十九世紀末の詩人オスカア・ワイルドがこの物語を劇化するに當つて、サロメがその母からは何らのヒントも與へられずに直接自らヨハネの首を求めるやうにしたのは、この物語をかう改作することによつて、サディスティックな衝動なるものについての彼の考へ方を適切に著はさうとしたためであつた。しかし兎も角、舊約聖書に於いても、種々な歷史的説明に於いても、聖ヨハネの斬首は宗敎的或ひは政治的目的以外のために行はれたものとはなつてゐない。然るにワイル

ドはこの傳說を劇化するに當り、これをサディスティックな物語として改め、そこに人間の性的倒錯や多形的な性本能に對する彼の洞察を盛込んでゐる。といふのは、ワイルド自身がすでにそれ等の倒錯や本能の所有者の一人であつたからだ。悲劇『サロメ』に於いて、彼は主人公サロメをサディストとして描き、彼女が聖ヨハネの首を欲しがるのは、宗教的或ひは政治的復讐のためではなく、たゞ彼女のサディスティックな慾望を滿たすためだとしてゐる。

これは一つの放膽な着想である。けれどもワイルドは、周知のごとく同性愛の傾向の强かつた人で、彼自身の中に確かにサディスティックな傾向の潛んでゐたことは、彼の他の作品の中にもこれを發見することが出來る。たとへば『ドリアン・グレイの繪姿』に於いて、この小說の主人公は苦痛とか又は『惡德と血と倦怠とのために怪しく狂ほしくなつてゐる人々の怖ろしくもまた美はしい姿』や楕門の話を讀むことに『怖ろしい魅惑』を見出してゐるのだ。同様に『レディング監獄のうた』に於いては、次のやうな節（スタンザ）の中に、明かにサディスティックな感情を我々は認めることが出來る。

『若くして戀人を殺すものもあり
老いてその戀人を殺すものもあり、
快樂の手もて首をしめ殺すものもあれば、
黃金の手もて絞め殺すものもあり。』

ワイルドが『ドリアン・グレイの繪姿』でかくも明瞭に生き生きと同性愛を描寫し得たことは、しかし敢へて驚くに足らぬ。何故なら、ワイルドは彼自身に非常に根强い同性愛的傾向を持つてゐて、從つて彼は性的錯倒がしばしば多型的であるといふこと、また彼自身の同性愛の中にサディズムの强烈な要素があつたといふ事實に氣がついてゐた筈だからである。彼が『サロメ』の中に描寫してゐるのは、實はこのサディズムである。このやうであるから、この悲劇『サロメ』は、『ドリアン・グレイ』の同性愛が自傳的であつたと同じ意味で、また自傳的であると云へる。實際この芝居が巴里で上演されておよそ一年の後には、あの有名な男色事件のためワイルドは二年の刑期を獄舍に送つたのである。この美はしい悲劇の中で、ワイルドは性慾と虐待慾との間に非常に密接な關係のあることをはつきりと示してゐる。

サディズムは普通、男性より女性に於いて尠い。從つて、女性の場合のサディスティックな傾向を理解することは難しい。何故なら女性は性的に攻擊的であることは

尠いからである。しかしながらこのサディズムの無意識的根源は男性と同じく女性にも存在する。が、女性はその攻撃的性的態度を完全に昇華させるのである。これは疑ひもなく太古からの社會の抑制的な影響によるもので、この女性に於ける抑壓された性的攻撃慾は社會的な軋轢となつて爆發する場合がある。一例を擧げれば、英國に於ける婦人參政論者たちの運動がこれである。

この悲劇はその臺詞を辿つてゆくうちに、サロメのサディズムがバプテスマの聖ヨハネをたゞ快樂のために殺すことによつて完全に滿足せしめられる有様がありありと描き出されてゐる。サロメの性的感情は明らかにヘロデによつて喚起させられたものである。彼女が初めて舞臺に現れる時、彼女は次のやうな言葉を云つてゐる『もう彼處にはゐたくない。ゐられはせぬのぢや。何故に陛下はしよつちゆうあの顫へてゐる瞼の下の鼹鼠のやうなお眼でこのわたしを凝然と見詰めてゐなさるのぢや。お母さまには國婿の王君さまが、あんな風にわたしを見詰めなさるのは異なことぢや。』ヨハネに對する彼女の最初の性的興味は『ヨハネよ、再つと口をきいておくれ。そなたの聲音はこの耳には樂の音のやうにひゞいてくる』といふ言葉から始つて『ヨハネよわたしはそなたの肉體を戀ひ慕うてゐるのぢや！……この世の中にそなたの口のやうに赤いものはない。そなたの唇に接吻けさしておくれ、ヨハネよ、そなたの口に接吻けがしたいのぢや。』といふエロティックの反覆語に至るまで、怖ろしき烈しさをもつて表現せられてゐる。

ヘロデの誓ひの後、やがて祝宴が張られた。この時サロメはこの芝居のはじめの方で自殺した若いシリヤ人（その若者に對してサロメは多少愛情を持つてゐたのである）の血の中で跣足で舞ひを舞ふ。かうした人間の血の中に跣足で踊ることは、彼女のサディズムがはじめてその抵抗に打克つたことの今一つの證據である。このサディスティックな慾望の滿足の恍惚境は、彼女が井筒の上に身をかゞめてヨハネの死刑執行を眺め、首斬役人に向つて『お斬り、お斬り、ナアマン。斬れいと申すのぢや』と叫ぶ時にその高調に達してゐる。彼女の性的興奮はこゝでは、相手の苦痛と懊惱とを見ようとする彼女の願望と一致してゐる。

サロメがヨハネの斬られた首を掌にした時、彼女はそのサディスティックな恍惚境の頂點を示す。すなはち『おう！　ヨハネ、そなたはわたしに接吻けをおしでなかつた。さあ！　これから接吻けをしてやる。熟みつはつた果物を嚙むやうにこの齒で嚙んでやる。さうぢや、わたしの接吻をしてやる……嗚呼、ヨハネよ、ヨハネよ、

このわたしがたつた一人愛しうと思ふたのはそちぢや。ほかの男たちはみな大嫌ひぢや。たゞ、そちは、そちばかりは美しい男子ぢや。……そちの肉體のやうに白いものはこの世になにもない。……わたしは、ヨハネよ、そちを見て戀慕したのぢや。ああ！　ほんにそちに戀ひこがれたわたしぢや。今でも、ヨハネよ、そちを戀しう思ふてをる。そちだけを戀しう思ふてをるのぢや。……そちの美しさに渇いてをるのぢや。そちの肉體に飢えてをるのぢや。酒でも果實でもこの樂慾を慰やしてはくれぬのぢや。……わたしは處女の身でそちに乙女の操を穢されて仕舞うた。無垢な身であつたのに、この血脈の中に焰をいつぱい注ぎ込んでしまつたのは、そちぢや。』

リビドウの攻撃的方面が完全に滿足せられたので、サディスティックの恍惚境が最後に慟哭となつて、この悲劇は終つてゐる。『ああ！　ヨハネよ、そちの口に接吻けした。そちの口に接吻けをした。そちの唇に苦い味がある。血の味かしら？　ことによると戀の味かも知れぬ。……ぢやが、それはどうでも佳いことぢや！　どうでも佳い！　そちの口に、ヨハネよ、わたしは接吻けをしたのぢや。』

彼女のサディズムはたゞ恐ろしい行爲としてだけしか理解されなかつた。で、彼女はヘロデの命によつて殺される。かくしてこの短い悲劇は終つてゐるのであるが、たゞそれは文學に於けるサディスティックな衝動の描寫の最も素晴らしい例の一つであることに變りはない。同時にそれは、ワイルドがもつてゐた如き同性愛的の甚だしいサディスティックな感情を自分自身の內に有してゐる人だけが能く描きうるものである。（完）

以上の論文に於いて去勢コムプレクスが少しも問題になつてをらぬことは不思議である。サロメのサディズムが何故にヨカナンの首をとることの形式をとつたのか。それへの說明は去勢コムプレクスを以てするより外に分析的方法はあるまい。また『お母さまには國婿の王君』なる父王から『瞼の下の鼴鼠のやうなお眼で見詰められ』た、從つて恐らくは父コムプレクスの强かつたであらう少女でサロメがあつたこと、さうしてこのコムプレクスを父代償としてのヨハネに轉嫁したらしいことを問題にしなかつたのも不思議である。（編輯者附記）

失戀者の性慾と其の發現の理論化

石井佐太郎

私は偶然な機緣から二人のその態度に於いて酷似せる失戀に由る放蕩者を知つた。此兩人は生れ付きから、境遇、經歷が全然異つてゐるに拘らず放蕩に對する態度や辯解が殆ど同一人と思はれる程似て居るので、聊か分析的に興味を覺えて研究して見る事にした。

×

一人は或る大學生であるが、札附きの放蕩者である。彼の友人仲間では有名なもので誰しも「君の如き放蕩者は……」と話し掛ける。彼も放蕩者を以つて自任し、恬然として憚らない。而して遊興を事とし自ら童貞を守る友人等の態度を輕視して、聊さかも自省しようと試みない。遊興の爲に學業に支障が出來ても、巨額の負債が生じても餘り後悔の無い樣子で、呑氣に構へて居る。尤も「君は後悔をしないか?」と尋ねると「別に遊興其物に對しては悔いて居ない。只、少し金を使ひ過ぎた」と言つて居るのみである。彼は一度買つた女は決して二度と買はない。誰でも良い、只性目的をさへ得られたら良いのである。「先日遊んだ女がこんな事を語つた。貴方に招んで頂いたのは二回目で、ずつと以前にお出會ひした事がある。妾達仲間では貴方を伯耆守と名付けて居ます。何故つて片端から撫でて行くからだと。どうだい僕も有名になつたものだらう。僕が死んだら〇〇町に銅像が建つよ」と語つた。

私は彼の過去の事を知り度く思つて、彼の友人から種々の事を聞き出した。彼の境遇は暫く措き、戀愛のみを綜合すると、初戀の女があつて十七、八歲頃から二人は戀を語つたのである。その關係は極めて感傷的で未だ肉體關係に入らないで、美しい海邊で夜毎に會つた。其後彼の高等學校生活の中頃迄は手紙の往復が絕えなかつたが、如何なる理由でか、女は彼を見棄てて他に嫁して仕

舞つた。それからすつかり學業を怠る不眞面目な放蕩學生と化し去つたのだと云ふ。而して彼の戀愛事件を彼は決して他に洩らさず、僅かに二三の親友に打明けたのみである。又彼は如何に結婚を勸められても耳を籍さうとしない。

×

今一人は大阪の商人である。親や先輩の前でも、「女の居ないやうな土地は辛抱出來ません」と、公言して居る。而して結婚適齢期を超えて居ながら、これまた全然結婚の意志を缺如して居る。少しでも小遣錢の餘裕が出來ると直ちに遊興費に使用し、享樂的で談話の際に少しも蔭鬱な影は無い。一度遊んだ女は二度と遊ばないし、同じ家に二回と足を踏み入れない。「〇〇遊廓に三千人からの女が居るよ。一年に三百人としても十年は掛る」と公言する。極めて無反省であるが、時に「遊ばなければ芽が吹くのであるが、遊ぶから頭が上らない」との口吻を洩らしてゐる所を見ると、矢張り浪費の後悔と罪障感とは持つてゐるのであるが、又一部惰性が彼を支配して居ると言つても良いであらう。

彼の過去の戀愛に就いては斯る話がある。彼が二十歳頃から勤めて居た大阪の相當な商店に、勝氣な長女があつた。彼と年齢的に餘り差が無かつたので二人は直ぐ仲良くなつたが、主人の娘と店員との間の戀愛は幾多の障害があると共に、其表現樣式も異なつたに違ない。「おいとはん(大阪語では娘さんの事)はこんな事を言ふよ」と彼は語つた。

「妾はお前の顏見るのさへ嫌だから、今度商用で旅行した時、何處かの海にはまつて死んで二度と歸らぬやうにしなさい。」

「ハイ〳〵私も貴女が嫌ひだから、何處かで死んで來ます、その方が大阪に歸つて來るより樂です。」

又——

「いや、矢張り達者で此度の商用を濟ませて歸つて來なさい。感冒など引かぬやうに。」

「大丈夫です、僕達者ですから決して病氣になど罹りません。」

此等の話をする時の彼の態度は、何でも無い事だと聞手に思はせやうと極めて平氣を粧うて居るが、深い感傷癖に陷らないやう努力して居る樣がありありと見えた。ほんの座興と云つたやうな話し振りであるが、相手の感情を捉へる事に於いては極めて忠實であつた。實に是等の會話はお染久松式の戀の口説に外ならない。其後彼は如何なる理由でか知らないが、其店を出て早くから獨立自活の道を講じた。此の主家を出た理由に就いては一言

も説明しない。恐らくそこに其のおいとさんとの何かの經緯が想像されるのである。

「僕が先の家をやめてから或る日自轉車に乘つて街を走つて居ると、向ひ側からおいとはんが歩いて來たのだ。僕は何かしら怖ろしい氣持がして誰かに衝突する位の勢でフルスピードを出して自轉車を飛ばしたよ。」と語つた。彼は、自己の内心を感傷的に語るやうな性格ではない。故に此等の言葉に依つて彼の深い失戀を知る事が出來る。又、私が爰に喋々するまでも無く斯る失戀者の放蕩は世上に其例を多く見る事であらう。更に換言すれば此の失戀外傷か他の何かの外傷を有せざる、自己の放蕩を理論化しない放蕩者は精神分析的に言つて存在しないかも知れない。

×

リビドーは幼兒的な感傷的の流れと、思春期に於ける肉感的の流れとが合して一定の方向に走る。然るに何かの支障が對內的（所謂自我の分裂）にか對外的（失敗、境遇の變化等）に遭遇すると此れ等二流の合致が破れる。感傷的の流れが停頓して肉感的の流れのみが、無規律に、低調に跳躍する。これ失戀者の自棄の心理で、善惡感を度外視して只自嘲的に復讐的に肉感を滿足せしめんとする行爲を起すやうになる。しかし人間は善行や名譽に對する憧憬を持ち、フロイドの謂へる如く良心の核は社會的憂慮（Soziale Angst）であるから善惡感を度外視した自棄的な行爲に無意識からの滿足を得る事は出來ない。自分の浪費や遊興に絕えざる自責の念を持つて居る。金錢でももつと有意義に使用すべきであるがと悔い、放蕩の動機が周圍に完全に認識されないことを承知してゐる。さればと言つて、何時迄も忘れられない失戀も甚だ苦痛である。

マルブルグのクレッチメル教授は其著「體質と性格」（Körperbau und Charakter）に於いて、人間の性格を循環樣氣質（Zykloide Temperament）と分離樣氣質（Sy-soide Temperament）とに分類して居る。此の分類を、私は醫者であるから、實際上によく適合する妥當なものと考へて居るが、成程循環樣氣質と分離性氣質の分類は意識領域に於て完全に妥當でも無意識領域では妥當的で無いやうに思はれる。特に戀愛に於いては必ず分離性氣質の充分なる發現が見られるのである。換言すれば如何なる循環樣氣質でも一旦戀愛となれば必ず分離樣氣質となると謂へるであらう。從つて失戀者が必然的に分離樣氣質的になるのは當然であらう。

今世界文學史上に於いて戀愛の極端なる對照をなす代表的なものを擧げると、ドン・ファンとダンテである。

ドン・ファンは決して一人の女に執着しない。一人の女の美しい所、良い所のみをとつて嫌になればあつさり別れて仕舞ふ。そして又次の女へと移つて行く。尤もドン・ファンに學ぶべき所は決して女を甘やかしたり、氣嫌をとつたり、更に良い事は決して虚言を吐かない。嫌になつたとあつさり云つて決して一時逃れの言葉を言はない。これに反してダンテは、戀する女は只一人のやうに「神曲」に書き、所謂永遠の女性ベアトリイチェを絶對唯一人の戀愛對象にして居る。尤も彼の傳記に依ると、第二の愛人ゼンマと言ふ彼の妻があるが、ゼンマは現實的であるに反して、ベアトリイチェを、(ロンブゾローがダンテを精神病者と斷じた程)神の如き、永遠のもの、天國的なものと考へ込んで居る。卽ち戀愛の特質たる自我の投出作用が完全に行はれて居る。ドン・ファンの戀愛は循環樣氣質を表し、ダンテのそれは分離性氣質に相當すると云ひ得るが、無意識學から言へばダンテは完全な感傷愛の流れの代表で、ドン・ファンは肉感的の流れの代表である。

×

多くの小說詩歌は、總べて分離樣的に戀愛を描いてゐて、又これが眞理である。最も手近な一例をとれば、小島政二郎氏が「朝日」に書いて居た「花咲く樹」の中に全然行き方の違つた二人の女性卽ちおなみとエマ子を描いて居るが、エマ子の戀愛的生活は表面循環樣性(感傷的の流れ)に見えるが、只生活の爲と隱し子優夫の爲に身體を男に提供してゐるのみで、彼女の感傷愛は旣に存せず、只苦い失戀が心底を占めて居るのみで矢張り彼女の戀愛の行き方もおなみと同樣分離樣(肉感的の流れ)的である。

これで大體失戀の分離樣的である事を明らかにしたが失戀となると其の經驗は長く尾を引いて、失戀者的人生觀が行動を無意識的に制肘し、自ら失戀者の烙印をつける。これは大半無意識內で行はれるのであるから意識的に無知の場合が多い。現に私は前例の大阪の商人に「君は失戀したのだらう?」と云ふと「冗談ぢあない、僕が失戀などするものか」と答へたのみである。

多くの失戀者は强烈なるナルチスムスの所有者であれば、直ちに新しき戀愛に入つて行くだけの積極性を持つてゐない。本誌前號に高水力太郎氏が述べて居られるやうに「敗北の屈辱と今後の同樣な敗北の恐怖の爲」に異性に對して消極的になる。これを助けるものにドイツの「三升の鹽を飮む迄は新しき友に心許すな」と云ふ心理がある。これを精神分析的に謂はば、先の裏切つた友の事が完全に意識面から除外され、無意識內に於て理論化さ

れて自我衝動に適合すべき思想體系に組織化される迄は新しき友に、先の不快なる經驗の惡感情が轉位せられ易いことゝなる。これと同じ事が失戀に於いて言ひ得る譯である。友に裏切られた位ならば其の個人生活は殆ど邪魔されないが、失戀の場合は性本能に關係して居るが故に本能と思索との間に大きい混亂が生ずる。新しき戀愛をする氣力は未だない。從つて結婚する意志は無い。然る時は自分の性本能は抑壓される譯である。しかし分裂苦悶は失戀の爲であるから抑壓に成功しないで却つて强く、時に變態的に性的興奮を高める結果となる。此の二つの相反する結果をよく一致妥協せしむるものは、換言すれば理論化するものは、實に感傷愛を拔きにして性目的其自身を享樂する事である。先に擧げた二人とも決して一度知つた女と二度と遊ばうとしない。そして只轉々と女から女へ移つて行く。性目的は求めても感傷愛に觸れる事は避けて居る。

×

この型の遊び方を又別の視角から見れば、多人數の女の最も良い特徴を少しづつ集めて來る、一人よりは美しき唇を、一人よりは崇高なる鼻を、一人よりは淸らかな眼を、可愛ゆき耳を、良く發達したる體軀を、優和な物腰、優しき言葉使ひ、柔順な態度を求め、これを無意識內で組立てて一つの偶像、卽ち失戀の女を作つて、失戀の不幸を挽回し補償せんとする努力であるかも知れない。卽ち一人の女性を深く知るより多くの女性を淺く廣く味つて行かう。さうする事によつて失はれた戀愛を補償しようと云ふ無意識的努力では無いか。（本誌第二卷第一號、「千軒盜み分析考」參照。）もし此の努力が成功した場合には失戀者でなくなると共に、リビドーを或る意味で滿足せしめて居る譯である。

×

放蕩者と謂はれて居る失戀者は、餘り自己の失戀事件を人に語らうとしない。初めに擧げた學生など僅か一、二の親友に洩らしたのみである。彼の頭腦內では自らを悲劇の主人公にしたローマンスが展開され、繰返されて居る。此の點に於いては如何なる人も分離樣的で、人に暴露して一般的なものとするよりは小さい心內で暖めて居る方が其個人に悲劇的な快樂を與ふるのであらう。啄木の歌に

打明けて友に語り何か損をせし
如く思ひて友と別れぬ

と言ふのがあるが、語ると言ふ事は尙複雜な心理解剖を必要とするが、恐らく此の歌の如き心理が失戀者にあるだらうと思はれる。憶ひ出すのは高良武久氏が其著「性

格學」に於いて分離樣氣質を說明して居られる處に、次の如き一節がある。

「ある青年は美しかるべき青春を眠り過して、だらしも無く茫然としてゐるので、時々これをゆすぶらねばならぬ程である。彼を馬背に置けば直ちに落下して皮肉げに當惑の笑ひを洩らす。彼はむつつりして居る。或る時彼の手から一卷の詩集が世に現はれる。優麗を極めた自然の調べ、格調は整ひ律動は洗練されて居る。而して無作法な俗輩共が、行きずりに與へたあらゆる刺戟が彼の內部的悲劇の中に織り込まれてゐるのである。」

これは私が丁度爰で述べたいと思ふ所である。失戀しなかつたならばこんな放蕩はしないだらうと云ふ自覺はあつても、如何なる理由の下に斯く放蕩に驅り立てられるか知らないが、無意識內では完全に自分の放蕩を合理化して、自分の行爲を當然なものと見傚して居る。而して他人が自分を非難するのは自分を知らない爲だとして耳を籍さうとしない。ある農家の二男坊が都會から歸つて來て精神病者のやうに暴れ廻る。夜など少しも寢ないで一晩中騷ぎ立てて困るから、一度診て呉れと賴まれた事があつた。行つて診ると、兩親や兄弟達が總立ちになつて其患者の後を追つて、丸で家の中で鬼ゴッコをして居る有樣である。そして兩親や兄弟達を盛んに嘲つて、「醫者どんに診て頂くのだから汗があつては失禮だ」と素裸になると更に家人が劇しく叱責する。私は本人を一人だけ少し離れた小屋の中に連れて行つて先づ彼の氣を落ち付かせて、眞に彼の味方の如き態度をとつて、彼の抵抗を出來るだけ去るやうに努め話し掛けて行くと、彼は存外素直に都會で女に裏切られた事を語つた。都會に居ても面白くないから故里に歸つて來ると家人が「怠惰になつた、仕事をしない、都會かぶれがして居る」など事々に叱責する。そして自分の何かやりたい事をしようと思ふと兩親が嚴しく反對する。それで益々面白くない、丸で手足を縛されて居るやうな感じだから何とかして自分の思ひ通りの事を遣り度いと思つて家人と衝突するのだと物語つた。

此の青年など頭から家人は自分の失戀の苦悶など理解して呉れないときめて仕舞つて、自分の行爲の如何に狂人的であるかに少しも氣がつかなくなつたのである。相馬御風氏の戲曲の「良寬と放蕩者」などは良寬が完全に放蕩者の味方になり、互の無言の意志疏通によつて意外に大きい效果を治めて居る事を書いた精神分析的に甚だ興味深い作と思はれる。

上述で私は失戀と放蕩との關係の輪廓だけ述べたが、隨分不明な尙攻究を要する點も多い。（九・八・一〇稿）

性慾と二重人格

大槻憲二

一、二重人格文藝の史的發展

精神分析學は人間の心理機構を自我とエスと超自我とに區分してゐるので、斯學は人間を三重人格者と見做してゐると云つても過言ではない。が、も少し單純化して考へる場合には、意識と無意識とに區別してゐる事になるので、精神分析は人間を總て二重人格者と見做してゐると云つても、これまた甚だしい間違ひではない。

ところでかう云ふ人間二重性格觀は何時頃から始まつたとか云ふと、それは人類思想史と共に古いと云ひ得るだらうが、ルネサンス以前に於いては、その人間觀は心理的でなく、世界觀的であつた。我々の內なる善は精靈の所爲とせられ、我々の內なる惡はサタンの所爲とせられてゐた。心理學的術語を以て云へば、我々の內なるものが總て外界に『投出』せられてゐた。それは丁度、神は人間が自分等自我の面影に似せて造り上げたものであるに拘らず、『神、己れに象どりて人を造り給ふ』たと逆に考へてゐたのと同じである。それを悟つたことは、これまた一種の『コペルニクス的轉廻』である。

ところで、この二重人格者としての人間觀を文藝上で最も判然たる形で現はし始めたのはゲーテであらうかと思はれる。ゲーテの『ファウスト』が『あゝ我が胸に二つの魂が棲む』と嘆じてゐるのは、即ちファウスト並びにその作者ゲーテに於いて二重の相矛盾する性格がその胸裡に戰つてゐることを告白したものでなければならない。換言すれば、ゲーテの內にはファウストとメフィーストフェレスとが共棲してゐたと見なければならない。否、もつと詳しく云ふならば、ゲーテの內には『天上の聲』（神、超自我）とファウスト（自我）とメフィーストフェレス（エス）とが共同生活してゐたと見なければな

らない。

物質的、肉體的快樂のために、惡靈と何等かの契約を結ぶと云ふ點でファウストと類似の二重人格文藝をドイツ文學中に求めるならば、シャミッソーの『ペーター・シュレーミール』Chamisso; Peter Schlemihl と、エーヱルスEwers の『プラーグの大學生』とが擧げられるであらう。前者『ペーター・シュレーミール』はドイツ文學に親熟してゐる人ならば皆知つてゐる筈であるが、一般的によく知られてゐる作ではない。後者の『プラーグの大學生』はコンラッド・ファイト主演の映畫が昭和三年一月頃に日本に渡來したから、記憶してゐる向も相當多からうと思はれる。

これ等二つの作品は物慾のために自分の『影を賣る』點が共通してゐる。シューミレールの方は地上に落ちた影を賣ると、惡魔はそれが宛も羅衣(うすもの)でゞもあるかのやうに、地上から剝がして疊んでポケットに收める。『大學生』の方では鏡に映る影を惡魔が手招きして、それを何處かへ連れて行つてしまふ、その點に相違があるだけだ。また『大學生』の方では、その別れた影が本體とは別に、單獨行動をとるが、『シュレーミール』の方ではさう云ふ事はなく、影は單に靈性の象徴となつてゐるだけであるらしい點に、相違がある。『不斷に努めるものは救はれる』とファウストの詩人が教へるやうに、物(金)よりも魂(影)を尊ぶことに依つて『よりよき自己のために生きよ』とシュレーミールの詩人は說く。

併しファウストやシュレーミールはキリスト教的な靈肉相克觀的の二重人格文藝で、今日の我々にはいさゝか陳い文藝思想であることは、何としても否み難い。それに比すると、『大學生』は遙に新しいところがある。

その新しいと云ふ理由の一つは、前二者が共に意識內の自己相克を描いてゐるに對し、後者は意識的自己と無意識的自己との分裂葛藤を描いてゐる點にある。『大學生』の主人公は決鬪に於いてその相手を殺さないと云ふことを愛人に誓ふ。然るに決鬪場に向ふ途中で、彼は既にその相手を殺して了つてゐる自分の『別我(ドッペルゲンゲル)(影、幽靈)』に出會ふのである。丁度我々が現實に於いて犯すことを自己に許さない罪惡を、夢に於いて屢々自ら犯す場面を見るのと同じやうに……。我々の心の中に我々の全然意識しない別我が存在してゐて、それが時々我々の意識的人格を裏切つて意外な行動に出づると云ふことを描き表はしたものとして『大學生』は異常な銳さと深さとを具へた作品である。

ドイツ文學ではなくイギリス文學ではあるが、スティーヴンスンの『ジーキル博士とハイド氏』(一八八六年作)

もまた『大學生』とは違つた意味で、意識的自己と無意識的自己との矛盾を描いた悲劇的作品である。紳士ジーキルが忽ち一變して獸人ハイドとなることは、誠に荒唐無稽な話であるに拘らず、讀者が見て敢へて滑稽とせぬのは、その底に深い眞實の存することを感ずるからである。深い眞實とは何であるか。それは作中主人公ジーキルの云つてゐるやうに『人間と云ふものは、本來、單一なる存在ではなく、實は二つのものである』といふことである。『互ひに爭つてゐる二つの性格が、兩方とも同じやうに私の性格であるといつて間違ひでないといふ譯は、私がその兩方を本質的に兼ね具へてゐたに過ぎないからだつた。』(野尻清彦譯)從つて、ジーキルは惡としての一面を憎んでゐないどころか寧ろこれを愛し、これを生かしたく思つてゐるのである。そのためにこれを生かす方法として人格轉變の靈藥を發見するに腐心し、それに成功するのであつた。ジーキルは鏡中に自分の別我であるところのハイド氏の面影を見た時『其醜き形像を見た時に、厭な感じがする所か、寧ろ飛立つばかりに嬉しく思ふのであつた。これとても矢張り自分の身である。自然的で人間らしい。自分の目から見れば、此方は其本心を表はすことが眞に迫つて居り、明瞭で純一であつたか。かのこれまで自分の顏と云ひ慣れてゐた不充分な二的の顏のやうなものではないのである。……』(豐島定譯。)近代人として自分の内なる惡にこれだけの愛を、生かし得べくんば生かしたいとの願望を、感じないものがあるであらうか。

『大學生』や『ジーキル』から、も一つ聯想される英文學の作品はオスカ・ワイルドの『ドリアン・グレーの肖像畫』Oscar Wilde; The Picture of Dorian Gray, 1890. である。『大學生』は鏡の中の自分の影を別我としてゐるに對し、『ドリアン・グレー』は畫面上の自分の繪姿を別我としてゐる。前者に於いては鏡の中の別我に惡事が轉嫁せられてゐるに對し、後者に於いては畫面の別我に善事が轉嫁せられて、現實の自己の方が惡事を享樂する。併し共に、最後の場景に於いて畫面と鏡面との別我に向つて現實自我の殺戮の手が加へられると共に、影と現實との兩方の自我が同時に生命を失ふ。これその責任の共通であり、本體と別我とが元々別物でないことを結果的に告白してゐる。

以上擧げた諸作は時代的にさう隔たりがない。年代順に配列して見ると——

一、『シュレーミール』(一八一三年作。作者シャミッソーは一七八一年生。)

二、『ジーキル』(一八八六年作。作者スティーヴンスンは

一八五〇年生。）

三、『ドリアン・グレー』（一八九〇年作。作者ワイルドは一八五八年生。）

四、『大學生』（製作年月不詳。作者エードゼルスは一八七一年生。）

これ等の時間的關係と、各作品の內容及び形式の類似とを思ふ時、我々は彼等の間に何等かの年次的影響を假定せずにはゐられない。たゞそれ等の影響の跡を只今細かく論證する暇のないことを遺憾とする。

なほ、も一つ云ひ添へておきたいことは、『フランケンシュタインの怪物』と題する作品が恐らくは『ジーキル』の影響の下になされた作品であらうと思はれることだ。さうしてこれまた一種の二重人格文藝である。たゞ筆者はその原本を未だ讀まず、嘗て渡來した映畫に依つて、さうしてまた長谷川誠也氏が東京朝日紙上で公にせられたその紹介に依つて、云々するに過ぎないのである。

二、ジーキルの性慾と人格分裂

フレデリック・マーチ主演の『ジーキル博士とハイド氏』Dr. Jekyll and Mr. Hyde, の映畫が日本へ渡來したのは昭和七年四月頃であつた。市川猿之助の模放的上演などあつて、劇壇は當時相當に騷いだものであつたから、讀者諸氏はあの映畫に就いて記憶してゐられる向きも多いであらう。ところで、あの映畫はスティーヴンスンの原作とは筋に於いて多少違つたところがあつたが、私には却て原作よりは映畫の脚色の方に面白い點が多くあつた。脚色者はサミュエル・ホーフェンシュタイン並びにパーシー・ヒウスの兩氏、監督はルウベン・マムウリン氏であつた。脚色者と監督者とに就いては私は何の知識もない。人格分裂と性慾との關係を更に細かく研究する第一の手段として、私はこゝに『ジーキル』を精しく研究して見よう。

映畫に於けるジーキル博士が服藥に依つて始めてハイド氏となつた時、『今や俺は自由となつた！』（ナウ・アイ・アム・フリー）と叫ぶのであつた。では、それまでの博士は如何に不自由であつたか。我々はこの作を分析的に批評するに、まづこの點から考察を始めなければならない。

ジーキルがハイドとなる以前の行動には幾多の不思議な點がある。まづ第一に、彼は慈悲深い醫師としてロンドンの貧民窟で神の如く崇はれ、施療病院の貧しい患者の面倒を見つゝ、つい許婚ミュリエルとの約束に遲れたり、忘れたりする事多く、そのため（と云ふことに、ミュリエルの父ケリユウ將軍は理窟づけしてゐるが、分析眼を以てすれば、或は娘をやりたくないと云ふ本心があ

つたかも知れないと疑はれる）ケリュウは寧ろジーキルを嫌つてゐる風がある。このジーキルの態度は、精神分析的に解釋すれば、リビドーを『昇華』（純化）させて性目的を無くしてしまつたリビドーを對象（道徳愛の對象としての貧民と、知識愛の對象としての學問と）に轉向せしめてゐるためである。然るに一方、そのやうに愛慾を昇華させて愛人との會見の約束をさへ忘れる程の木强漢が、他方に於いて、岳父將軍の主張に反抗して直ぐにもミュリエルと結婚させて貰はねばならぬと駄々をこねてゐる。かと思ふと、更にまた裏面に於いては、アイヴィと云ふ街の女に依つて祕かに慾望を滿してゐると云ふやうな不可解な行動もとつてゐると云ふわけである。

　このやうな矛盾した人格は原作者や脚色者が出鱈目に創造したものとは云へない。（原作には許嫁父娘や街の女アイヴィの話は出てをらぬやうだ。）精神分析の研究したところに依ると、このやうなのは大低の文明男子の一般的特質であると云つて、必ずしも大過はないのである。では、精神分析はこのやうな矛盾を如何に說明するかと云ふことが、次に我々の課題となつて來る。

　まづ矛盾の第一は、學問と藝術とのために愛慾を昇華させて、ために許嫁との約束をさへ忘れるほどの色氣のなさゝうな男が、何故に暫く待てと云ふ舅の主張を拒けて、直ぐにも結婚へと焦慮するかと云ふ事に存する。これは彼のリビドーがあまりに昇華されて（その他にも源因はあらうが）、本來の性目的を實行すべき對象に對しては既に多少とも不能（イムポテント）の傾向あるが故に、その自分の弱點を半ば意識しての不安に强迫せられての反動的焦らだち、又は强がりと解すべきものであらう。このやうなのは、實に神經症の一般的徵候として敢へて珍しくない。

　では次に、そのやうな不能的傾向あるジーキルが、何故に街の女とは關係を結び得るかと云ふ事が第二の矛盾である。この矛盾は、多くの敎養ある近世紳士がその尊敬する貞淑なる、さうして敎養ある妻に對しては不能であるが、他の尊敬するに及ばぬ、身分卑しい女に對しては不能でないと云ふ幾多の活事實に依つて容易に側光が投ぜられる。日本の某大學敎授は、正妻を娶るならば當然敎養と人格ある婦人を迎へねばならず、敎養と人格ある婦人に對しては自分は性的に不能とならざるを得ないが故にか、正妻を迎へず、交る〳〵來る女中と關係を續けてゐたと云ふ話がある。が、そのやうな男にとつても、もしその貞淑なる正妻が一旦あらぬ失敗に依つてその貞節が疑はれ、これまた普通の平凡な女に過ぎないと思はれるや否や、それに對して猛烈なる性能力が發揮せられると云ふ數々の實例があるとフロイドは說いてゐるが、

かゝる實例も亦、ジーキルの場合に對して、その說明の側光の一つとなり得るものであらう。

ジーキルはこのやうに、自己の矛盾に堪え兼ねたのである。このやうな性格の破產を何とか切抜けたいと常々惱んでゐたのである。その情熱は彼を驅つて、人格を轉變せしめ得べき靈藥の發明に向はしめたのであつた。彼はその發明に成功した。彼はこれに依つて美事にこの矛盾を克服し、アイヴィを淸算し、尊敬するミュリエルと立派に結婚し然も他方に於いて學問への獻身と社會的救濟の慈善事業とに邁進せむと念願したのであつた。

さて、彼はその靈藥を服用した。その結果は如何であつたか。彼の計畫は慥に、一面に於いて成功した。彼はアイヴィを征服して來たやうに、ミュリエルをも征服し得る强者となつた。彼は今やハイドとなつて、ジーキルを『弱蟲』(ウイクリング)と嘲ることが出來るやうになつた。併し彼はリビドー的には强者となつたが、社會的には不適當な存在となつて、最後の破滅へと導かれることになつた。『ハイドはジーキルに對して冷淡だつた。少くとも彼はジーキルの事を、山賊が追跡を免れるために身を匿す岩窟くらゐにしか考へなかつた。ジーキルが父親以上の同情を持つてゐるに反し、ハイドは息子以上に冷淡であつた。』このやうにハイドはエゴイスティック(或る意味では英雄的)となり、現實原則には合はない存在となつたのである。

こゝに於いてフロイドがその『文明的性道德と近代の神經質』と題する論文の中で云つてゐる事を想起して見ると、その意味が實によく分つて來る。——

『我々の文明は普く本能を禁壓することの上に成立つてゐる。一切の個々人はその所有、その全力、その性格上の攻擊的、性的征服的、復讐的の傾向の一部分を失つて、これを文明に寄與してゐる。この寄與からして物質上及び觀念上の財貨に於ける文明的所有は成立してゐるのである。この放棄と寄與とのために文明は發展し進步したのだ。個々の進步は宗教がこれを嘉した。人々が放棄した部分の本能滿足は、神への犧牲にとて捧げられた。かくして得られたる共通善は「神聖」であると說明せられた。不屈の資質あるために、このやうな本能禁壓に從ひ得なかつたものは、「社會」に對して犯罪者となり「追放者」(アウトロウ)となつた。但し、彼の社會的地位並びに優秀な能力に依つて、彼が「英雄」となり偉人となつてしまつた場合は別である。』と。

スティーヴンスンの原作に於いては、フロイドの所謂『性格の攻擊的傾向』はハイドに於いて可成り鮮明に描き出されてゐるが、映畫の方に於いては『性的征服的傾向』

の方も合せ判然と描いてある。この點だけでも私は脚色者の功績を讃へたいと思ふ。原作者はジーキルのやうな强者道德の悲劇への暗示を或はニイチェから得て來たかも知れない。（ニイチェの『ツアラトストラ』の出版は一八八三年、『ジーキル』の出版はその後三年目である。）併し我々は作者自身に於いて、近代人としてのその性神經の障害を豫想せずして、このやうな作品を期待することは出來ない。作者は或る夜の夢に暗示を得てこの作を物したと傳へられてゐる。夢に於いてその人の無意識心理の躍動することは我々にまで自明の事であるから、この作は作者の深い心的體驗に基いてゐるものであることは勿論である。ニイチェやスティーヴンスンは或る意味でフロイドの先驅である。

なほ最後に是非云つておかねばならないことは、その主人公の名前の匿れたる意味に就いてゞある。ハイド Hyde は hide のもぢりであることは明であるから（辭書にもさうある）、これは動詞として『匿す』と云ふ意味と、名詞をして『獸皮』と云ふ意味とがある。卽ち、『匿れたる獸性』hidden animality 又は repressed instinct との寓意であらうと察せられる。少くとも作者は作中でアッタスンをして『彼れの名はハイドと云つて隱れると云ふ意味だが、いくら隱れたつて俺は探してやる』と云はせてゐるところを見ると、何等かの寓意を仄めかせてゐたことは疑ひ得ない。なほ Hyde については英京ロンドンの Hyde Park が英國の讀者にとつて無意識的に聯想されると云ふことを忘れてはなるまいと思ふ。ハイド・パークはロンドン第一の大公園で『ロンドンの肺臟』と呼ばれてゐるほど、淸新で自由な世界である。ジーキルはハイドに轉身した時、『云ひ樣のないほど新鮮味が感じられた。さうしてその新鮮味のために、ひどく氣持がよかつた。私は自分の身體が若々しく、輕やかに、幸福になつたやうな氣がした。さうして心の中には激しい、向ふ見ずの念が生じ、とりとめもない肉慾的な幻影が、恰も水車を廻す流れのやうに空想の中を滔々と奔流した。義理や人情を絕して、わけの分らない邪魔な精神が自由を得たことを意識した』とある。ハイド・パークに這入つた時の自由な、躍動的な感じと聯想せられてゐたと考へる方が自然であらうと思ふ。

またジーキル Jekyll の方はどうか。Je とはドイツ語の意味に解せば Jeher, ever（「常に」「愈々」）の意味である。このやうに解釋するとこへの暗示を私に與へたものは、ドイツの叙事詩ニイベルンゲンリイド中の忠臣ハーゲン・トロンエ Hagen Tronje の字義が Ever protecting the throne（常に王位を守る）の意であらうと察せられる事である。Je は ever, kyll は kill のもぢりとすれば、Jekyll は ever killing oneself『不斷に已れを殺すもの』の意味となるであらう。作者に於いてそれほど明白な意識的意圖はなかつたとしても、無意識的意圖は多少存したであらうと察せられる。

少くともかく解することに依つてこの作品の解釋が一層完全になることは確かである。殊にこのやうに明白な二性格の對立に於いて、その命名が全然偶然的であると考へる方が寧ろ不自然である。

三、萬人の有罪判決

『人はかつて自ら經驗した事實の外、また自ら親しく體感した記憶の外、そしてそれ等の意匠づけられた構想の外、別の新しい何物をも空想することができないといふ心理學上の明白なる實證は、すべての藝術家にまで、彼等の内密に於ける不德漢であり、兇賊であり、無頼漢であり、殺人者であり、荒淫者であるといふ望ましからぬ事實を證據立てる。でないと言ふならば、彼等の小說や文學に於いて、どうしてあんなに毛色のちがつた惡事や惡人を書くことが出來やうぞ。そして惡人を書くことができないならば――惡人をすら書くことができないならば――どうしてその對照の善人を書くことができようぞ。故に汝等藝術家は、すくなくとも隱れたる心内での――實行に於いてゞはなくとも――數限りなき惡事を經驗したる事實について、辯明すべき何の論據をも持たない。』

と、詩人萩原朔太郎氏はその著『新しい慾情』（大正十一年）の内で『藝術家への有罪判決』の題下に論じてゐる。全くその通りである。併し詩人はそれ等の作品を享受する讀者や觀客にも有罪判決を下したが、分析者はそれ等の作品を享受する讀者や觀客にも有罪判決を下すものだ。如何に我々は小說中に於いて、一方純眞なる處女の不幸のために涙を流して、他方に於いてその處女を苦しめる惡漢の暴行に就いて讀むべく甚だしく熱心であることだらう。如何に一方デスデモナの災難のために泣きつゝ、他方に於いてイヤゴーの陰險なる行動に祕かなる興味と同感とを持つてゐることであらう。役者は時々、舞臺上で一人二役を演ずるが、觀客はみな觀客席にあつて一人全役を演じつゝある名優ばかりだ。たゞその演技が無意識心理的に行はれるが故に、その本人さへ氣付がないだけだ。從つて有罪判決は下しても永久の執行猶餘を與へられる。藝術の實用的意義は實にこゝに存する。空想上の犯罪的滿足がなければ、如何に多くの人々が現實に犯行を敢へてすることであらう。

劇場に於いてばかりではない。現實生活に於いて人々は常に一人數役を演じつゝある。その著しい一つの實例をこゝに擧げて、この論文を結ばう。――或る地方都市にAと云ふ藝者があつた。彼女を戀する客にBがあつた。彼は彼女に心の丈を思ふ存分打ちあけたかつた。併しA

は何かの理由でBに心を寄せさうになかつた。その事をBは仄かに察してゐた。或る時、彼は彼女を料亭に呼んだ。夜は遲くなつた。彼は突然、彼女を突倒して猿くつわをはめ、手足を縛り上げ、あはや暴行に及ばうとした。女は既に觀念してゐた。その時、不思議に男の手は弛んだ。飛ぶが如くに男の姿はその家から消えて行つた。女はそのまゝの姿で一夜を過ごさねばならなかつた。翌朝早く、男は嚴肅な顏付をして、再び女の前に立現れ、彼女に平あやまりにあやまつて、然る後に徐ろに手足の縛めは解かれた。かくてその日は二人は事なく別れたが、やがて程なく二人は結婚することになつた。

この場合に於いて、Bは一人で暴漢と救助者と善惡二人の役を一人で演じたのである。この芝居は美事に當つて、女の心は動かされることになつた。事、性慾に關する限りに於いて、人間は一層屢々その二重人格を示すやうである。(完)

附言——肖像畫や寫眞を多數に作らせると、自分の影が薄くなり早死すると云ふ迷信は、畫姿や影が自分の別我であり、別我が澤山になることは、本體の量的減少を意味すると無意識論理的に考へたことを示してゐる。かう云ふ迷信やそれに基く恐怖は、新人を以て自任する現代の人々の間にさへ、なほ意外に力強く殘つてゐるやうだ。(ドリアン・グレーの條參照。)

ルフト鑛泉場　（K・マンスフィールド）

The Luft Bad (1911) —Katherine Mansfield.—

岩倉具榮譯

吾々の様子がをかしく見えるのは、日傘のせいに違ひないと私は思ふ。

私が始めて許されて垣の中に入つた時に、私は仲間の水浴者達が『殆どまる裸で』歩き廻つてゐるのを見た。で、せめて日傘でもさしてゐれば「小さな黒人（クロンボ）」の感じに見えるだらうと私は思ひついたのだ。ハンカチーフ位のものしか身に着けてゐないのに、赤い柄の線の木綿の日傘を頭上にかざしてゐるとすれば、何とをかしな威嚴であらう！

『ルフト鑛泉場』には樹木がない。そこには一群の粗末な木造小屋、圍ひのある浴場が一つ、二つのブランコと二つの奇妙な棍棒とがある。——一つの方はギリシヤ神話の英雄ハーキュリーズか、或はドイツ軍隊でも置忘れたやうな品物で、他は赤ん坊に持たせても心配のないもの。これ等が溫泉場の誇りになつてゐる。

そしてどんな天氣にも吾々はそこへ氣晴らしに出掛ける——散歩したり、二三人づゝ坐り合つて、肉體が當然受けるお互ひの不快や、目方や、病氣について話したりする。

高い木の塀が吾々みんなを取圍んでゐる、その上からは松の枝が少し横柄に見下して、お互ひに眼くばせし合つてゐるのが、初舞臺の吾々には殊につらかつた。塀の向ふの右側は男子の部になつてゐて、彼等が木を切り倒したり、幹を鋸で挽いたり、地上にズシンと押倒したり、又切れ〲の歌を歌つたりしてゐるのが聞えて來る。さうだ、彼等

はるかにまじめにやつてゐる。

最初の日に私は自分の脚に氣付いてゐて、時計を見るために三度私の小屋に歸つて行つたけれども、私が三週間一緒に將棋さして遊んだ婦人が私を敗かした時に、私は氣を取り直して仲間に加はつた。

大きな身體のハンガリアの婦人が、彼女の第二の夫のために非常に美しい墓を買ひ求めたことを吾々に話してゐた間、吾々は地上に身體を縮めて橫はつてゐた。

彼女は云つた『それは奇麗な黑い手摺のついた地下納骨所なんです。そして大變大きいので私はそこに下りて行つて步き廻ることが出來るんです。そこに二人の夫の寫眞もあります。私の最初の夫の兄弟から送られた二つの大變奇麗な花輪もあります。家族達の寫眞の引伸しもあります。又、私の最初の夫に結婚の時に贈つた模樣入りの手紙もありますの。私は時々そこに參りますのよ。天氣のいゝ土曜の午後には大變愉快な遠足になりますわ。』

彼女は急に仰向けに橫になつて、六遍息を吸込んだ。それから再び起上つて坐つた。

『死んだ時の苦しみは恐ろしいものでした』と彼女は快活に云つた。『二番目の夫の死んだ事を云つてゐるのですがね。「最初の」夫は家具の荷車に轢かれましたの。そして新しい上衣のポケットから五十マルク盜まれましたが、二番目の夫は死にさうになつて六十七時間もかゝりました。私は泣くのを、決して一度だつて止めはしませんでした。

——子供達を寢床に連れて行く間だつても…。』

額の上に前髮の捲毛を垂らしてゐる、若いロシア女が私の方に向つて云つた。

『あなた、「サロメ」のダンス出來て?』と彼女はたづねた。『私、出來るのよ。』

『どんなに愉快でせう』と私は云つた。

『私、今やりませうか。あなた見度くない?』

彼女は飛び上つて、それから十分間驚く程體をくねらして一踊りすませてから、喘ぎながら、長い髮をふり亂して休んだ。

『いゝ踊りぢやなくつて？』彼女は云つた。『おかげで、とてもひどい汗よ。一浴びして來ますわ。』

私の反對側にはついぞ見掛けたことないほどひどく陽に燒けた女が仰向けに寢て、腕を頭に卷きつけてゐた。

『今日はこゝにどの位長く居たの？』と彼女に訊いて見た。

『おゝ、私はこゝで一日中過してゐるのよ』と彼女は答へた。『私は自分流儀の「療治」をやることにして、生の野菜と胡桃とばかりを食べてゐるのです。すると毎日自分の心持が段々强く淸くなつて行くのを感じるんです。結局、あなたは何が期待出來て？　吾々の大部分は自分達の頭に豚の血球と牛の切端とをつめて歩き廻つてゐるんぢやないの？　不思議なのは却つて、世の中がこんなにも善いつてことよ。今これを買込んで來たんですが、私はこんな簡單な食物で生きてるんです』――彼女は傍の小さな袋を指さした――『ちさ、にんぢん、ぢやがいも、それからくるみ、これだけあれば十分、合理的な營養物になりますのよ。私はそれを水道の水で洗ひ、無害な――新鮮で汚されない――大地からとつて來たまゝの生で食べます。』

『一日中その他には何も食べないんですか。』と私は思はず聲を揚げた。

『水は飮みます。それから若し夜中に目がさめればバナ、を喰べることもあります。』彼女は寢返りを打つて片方の肘によりかゝつた。『一體、あなた方は恐ろしく食べ過ぎるんですよ』と彼女は云つた、『破廉恥に喰べ過ぎるんですよ！　そんなに過剩な肉體の層を積み重ねたんでは、精神の炎だつて明るく燃え上りつこありませんよ。』

私は彼女が私をまじ〳〵見てくれなければよいがと思つた。で、も一度私の時計を見に行かうと思つた。その時珊瑚珠の糸を纏ふた一人の少女が、吾々の方へやつて來た。

『可愛さうにハウプトマンの奥さんは今日は來られないんですつて、』彼女は云つた。『あの人は神經のため身體中斑點が出來たのよ。あの人は昨日ハガキ二枚書いた後で、ひどく興奮してゐたわ。』

『むづかしい御身體ね』とハンガリア婦人は喙を容れた。『併し愉快ね。どうでせう、あの人は前齒の一つ一つに別々の金齒を被せてゐるんですよ！　けれどあの人は娘さん達にあんな短い水兵服を着せておくのは、よくありません

わ。あの娘さん達が腰をかけてゐて、足をひどく無様に組合せてゐるところを御覽なさい。今日の午後はあなた、どうなさるの、アンナさん？』

『おゝ、』珊瑚の首飾は云つた『大尉さんが一緒にランツドルフに行かないかつて云ひましたの。大尉さんはランツドルフで卵を買つて家のお母さんに持つて行かなければならないんですつて。大尉さんは正直な百姓を知つてゐて、それと取引すれば八つの卵で一ペニイ儉約になるんですつて。』

『あなた、アメリカ人なの？』と例の野菜夫人が私の方に向つて云つた。

『いゝえ。』

『それぢや、あなたはイギリス女なの？』

『さア、どうですかね――』

『あなたは二つのどちらかに違ひないわ。どうしたつてさうだわ。私はあなたが度々一人で歩いてるところを見かけました。あなたの例のを：：さしてね：：。』

私は起上つて、ブランコに上つた。空氣は私の身體をふきぬけて心よく涼しかつた。上を仰ぐと白い雲が青空一面になよやかにたなびいてゐた。松の森からは生々しい香りが流れ、枝は調子よく、音高く、ゆれ合つてゐた。私は大變愉快に、のんびりと、幸福に感じた――子供のやうな氣持になつた！私は、草の上に寄り合つて尤もらしくさゝやき合つてゐる仲間に、舌を突き出してやり度く思つた。

『多分あなたは知らないのね』と小屋の一つから聲が聞えて來た。『ブランコでゆすぶつては胃がだいなしになるんですよ。私の一人の友達はそれで亢奮した後で三週間と云ふもの、何も飲み込むことが出來なかつたのよ。』

私は圍ひのある水浴場に行つて、水をかけた。

私が着物を着てゐた時に、誰かゞ圍ひの壁をたゝいた。

『あなた知つてゝ？』一つの聲が云つた。『ルフト溫泉場でお隣りに住んでゐる男があるのよ。その人は腋の下まで

泥の中に身を埋めて、三位一體は信ぜられないと云つてゐるんです。

日傘はルフト溫泉場での唯一の優美であつた。ところで、小屋へ行つた時に、私は夫の「嵐の時の」太く重い雨傘を持つて來て、その中にかくれて隅の方に坐るのであつた。

私は自分の脚のことを少しも恥ぢてゐないわけではない。（完）

私は自分の脚のむき出しを恥ぢてゐる。それ故に大きな傘を持ち出したのだが、そればかりではない。この鑛泉場にあまりに不調和に優美な傘はもつと恥づかしい感じがするからだ。鄕に入つては鄕に從ふより外仕方がないと云ふ心持を描いてゐる。作者がニウヂイランド居住中の實感であらう。作者は英國人であるがこゝで生れ、こゝで育つた。ニウヂイランド風俗をこのやうに苛辣に描いたので、作者は生地で大分誤解されてゐると云ふ話である。この作の如きその原因の一つであらう。（編輯者附記）

山の母

辻　修

1

母は恰幅がよく、常にきちんとしてゐた。白い容貌が冷く美しかつた。

「お母さんはお前ばかりを可愛がつたものさ」と云ふのが、今でも二人の姉達の嫉妬めいた口吻での語り草。それほど幸福であつた頃の記憶も今は全く無い。

私が四歳の年に次の妹が生れた。母の陣痛の呻聲に多少の不安を感じた。

その年の夏頃から私の頭一面に腫物が吹き出て、一方ならず母親を手こずらせた。内にばかり居たが、姉達も穢いと言つて私の側には寄らなかつた。來る客も以前程にかまけて呉れず、土産物は皆な赤兒の妹に渡つてしまつた。それやこれやで不平勝ちになり、よく叱られた。めそ〳〵泣く事も多かつた。

私の家は眞宗寺ではあるが、本堂は無かつた。鐘樓もあつたと謂ふが、そのなき跡で、影法師を踏み踏み聞きかぢりの唱歌を獨りで練習した。終日庫裏の煤けた白壁に「へのへのもへじ」の素描畫（デッサン）を書いたことも覺えてゐる。墓地續きの孟宗の竹林に群れる宿無しの子雀や目白は、私のよき友達であつた。

一生禿頭になつてしまうのではないかと、母親の心を痛めた腫瘍も、あらゆる藥石のやうやくの效能のためか、溫泉湯治の靈驗あらたかであつたゝめか、消えるやうに全治した。凡そ二ケ年近くもかゝつたらうか。幼な心にも晴々と嬉しく感じた。

その御祝ひ（?）に母に手を引かれて父の奉職してゐる隣縣のS中學校を訪れたのは、確か私が六歳の頃だつたと思ふ。父は私の物心づく以前から既に不在住職だつたので、初めて會つたのである。私は母の後に隱れて覗いて觀た。劍道の師範であり、西洋の音樂も嗜むでゐたと言ふこの父親の、嚴しいカイゼル髭は子供心にも印象深かつた。

晝間そこの湖畔で、狼のやうに剽悍な犬にいきなり吠えつかれた。息の音も止まる程吃驚した。長いこと顫えがやまなかつた。

その夜、宿で初めての夢を見た。判然した記憶は無いが、恐ろしく大きな鬼に追はれて踠き苦しむだ。目の前に立つてゐた奇麗な女の人に救ひを求めたが、その人は笑つてばかり居て助けてはくれなかつた。終ひに鬼の手に捕へられ海に投げ込まれやうとした。トタンに目が覺めた。父の廣い胸元に武者振り付いて泣いてゐたのである。哭きながら放尿をして、母に抓ねられた。

同じ年の冬、肋膜炎だつたかで町の病院に入つた。母は二三

日は看護してくれたが、私の我儘な言行に愛想つかしたものか
「そんなにお母さんの言ふ事聽かなきあ、もう知りませんよ、勝手におし。」
と、悲しい顏をして病室を出て行つたきり、再び歸つては來なかつた。
流石に私も後悔したが、一日經て母に代つて色白で太つちよの看護婦が附添ひに來た。いつもにこやかに微笑むでゐた。私のむづかる度に、繪本や玩具を買つて來てくれた。その時のオルゴールは私の中學校を卒へる頃まで机の抽斗にあつて、甘い感傷をそゝつたものである。

2

七歳の正月はその病院で迎へた。白いベッドの上に起き直つて餅を食べた。病室に集つた大勢の看護婦達を元氣な聲で笑はせた彼女達は私の方を見ては、何か噂し合つてゐた。間もなく退院をした。母は迎へにも來なかつたが、太つちよの看護婦の膝に抱えられ、力車に乘つた。病院の門を出ると直ぐ、私は彼女の膝で快い眠りに落ちた。
それからの私の周圍は頓に明るくなつた。不思議に廣々と開けゆく視野を感じたのである。家の內では妹が全部の光りを獨占してゐたが、それだけ外に出て自由の暴君となつた。餘所の花花を摧り、蔬菜園を荒らし廻つた。
或る日村中で、些細な事から年長の少年達三人と激しく爭鬪したことがある。恰度私の母が通掛つたので三人は逃げた。額に血を流し、片袖を千切られてゐる私を母は引きづつて一軒每に呶鳴り込み、樵家であらうが無からうが、恐ろしく甲高に饒舌を振つて否應なしに謝罪させてしまつた。
然し、勝氣で意地の張つた母は、私を伴れて歸るといきなり頰を打つた。口惜しさのあまりの泣き聲で、「お前みたいな意氣地なしは家に居らんでもよい、お母さんの顏に泥を塗るやうな不孝者は、さつさと出て行き！」と叫んだ。
私は素直に出て行つて一日歸へらなかつた。御飯も食べなかつたから、流石に母も心配になつたとみえ、許してくれた。それからしば〳〵この手を使つたが、長くは續かなかつた。
座敷に大きな佛壇があつて、煤けた御厨子に金色の阿彌陀如來が安置してあつた。一度、そこに添へられる御供物を、神妙に禮拜して後そつと頂いたことがあつた。母は「誰が盜つた？」と喚いた。私は正直に白狀した、如何に强請つても母からは貰へなかつたから、寧ろ當てつけにとつたのだ。
「この罰當り奴、お父さんが居らんからつて、とこまで氣儘するかえ、もう母さんは許さんよ、甘かないからね」きり〳〵に縛られて土藏の戶袋の中へ投げ込まれ、一夜をそこで哭き明かした。
も一つの大きな體罰は、五十錢銀貨が粉失した時の事、生憎その日、新吉と云ふ子が道で猫糞をきめた拾錢で駄菓子を買ひ內證に二人で隱れ食ひして居る所を姉に見付けられた。その傷

を脛に持つ悲しさ、母の嚴しい詮議に辯解も怪しく、棒切れで打たれ、足で蹴られた。

「お前の根性は只では直るまいなあ、殺してやらう、かうしてやらう。」

「だれが、死ぬもんか！」

「母さんはひねくれ者は大嫌ひだよ、そんな子供は居ない方がましだからね。」

「きらいだい、そんな母さんなんか。」

私の不貞不貞しさに一層腹を立てた母は、板間に打ち据え馬乗りになつて無茶苦茶に頭を叩いた。胸は息苦しく壓し潰され手足は痺れ、目が眩むでジーンと意識を失つた。誰れも仲裁してくれなかつたらしい。

母の顔色を窺ふことが巧になつた。狡猾いお世辭で、皆の氣嫌をとつた。内にこのやうに抑壓された感情のあつたゝめか表へ出て赤蛙や鮠(にえ)を握り潰す刹那に快樂を味ふやうになつた。この一種變態的な愉悦を享愛するために段々と、雀の子を殺したり、近所の池から金魚を盗んだりする惡さを覺えるやうになつて行つた。

3

小學校の庭に櫻の花が散つてゐた。就學式には母が附いて行つてくれた。檀家の娘達が八歳の美少年を歡迎してくれるやうに思つてゐた。式場で誰れかゞ私を突きながら

「やあい、小坊主の甘ん棒！」と言つた。

私が思はず大聲で「何んだとう」と振り返つた時、蒼白い蟷螂(かまきり)みたいな校長先生から、痛く叱責された。このことは忘れられない。

二三日は學校が恐ろしくて行けなかつた。が、南隣の春子と云ふ少女に誘はれて行く樣になつた。春子は私より三つ年嵩さで、瞳が涼しく、いつも健康さうに笑つてゐた。彼女の家は檀家總代であつたせいか、彼女は私には特別親切にしてくれた。別に美味しい御馳はなかつたが、談笑の中に食卓を圍む暖かな饗宴は、どんなに私を喜ばせたことだらう。私はよく喋り、よく笑はせた。春子は私の事を「雲雀みたいだね」と言つた。

學校が退けると二人は急いで歸へつた。山門際の公孫樹の下蔭で飯事遊びに餘念が無かつた。日曜日には起き拔けに、霧深い傾斜地の葡萄畑で落ち會つた。朝の媾見から夜の別離まで飽かずに遊び暮らして叱られた。

裏の小川邊には虎杖(すかんぽう)があり、毛莨の花が咲いた。一日そこの草原地帶で野外童話劇(ページェント)を演じた。登場人物は殿樣の私と、妃樣の春子と二人。お守りのために私に背負はされた妹には、見物人としての役割をおしつけ、側の桐の樹に結び付けておいた。太陽の照明の下に、小鳥や微風の音樂に伴れて私たちは亂舞し興奮した。

ふとその時美しい幻想に魅せられた。向ふの山尾根で白い女

の人がしきりに招いてゐるのである。春子も確かに見たと言つた。私達はその人こそ二人の眞實の生母であり、「おつぱい」の包をもつた優しい母親に違ひないと思ひ込むだ。早速白い雲の流れる高原指して出立した。妹はそこに置き忘れて了つて――。それでも土産にとて途々木苺の紅い實を集めてゐた。二人が散々、道に迷つて辿り着いたのは眞夜中過ぎであつた。母は「末恐ろしい子だ、狐に憑れたのだ」と顏を顰めた。
「山の母」には會ふことが出來なかつた。

4

新しい學校友達が遊びに來ても、母はいゝ顏を見せなかつた。村の子供達が蔭で「鬼婆」と惡口を言つた。私は益々陰鬱になつた。
學校でも獨りぼつちの時が多かつたが、惡友連とは組になり易かつた。朝の休憩時間、黑板に校長の諷刺畫を描いた時の事誰かの密告により蟷螂先生は私だけを敎員室に呼び出した。
「ガラスを破つたのもお前だらう？ 素直に白状せんと、今日は歸さんぞ。」
「ガラスの事なんか、知りません！」
それつきり口を緘して放課後まで立たされたが、擔任の佐藤先生が默つて許して下された。その後も屢々激しい惡戯で御仕置を受けたが、いつも先生は何も言はれずに歸してくれ、私の姿が消えるまで校門に立ちつくしてゐた。その姿に私は却つて不氣味な「訓誨」を感じたのである。佐藤先生は母に似て恰幅のよい若く美しい女敎員である。きりつとした顏立ちの中にも愛の潤ひがあつて、私は何となく敬慕してゐた。
麥の稻刈り季節だつたと思ふ。學校歸へりに私は田圃で道草を喰つた。お茶請時でもあるらしい、土手に睦じい農家の母子を觀た。私は激しい嫉妬にイラ〱した。向ふの丘に投げる心算だつた礫が、はづみで子供の背中に當つてしまつた。哭き叫ぶ聲に吃驚して逃げ出したが、すぐ側に居合はせた百姓に捉つた。跪きながら、もう駄目だと思つた。
そこへ學校歸りの佐藤先生が飛んで來た。
「私の不注意からとんだ御迷惑をお懸けしました。何卒今度ばかりはお許し下さいまし。」
「うむ、先生がさう言はつしやるなら仕方もねえが、この餓鬼にようく言ひ付けて下らんしよう。」
「はい、私からよく叱つて置きますから」
救はれた嬉しさが胸一杯に迫つた。ほつとした心安さで先生の顏を仰いだ。につこと頰笑むだ眼が白くぬれてゐた。
「今日はこれでお歸へりなさい」と、頭を撫ぜられた。村の入口で別れた。
其の佐藤先生が突然、學校を退いたのは翌年の五月、矢張り雲雀が鳴く頃だつた。「仰げば尊し」に心から泣いて別れたのである。忽ち私は學校に反抗し、前以上の不良少年に還り、自然の懐に逃げて行つた。（完）

時評

時言數題

大槻憲二

一、法醫學界への再質問

岡本代議士が小山前法相を告發した事件を見て公憤を發し、匕首を懷にして前法相をつけ覗つてゐた海保某と云ふ青年が、犯行未遂にして捕へられ、東京地方裁判所で審理されたが、本人には所謂背後關係もなく、精神病者でもなく、犯行決意的動機に必然性がないに拘らずその意志は固く、岡田豫審判事は困つて、これにつき某法醫學者の心理鑑定を乞ふたところ、その法醫學者はクレチュメル氏の、所謂『性格離情型卽ちシゾイド』に基く昂奮が犯罪の動機であるとの鑑定を下し、事件そのものを直接源因が不明であるに拘らず、有罪と決定した由。

この法醫學者は私が本誌第一卷第六號本欄に於いて『全法醫學界に質』した時に、その質問の直接契機をなした人物である。その時は氏が『父を殺した少年』に就いて人道主義的(非科學的、非心理學的)な甘い鑑定を下してゐたのを、私が不當としたのであつた。今度の鑑定を見ると、逆にまた少しく苛酷であるのではなからうか。私は患者には接しないから細かいことは云へないが性格離情だけで何等具體的行動がないのに、有罪とは少しく冒險的な判決のやうに我々に思はれる。それが社會生活に於いて、他人の迷惑になることを仕出かす可能性のある青年であることは、想像されるが……。それにしても法醫學がこの可能性を取除き得べきことを少しも考へないのは、非人道的であると思ふ。分析に依れば、恐らく取除き得るものであらうと察せられる。

二、善行と犯罪との同一性

併し右の青年の犯罪の動機をもし眞に非必然的とするならば(常識的に云へば、國務大臣でありながら不法行爲をした者——假りに事實したとして——その者を懲らさうとするは必ずしも必然的でないとは云へない。)恐らく大抵の犯罪者の動機は非必然的であらうと私は思ふ。精神分析學的研究の結果から見ても恐らくさうでなからうかと思ふ。

然るにこゝに面白い事は、大抵の犯罪者の動機が非必然的であるばかりでなく、大抵の善行者の動機も亦、同樣に非必然的であるらしいことだ。七月十八日の新聞紙は、尾行四時間に亙り遂に泥棒を捕へるに力を致した十

四歳の少年探偵の話を掲げてゐた。別に深い恨みがある相手でもないのに、さうしてそれが本人の仕事でもないのに、四時間も尾行してゐると云ふその執拗さは、只事ではないと私は思ふ。この少年が不正を憎む善魂の持主だなどゝ云つて安心してゐる人は、餘程お芽出度く出來上つてゐる人だ。私はこの少年を直接知らないから、斷定は避けたいが、何か根深いコムプレクスに基いてのこの執拗な追跡だと見做す方が自然であらうと思ふ。換言すれば、この少年の善行（結果に於いて善行となつたが動機まで果して善行か、私はさう樂觀的には考へ難い）の動機は非必然的である。

この少年がもう十年の歳月の經過した後に、同樣に執拗な正義感情（?）を依然持合せてゐたら、さうして國務大臣の瀆職事件をでも聞知したならば、果して海保青年のやうに懷中に匕首を潜ませるやうにならないとは、果して何人が斷言し得るであらうか。犯罪と善行とは紙一重の差であることを思ふと、我等は慄然とする。子供の探偵行爲などを善行だ〳〵と新聞に書き立てたり（新聞政策としては仕方がないかも知れぬが）、警察が表彰したりすることは、どう云ふものであらうか。多少の利益もあるかもしれないが、弊害の方が大きいやうに思ふ。子供をおだてゝ危險に追込むやうなものだ。

三、變裝したる國王

森田草平氏は八月十二日以降の朝日新聞に右の題下で民衆が變裝したる國王の出現を好むと云ふことを東西の民衆文學史に實例を求めて論證してゐた。例へば『水戸黄門』や『最明寺時賴』の如きである。彼等國王は變裝して地方を巡遊し、不正苛酷なる領主どもをとつちめるのである。森田氏は大抵の人間がみな「變裝せる國王」であつて、「自分一個の獨立した正義觀を持つてゐる」が「それを發表してもあまり効果がない」から「自ら國王たることを天下に發表しい。……併し水戸黄門の場合は違ふ!」水戸の隱居なら、その正義が立所に實現されるからだ……と云つてゐるが、この見方は不徹底だ。折角の面白い着眼點が臺なしになつてしまつた。時賴や黄門の話はどうせ民衆の作り話ですよ、森田さん! 現實的『効果に關係』がない事にかけてはどつちみち同じではないか。

これはやはり民衆の空想に因る願望充足と見るべきだ精神分析學者は、森田氏よりはずつと以前に、民衆文學のこの傾向に氣付いてゐるのだ。さうして、斯學はこれに祖父コムプレクスと云ふ名稱をさへ與へてゐるのだ。民衆（幼兒）にとつては自分を苦める惡父（領主）をと

つちめてくれるものは父の父たる祖父（變裝せる國王）より外にない。これがゐてくれゝばよいとの願望は、夢に於ける如く、實在せるものとなつて文藝（夢の一種なる）の中に描かれてゐるのだ。作家である森田氏は文學の夢としての一面を白日下にさらすに忍びないものがあつて、それが氏の認識を曇らせたのだらう。果して然らば、これまた一種の「抵抗」である。

四、福澤一郎氏の馬の畫

獨立美術協會員福澤一郎氏の洋畫小品個展が七月七日から十一日まで、銀座紀國屋書店階上ギャラリーで催された。内に『エチウド』と云ふ作品があつた。二頭の馬が横倒しになつてゐる。一頭は中央大半の畫面を占領し他方はその背後に片脚のみを見せてゐる。正面の馬はその二本の後脚と腹部とを示し、頭部は畫面外に逸してゐる。その馬の腹部のところに金太郎のやうに赫い、元氣さうな幼兒が兩手を擴げ、兩脚を踏張つて抱きつかうとしてゐる。然も馬のお乳をでも吸はうとするかのやうに……。或は元氣にも、この悍馬を御せんとするかのやうに……。展覽會出品中に『馬を御す』と題する別の馬の畫があつたが、この『エチウド』も別の形に表現せられた『馬を御す』であるかも知れない。

一體、作者は馬の好きな畫人のやうだ。馬の畫人と云へば、同じく獨立美術協會の鈴木保德氏も馬の好きな畫人で、私は嘗て彼を論じた時に、その馬には象徴的な意味があるやうに云つたと記憶してゐる。今度の福澤氏の展覽會にも馬の繪が三つ出てゐる。その『エチウド』『馬を御す』の外に、蟠つたやうに倒れてゐる恐らくは死馬の上空に鳥のやうな鳥が飛んでゐる圖が、もう一つあつた。嘗つて見た展覽會の中にも『智慧と勇氣と』や、その外幾つもあつたと思ふ。殆どいつも、氏の畫中の馬は横倒しになつて、屢々肛門を露出させてゐる。併し『馬を御す』の中の馬は奔騰狂亂してゐて『意馬心猿』と云ふ熟語の馬や、ドラクロアの作中の狂奔せる『白馬』を聯想せしめるものがある。もしこれ等の聯想を作者が承認するならば、論者にもこの畫『エチウド』は分るやうに思ふ。金太郎は心理學的に云へば勿論、作者の分身であらう。では心理學的に云へば馬は作者にとつて何であらうか。

論者は會場で、作者に向ひ、この畫はモダン金太郎だと云つたところ、作者は必ずしも拒否しなかつた。一體金太郎と云ふ傳說中の人物は山姥の子で、それは歌麿時代まではまだ母なる山姥の背中に乗つかつてゐた、歌麿のその畫を御覽になつた方々は、直ぐ思ひ出して下さる

福澤一郎氏作「エチウド」

だらう。それが何時の頃からか、鯉の背中に乘つかるやうになつた。江戸末期の錦畫にすらあるから、鯉幟になつてゐるのはその傳統を錦繪から受けてゐるのでなからうか。かう云ふ方面の栓鑿は浮世繪專門家の教示に俟たねばならない。ところが、今度は鯉から更に馬に移つて來た。この間の變遷は、自然出鱈目ではないと私は考へてゐる。そこに心理必然的なものを、私は認識することが出來る。

一體、我々東洋人の遺傳的（集合的）無意識にとつては、馬の觀念は母のそれとコムプレクスされてゐるらしいのだ。それは『牛頭馬頭』だの、或は『牛を馬に乘りかへる』などの熟語に於いても、多少は覗へると思ふ。牛は角のある動物であり、角は男性のシムボルであるに對し、馬は女に通じ、常に女の象徴となつてゐるらしい。さうして女の觀念は殆ど常に必ず母のそれと同じものである。故に馬は屢々トーテム・ムッターとなつてゐるやうだ。この點に關しては鈴木保德氏の場合と同じであるが、鈴木氏の場合はその關係が感傷的であるに對し、福澤氏の場合は、鬪爭的である。『馬を御す』――『母を御す』はすべて幼兒的架空的に於ける一つの英雄主義であるのだ。私はそこに作者のエディポス・コムプレクスの存在と顯現とを疑ふことが出來ない。（挿繪參照）

性風俗の檢閱に就いて當局に訴ふ

高橋鐵

一、何を取締るつもりか？

「哲學者が何と云はうとも當分浮世の狂言舞臺は色と慾で廻つて行く。」（シルレル）群團生活を必然とする人間生活の史上では、いかなる段階の社會に於ても彼等の性生活は甚だ主要にして而も最も統制困難な問題である。その爲に一社會形態に於ては反社會的性活動とせられたものも他に於ては是とせられ、同時にA社會に於ては淳風美俗と認定せられたものもB社會に於ては共同規約によつて禁斷せられる。これは、例令、多婚制（ポリガミー）、墮胎、獸姦、情死、私通、姦通、裸體、賣淫、血族姦等の風俗規範史を檢すれば直ちに了解し得る事で、昨日のポリガミーも今日は重婚罪に觸れ、今日の墮胎罪も明日は自然科學、社會科學的見地から合法性を與へられる。或ひは江戸期のさらし者も現代には本邦特產の藝術品として「天國に結ぶ」名をたゝへられる。今年のヨシワラも來年は見て見ぬ振りの光と闇の街と化する。

由是觀之、凡て社會人の性生活を最も正しく評價し指導するには法律家、政治家の手を離れて、最高度に完成せられた敎導機關――社會學者、心理學者、精神病學者醫學者、藝術家等の集團――に委ね攻究せらるべきである。筆者はこゝに性風俗の一部として、猥褻以上猥褻なものとして――正常なる社會心理を無視して――取締られ禁斷されつゝある出版物興行物（學問、美術、文藝、演劇、映畫、觀覽物など）を分析批判し賢明なる檢閱官に訴へんとするものである。

何を取締るべきか。何の爲に取締るのか。いかに取締り、いかに導くべきか。

二、忌諱さるゝ「痴態」と「性行爲」

前述の樣に社會生活を營む限りに於て個人の性生活はいろ〳〵の禁斷を命じられてゐる。たとへ合法的な性行爲であつてもそれが「公衆ノ目ニ觸ルヘキ場所ニ於テ」は警察犯處罰令第三條に觸れる。この筆法によれば、映畫館の銀幕、演劇演藝の舞臺、賣笑街、花柳街、カフヱ街、否々現時の頽廢的な總ゆる街路にも科料的風景は見受けられ、當局の所謂「良風を害し」「風俗を壞亂し」「風

教上惡影響ある」性風俗が展開され、「劣情をそゝり」「模倣性を刺戟し」つゝある。

然るにそれら一聯の現實よりも苛酷に取締られるものは、出版法・新聞紙法・檢閲標準等による出版物及び興行物である。

一例として筆者が關係する映畫の「警視廳フイルム檢閲標準」の二三を擧げれば、

一〇、映畫面ノ狀況慘酷ニ渉ルモノ、若シクハ醜汚ノ感ヲ與フルモノ、

一一、猥褻ニ渉ルモノ、

一二、姦通ニ關スル事柄ヲ骨子トシテ仕組ミタルモノ、

一三、戀愛ニ關スル事柄ヲ仕組ミタルモノニシテ內容下劣ニ渉ルモノ、

等がある。そして人類生存の基本方向が性滿足と物慾滿足にある以上、映畫も殆んど總て愛慾を描いてゐる爲に、映畫人が屢々云ふ通り「檢閲はヒステリー女の樣だからかなはない」程、鋏禍を受ける。客觀的に見れば、他人の性的過程は總て「下劣」であり「猥褻」であり、「醜汚ノ感ヲ與フルモノ」に違ひないであらう。確かに美しい戀愛、藝術に迄醇化せられた愛慾と云ふものは何人にでも考へられるにかゝはらず、それすらも公式的な風紀限から觀れば一個の野合に外ならない。

かのデューマの「椿をもつ婦人」“La Dame aux Camélias”に「椿姬」の名を與へた長田秋濤氏の飜譯は明治卅四年、「萬朝報」に連載中發賣禁止を受けたものである。又、「何處へ行く」の作者シェンキウィッチの「二人畫工」（內田魯庵氏譯）はその中に、主人公の青年がその許婚にキスしやうとする。許婚の娘は「結婚式まで待つて」と云ふ。その一文が風俗を紊亂すると云ふ廉で、明治四十二年發賣禁止を蒙つた。しかも此の樣な事實を山積して、風俗史は一層自然に一層國際的に進展して來たのである。

併し接吻は現在でも決して卑猥視を免れてはゐない。接吻——文書の上ではさほど「劣情を唆」らないと見えて殆んど往時の樣な取締りは受けなくなつたが、視覺的表現に於ては——殊に映畫に於ては日本人同志のキスはたとへそれが水面や障子の影にうつしても或ひは下半身の姿態によつて暗示しても絕對に許されない。そればかりでなく、歐米のものでも大寫（クローズアップ）の程度・時間の長さ・當人同志の關係、背景の雰圍氣などによつて切られて了ふ。そして此のシーンの爲め禁止される件數は昨年度だけでも三百卅六件と云ふ最多數を示してゐる。

日本にも決してキスの風習がなかつたのではなく、秀

吉が淀君に陣中より送つたと傳へられる文にも「歸城の上にて口吸はせ申すべく候」とある通りだし、浮世繪祕畫にも大概この一場景が加へられてあるが、結局過去に於るキスは性交の豫備行爲であつて、最近の如く性交そのものと遊離していはゞ性行爲の代償とは考へられなかつた。その爲に現在でも映畫館に於ては濃厚な接吻場面の後に固唾をのみ、或ひは深い溜息が低い渦潮の如く一つの音になつてきこえる。これは決して誇張でなく映畫館を熟知してゐるものは氣附いてゐる事である。

又、歐米に於いても、キスはいかに聖書時代から文獻に現はれてゐるにしても煽情的行爲の一つである事に變りはない。和蘭の産婦人科醫ヴン・デ・ヱルデの世界的名著「完全なる夫婦」――しかも日本に於ては昭和五年發賣と同時に直ちに發禁を命じられた邦譯書――にもいみじく斷定してある樣に「各國民に於てこの（性交に至る）愛戲は殆ど例外なしに接吻を以て始まる」のである。それにもかゝはらず、前にも記した如く最近次第にキスは肉體關係の一代償になつて來た。宛かも生物の文化につれて性慾が生殖慾と分離した樣に。

確か菊池寛氏は、愛人同志の婚前交際は接吻までにすべきであると云ふ樣な意見を述べてゐたが、實際接吻は淳化しつゝある。そして或る程度まで「私通」者間の肉體關係の安全瓣として性道德上の役目を果してゐる。中には賢明な抑制及び淳化の心理から全愛慾を口唇段階に迄引戻しをしてゐる人もある。筆者知己の一令孃は病弱でつゝましい獨身生活を續けてゐるが、その豪奢な私室は室內裝飾から彫刻・懸額・蒐集アルバム等一切を接吻狀景で埋めてゐる。

本邦に於て、演劇やレヴィユで許されるキスが映畫では禁じられる理由は恐らく、俳優が同民族であるために現實感が強く大寫等で畫面に擴大された時の煽情を恐れるものであらう。

併し繰返して云ふがキスも進化した。曾ては「第二の接吻」と云ふ題名も不許可になり、發聲映畫としての唇音も黑く塗りつぶされた。又彫刻に於てはロダンの「接吻」すら忌諱せられた。それが現在では輕はずみな妊娠や血液變化を防ぐ安全瓣にすらなつて來た。

筆者は本文の最初の訴求として、接吻場面を明るみに出し、接吻に對して眼を慣らさせる事を勸めたいと思ふ。慣れた事物の外部刺戟が反應緩漫になる事は實驗心理學も常に敎へる所である。そして一方隱蔽は、最も不健全な好奇心や不眞面目な想像を誘ふ事にのみ役立つてゐる筈である。

森鷗外博士の「ギタ・セクスアリス」は少年より青年

までの性生活、即ち春畫を見せられて性に懐疑心を抱き同性愛の倒錯者に驚愕し、遊廓に誘ひ入れられて處置に迷ふ等の話を非常に客觀的に、記錄的に記述したものであるが、明治四十二年、雜誌「昴（すばる）」に發表して發賣禁止處分を受けたものださうである。その後も「ナナ」、「サフォー」、「ベラミー」、「デカメロン」等外國の世界的名作は筆禍を受け、本邦の古典でも西鶴の諸作、柳亭種彦の諸作、爲永春水の「春色梅兒譽美」等は發禁數回にして漸く世に出ても例の○○、、、、等の傷痕は切られ與三郎よろしくの姿である。これらは例の「源氏物語」の樣に事貴人の御事蹟に關するものでもないし、クープリンの「ヤーマ」、トルストイの「闇の力」、ゾラの「巴里」、フローベルの「マダム・ボヴリー」等の檢閲奇禍と違つて社會批判を含んだものでもなく、只管「風俗を壞亂するもの」と睨まれたに違ひない。

現在でも發賣禁止の傷痕ある無數の出版物がある證據に、警視廳が新造廳舍に移轉した時には押收本を燒盡すに三日を要したと云はれてゐる。その中で風紀に關する文書と云へば殆んど性行爲を描寫し或ひは記述したもので、つまり刑法第百七十五條「猥褻ノ文書圖畫其他ノ物ヲ頒布若クハ販賣シ又ハ公然之ヲ陳列シタル者云々」、出版法第十九條第二十七條「風俗ヲ壞亂スルモノト認ムル文書圖畫ヲ出版シタルトキハ云々」等の適用を受けたものである。そこで此等文書繪畫によつて壞亂せられる一般民衆の風俗と云ふものを考へる必要が起る。彼等が春信の夢の國の樣な春宮祕戲圖を見、歌麿、英泉、國貞等の浪漫的な祕畫に接し、バイロン、ビアズレー、等の幻想的な描線に見とれ、ロップス、ゲオルグ・グロッス等の鋭利な批判的性風俗畫を座右に置いたとしても彼等の性生活がどれだけ紊亂されるであらうか。否、寧ろそれによつて彼等は一層性生活を美化せしめられるであらう。少くとも「卑猥醜陋」なる日常の性生活に對して一つの教養を與へるであらう。なぜならば、から云ふ頽廢的な世相に對しては子供の性教育以上に大人の性教育が必要であるからだ。それにも關はらず、森に入つて森を見ず、たゞ木のみを見る態の風紀取締りは、猥雜な現實に眼を閉ざして高度の人間記錄上に現はれた性風俗だけを抹殺しやうとする。

その爲、西鶴の嚴肅な國寶的文獻中の伏字は徒らに卑猥な好奇的想像のみをもたらし、性生活に美意識を與へる性的古畫は警視廳庭の煙りと化し、俗惡な猥書畫のみが横行して動物的性機能を挑發する。

一體、性生活と云ふものは單純卑俗な取締りや禁制で「改良」されたり「良風」をもたらされたりするものでな

い。現に、本邦の民族史的古典「古事記」にさへ性的描寫が多いし、外國でも舊約聖書中の性的記述等の素直さは驚くべきものがある程だ。今昔物語、古今著聞集、宇治拾遺物語等々にある明朗な性風俗を經て鳥羽僧正の戯畫が先づ著聞集に現はれ、その後戯畫は順調に發達し日本繪師菱川師宣畫などと署名さへ入れてある。それが享保七年初めて「風俗之爲にも不宜儀に候間云々」の禁令町觸が出て、西鶴物等の好色本は表面上影を消し非合法的な出版物と化した。併しそれも一時であつて天明頃には再びそれらの戯畫・猥具は公然店頭に並べられた。その後歌麿や百龜など、全盛期の寛政二年再び幕府の嚴令「風俗の爲に相成らざる猥がましき事勿論無用に候云々」と云ふのが現れ、次いで約五十年後有名な水野越前守の天保改革が發せられるに及んで巷間の浮世繪はスツカリ卑劣ないぢけたものになつたが、この恐慌も一時で再び國貞國芳の末梢的濃艶さになつて行つた。（尾崎・河原・外骨氏等に據る）

併し面白い事は、此の様に取締りを嚴重にしたゝめに浮世繪は初期肉筆繪時代の太さを失ひ、明朗性を喪ひ、浮世繪の一特徴とされてゐる「あぶな繪」趣味を生んだ事である。浮世繪研究家織田一磨氏は「風俗取締令に對してあぶな繪といふ名稱が生きるのだからこれは當然享保七年以後に相違あるまい」と説いてゐる。あぶな繪は常に、危くない程度で肉體を見せ様とし又同様に性交前後の狀景を描寫する。屏風であり風であり紙であり寢具である一群の用具立てを弄することの戰術を以て卑俗な民衆に媚び、そして取締令をも逃れやうとする。そこにはもう明朗も健康もなく僅かに夢とロマンスが漂ふ丈だつた。

併し、たとへ禁令は嚴しくとも、現在の檢閲制度程には矛盾に充ちてゐなかつたと見へて、其等性風俗の出版物も當時の現實と平行して性行爲を飾つたものである。それればかりでなく其の一流の筆者達も彼等の祕密出版物に衆知の戯號を用ひてゐるし、指導階級に屬する學者文人畫人は又不朽の笑繪春本を殘してくれてゐる。

例へば筆者も未見の僧應擧畫、素絢畫、文晁畫、華山戯畫の外、江戸期のレオナルド・ダギンチ平賀源内の珍奇極まりない戯文「長枕褥合戰（ながまくらしとねがつせん）」や國學者黒澤翁滿の美しい中古文體の春本「藐姑射祕言（はこやのひめごと）」その他模範的春書としては池大雅堂等の奇書「春檮拆甲」、春的川柳を網羅した宛然性風俗全集の様な「川柳末摘花」、「逸著聞集」、「あなおかし」、漢文調の猥叙事詩の「毬歌國字解」等、現在の出版法が絶對に複刻を禁じるであらう様な立派な奇書に滿ちてゐる。

筆者は數年前、心理學教室にあつた頃、之等を一通り入手の便宜を與へられ、精神科學及び生理學等と共にこれら高度の創作良心をもつ性風俗書を、一定の結婚期に達した子女に閲讀させてもよいと考へるに至つた。然るに數年前にも「續群書類纂」複刻に當つて同書中にある「昨日は今日の物語」が猥褻至極とあつて多分削除處分を受けたと記憶するが、此の書は當時（德川初期）の性風俗をユーモラスに描いた、いはゞ今のコント集であつて全文殆んどソドミーを語り性行爲を語り性的暴行を描出してゐるにかゝはらずその太さ强さ明るさの爲に愉快に笑ひ、且つ一種の性的哲學を與へられるものである。

此の樣に發達した性的藝術であつたから、江戸期にはこれらの書畫が屢々性教育のための使命を帶び、嫁入道具中に加へられたも亦宜なりではないか。アルバート・モールの「性科學(セクジユアルウイツセンシヤフテン)」中には此の種の浮世繪が挾入されてある。然るに日本では尾崎久彌氏等が此の種の保存紹介及解説等の特殊的研究の爲屢々複刻したり寫眞版にしたりして出版を企てられたが、その都度押收の憂目を見て、國寶的祕畫は年々警視廳の埃と化し、或ひは外國の圖書館 蒐集家の手へ流出しつゝある。歌麿の祕畫等は大多數倫敦博物館に納められてゐると云ふ。徒らに有害性のみを杞憂し效用を考へないのは果して善俗良風の國策であらうか。大いに考慮すべき問題であらう。

勿論、人間に窃視慾があり、其の上「視感は人間的な性慾方面から謂へば全感覺中最も重要である」（ハヴロック・エリス「人間の性的淘汰(セクジユアルセレクション)」）以上、性行爲や痴態の視覺印象が相當の外的刺戟を與へる事は否めない。けれども文書圖畫等の視覺刺戟を受けた事がどれ程甚大な風俗壞亂を生むと云ふのであらうか。

そして、もし性的刺戟が亢奮を招致し良俗を害すると云ふならば、それ以上——觀念的刺戟以上——生理學的に性亢奮を惹起させるアルコール飲料や愛戲の一形式たるソシャル・ダンス、異性の接觸（カフェ、花柳界其他に於ける）はより以上禁斷すべきである。

併し現在の樣な檢閲制度の基因は恐らくも一つの淵源を考へる必要があるらしい。それはエリスが「羞恥心(モデスティ)の進化」として取扱つてゐる性的事物に關する「宗教的儀式的感情」の殘留と思はれる。エリスはクライン・パウルの適切な言を引用してゐる。「羞み(はにか)深い婦人は羞かしい事をするよりも、それを口にすることを遙かに怖れてゐる」と云ふのである。その風習の基礎たるや、「最も原始的な野蠻族中にも性に關係ある名を口にする事が神聖の冒瀆若しくは危險至極のことだと認めてゐる種族が

極めて澤山ある」と云ふ事實から來ると說明する。つまり、之は原始時代のタブーの名殘りであり、迷信的な性崇拜（セックスウォアーシップ）の粕に外ならない。尤も、迷信的道德は今や次第に現實的な厚生福利の倫理觀念に征服せられつゝあるが、我々は社會科學自然科學的見地の下に、愚かしい過去の性道德を揚棄（アウフヘーベン）すべきである。

此の見地から、翻つて我が國の性科學書の檢閲ぶりを眺めて見やう。先づ最初の大きな筆禍は、法醫學犯罪心理學精神病學の紀念碑となつたクラフト・エビング氏の「色情狂編」Paychopathia sexualis を明治廿七年日本法醫學界で譯述出版して發賣禁止を受けた事である。特殊的な著述が禁じられる位であるから、エリスの「性の心理」（鷲尾浩氏譯）が大正十年に、又ロビンソンの「性的感覺」が同年に、マーガレット・サンガー女史の「産兒制限法」が來朝當時に、そして秦豐吉氏のみでなく筆者も稀有の良書と信じるヷン・デ・ヱルデ氏の「完全なる夫婦」,,Die Vollkommene Ehe" が平野馨氏に依り全譯され直ちに發禁、半ば祕密出版的に頒布されたのが昭和五年――等々慘澹たるものではないか。

かくの如く人間たる以上原則として必ず一度は入込む性生活の必要不可缺な智識は風敎の名の下に封ぜられてゐて、もし智識を得んとするならば、彼等の行く手には賣淫か私通か、或ひはこれこそ「卑猥」な猥談か、唯三本の道がある。その三道も非科學的社會には寧ろ無いよりはましと云ふものだが、いかに體驗が尊いとは云へ、其等によつて與へられる智識は常に非衞生的であり非人道的である。しかも所謂品行方正な人々の中には結婚に至るまで確實な性的知識をもたなかつた爲に家庭悲劇の遠因を作つて了ふ。

之が「淳風美俗」の全面である。

映畫は種々な意味で、敎育、宣傳、娛樂等の手段としての價値を增しつゝあるが、大正十五年六月の大審院判決によれば「猥映畫」は「寫出セラレタルモノニ依リ映畫自體ノ如何ナルモノナルヤヲ認識シ得ヘキ狀態ニ置クモノナルカ故ニ映畫ヲ陳列シタルモノト謂ヒ得ヘク刑法第百七十五條ニ該當スヘキモノトス」とあり、又映畫のコッピーは昭和二年十月の大審院判決により「寫眞陰畫ヲ基本トシ寫眞陽畫ヲ製作スルコトモ亦印刷タリ得ヘキコト」として出版法の取締りを受ける。

そこで「性行爲及び痴態」の場面は殆んど檢閲の鋏を蒙る譯で、昨年度に於ては日本物九十四件、米國物七件、歐洲物五件がこれで切られてゐる。つまり日本映畫でも米國映畫でも檢閲難の第二位はこの「痴態」である。

尤も痴態と云つても、性行爲を明らかにしたものは啻

通ない譯で、丁度、浮世繪祕畫禁令後のあぶな繪に等しいものである。枕が二つ並べてあつたり性交後の疲勞を示したり濃艶な長襦袢の女がコケティッシュに微笑んだり、又外國物ではダブルベッドの狀態だの、靴下をぬぐ所だの、窓のブラインドをしめる所だの、或ひは情熱的な場面などに過ぎない。

それらの中の例外として昭和三年に公開された「人類の進化、第二編　大自然の法則としての愛の本能」は動物の性行爲を集めた貴重な科學映畫であつたが、無慘にも全部心なき鋏禍に葬られて了つた。又、最近ではソギエート・ロシアの「新女性線」が女性の發育・成熟・結婚・姙娠・出產などの生理を嚴密に記錄したが、矢張り元の形ちでは見る事が出來なかつた。から云ふ「風敎維持」がいゝか惡いか、それから效果があるかないかは、これ以上冗言を要せぬ筈である。

進步的生物學者故山本宣治氏は、千九百廿年より廿三年に亘り同志社大學生に人生生物學を講じた後、「聽講中に性的興奮を生じたる事があるか、あつたならば如何なる時に於て」の問を發し、百七の答を得た。興奮ありとせし者三十七(百分の三一・六二)、なしとせし者八〇(百分の六分・二八)であつた。同氏の講義たるや壯烈なもので、一般の「猥本」よりも徹底したものである事は「生物學研究」に報告發表の半ばにして同誌關係者より連載休止を懇願された程であつた。然るに前記の明答中少數の興奮ありし者でも大半は「初めは興奮したが馴るゝに從ひ皆無」とか「瞬時的興奮」に過ぎなかつたと云ふ。

十數年前の試驗的意圖もかうして成功したのであるが今後は益々此の種の科學的訓練が必要となるであらう。さうでなかつたらば、徒らに邪惡な想像のみを喚起する不徹底な猥雜な性科學が學問の名の下に巷間へはびこるに過ぎないであらう。

三、何故肉體を隱蔽しなくてはならぬか

肉體隱蔽の風習及び裸體美の心理分析については優に一書を成すべく、ナチス以前のドイツ等には數多くの著述がなされてゐる。

實際、肉體は隱蔽しなくてはならぬのが現代文明國共通の風習でありながら、刻々に裸體主義の主張が實踐されて行く。これは最も注目すべき背反的傾向である。いはゞ現代は「露出の美」と隱蔽の美が非常に激しく鬪爭してゐると云へやう。

紙數がないので結論を急ぎ、何かの機會に再檢討する事にしよう。

衣裳の起源は羞しい爲や隱したい爲めのみではなくして、異性を挑發せんが爲、注目を局部へ集中せんが爲であつた事は、「婦人服裝論（フラウエンクライドウング）」（ストラッツ）にも、前記「羞恥心の進化」（エリス）にも認められてゐる。少し風俗史を調べれば服裝、殊に女性の服裝は、たとへ全身を隱蔽する樣な大袈裟な風俗の時ですら、只管肉體を目立たせたい意嚮からである事が知られる。そして絶えず、如何に巧妙に裸體を現すべきかと云ふ事に苦心をしてゐる。一度着物と云ふものを採用して了つた爲に、今度脱ぐ時には種々な公式軌範に制約せられて困惑してゐる形——己の僞りで己を縛つてゐる形である。

所が今世紀には社會機構の種々な變化の爲、人間は輕裝を必要とするに至つた。ここに裸體主義は機會の前髮を掴んだ。彼等は本能的な露出慾の充足に驀進し初めたのである。諸外國では主として美術品にだけ現してゐた裸體主義を再び自分自身に現すやうになつた。併しそれとても一朝一夕の事ではなく、筆者が曾て雜誌「日の出」にそのナンセンスぶりを紹介した如く、初めて現在に近い海水着が米國海岸に現れた時は警官の出動となり禁令となり檢束となつた位ゐであつた。

裸體寫眞は千八百年代に現れたが、店頭では一々客に「貴方は美術家であるか」ときいて無理に美術家であるとの答へをきいてから賣つたものだと云ふ。日本では黑田清輝の裸體畫に腰卷をまいて陳列した事さへあつたではないか。

映畫では裸體を率先して示したいと云ふ企劃は次第に高まり、浴場や私室やその他の中に現さうとしてゐるが日本當局では仲々取締りの手をゆるめない。此處に昔から、多くの外國渡來者のためにその紀行中に揶揄された矛盾が今なほ存在してゐる。それらの殆んど總てに、申合せた如く、日本の裸體風俗は街路等で屢々見られるにか丶はらず、一度美術となると滑稽な程嚴格に取締まると書いてゐる。これは確かに一言辯解の餘地もない。尤も、その體面上か警察犯處罰令には「公衆ノ目ニ觸ルヘキ場所ニ於テ袒裼、裸裎シ、又ハ臀部、股部ヲ露ハシ、其ノ他醜態ヲ爲シタル者」を廿圓未滿の科料に處するとしてはあるが、夏など到る所に「袒裼」風俗が見受けられるのだからこれは空文に等しいのではなからうか。

そして日本が諸外國への體面上、裸體風俗取締を嚴にしだした頃は、所謂先進國では愈々裸體美を高く評價し裸體主義運動が勃興し、そのニュースを裸體國日本が取締るのに戸惑ひつ丶ある狀態になつた。つまり、本誌第二卷第五號に於て先輩、岩倉具榮氏が犀利に分析を果してゐられるが如く、着衣に轉位されたばかりの露出慾は

再び急速なる「お行儀」の變展によつて袖手傍觀の佇立狀態にある。であるから、半裸の舞踊を認容すると直ぐ全裸の外人舞踊團に襲はれて困惑したものゝ樣である。本年初め來朝したマーカス・ショウに對して、臍は出すべからず、乳は出すべからずと禁止にいそがしく樣々な話題を供した。フックスの「種屬の美(ラッセンシェーンハイト)」やストラッツの「日本人の藝術及生活に於る體形(ケルペルフオルメンイン・クンスト・ウント・レーベン・デル・ヤパーネル)」の中に掲載されてゐる萎縮した日本婦人の裸體寫眞を見ると少なからず悲哀を感じるが、最近の日本婦人の肉體は日本の物質文明の急速度以上飛躍的な發展である。

この際、裸體については出來る限り飛躍的にでも外國と步調を合せて明朗性を發揮すべきではなからうか。元來、裸體による刺戟などは他の刺戟より遙かに單純であるから直ぐに馴れて了ふ筈である。

裸體美術に於ても現在の問題となつてゐるのは第一に恥毛であつて、今迄は故意に除去して描いてあつたのが外國の作品に影響せられてか次第に自然のまゝ描出する樣になつたらしい。なぜ恥毛を今迄畫かなかつたかについては、裸體美術の模範となつてゐる希臘の婦人間に當時除毛の習慣があつたからであると云ふ說があるが、それも一說として、矢張り最も特長ある第二次性徵なるが故に避けたものであらうと思ふ。けれども、要は、醜からざる程度に一切を明るみへ開放すべきである。

四、性道德上の風紀取締りについて

出版法以上に取締りの嚴重なのは映畫であつて、大體ハッキリと忌諱の鐵則が具體的に決定されてゐる。それは勿論、映畫が最も動的であり視覺的であり綜合的であり、畢竟、大衆性を有するからであらうが、性風俗の檢閱標準に於て前述したもの以外（主にストーリー上のものをひつくるめて）簡單に述說して置く。

第一に、姦通は家庭制度に抵觸する故であらうが、原則として不許可である。

次に戀愛でも、敎員、軍人、警官等の情熱は檢閱難にかゝる事が多い。これについてはさほど訴求すべきではないと思はれる。何故かならば、餘程問題を提供せんとする企圖でない以上、無理に彼等職業人を作中に取扱ふに及ばないであらうから。

それから、年下の男を年上の女が愛するテーマも睨まれる事が多い。親子にして、戀を競ふ筋もおそらく鋏禍の種である。

此の兩者の如きは共に明らかにエディポス・コムプレクスを現はしてゐるもので、從つて人間にとつてどれ程

それらの心理が強く働き掛けてゐるかは鍬禍を蒙る事によつても知られる筈である。

それから又、近時は心中禮讃の映畫が或程度迄禁制されて來た。强姦は大概、「狀況殘酷ニ渉ルモノ」であり同時に「猥褻ニ渉ルモノ」である爲、その事情は明瞭に表現なし得ない。殊にその强姦者を被姦者が慕ふ如きは殆んどストーリーの改作を命じられる程である。その他米國映畫を一時賑はせた女王の戀は、屹度一部分位ゐ改正される。

此の種の性風俗の進歩に大して效果をもたらさないものに對しては禁止も或る點まで肯定すべきである。たゞ問題はもつと深い點に横たはつてゐる。日本人の模倣性は蓋し深い所から生じた特性の一つであらうから。

故に、檢閲方針は性風俗の表面的結果のみでなくその根柢の原因を見なくては無意味なものになる。例へば、心中映畫が製作されて心中者が簇々それを模倣したとする。これは表面的結果である。なぜ心中が一世を風靡するかと云ふ社會狀勢——これが根柢の原因であるのであるから、心中者達は幾分映畫に煽情されて模倣した點もあるだらうが、併し彼等はたとへ映畫がなくても、社會情勢に追ひつめられて心中と云ふ思考の一歩前にうろついてゐるのではないか。姦通然り、同性愛然り、そして「女王の戀」も然りである。つまり映畫が社會心理を無視して勝手に一風潮をつくつたのではなくて、社會心理の大きな絶叫がその種の映畫の出現をうながしたものである。

一體に爲政者と云ふものは、本末をあやまつて現象丈けを縛らうとする。そして無效なる總ての努力を拂つて結局失策に終る場合が多い。それは映畫に對してのみでなく、思想、宗教、藝術、風俗、道德、總てに對して同樣である。

五、何を取締るべきか

曾て自殺者が猫いらずを盛んに服毒した爲に政府は猫いらずの取締りをしやうとした時、販賣者側は、自殺するから猫いらずを禁斷すると云ふなら、レールも紐も川も總て禁止すべしだと抗議した。猫いらずのみを見て、「自殺時代」を見ないならば、自殺者は又他の方法を求めて行くであらう。だからもし猫いらずを禁斷する方針ならば、政府は猫いらず自殺の苦痛や悲惨を深刻に宣傳する方がよい。姦通を防止しやうと云ふならば、姦通の恐しい結果を明確に宣傳する方がよい。單に一瀧川教授の「刑法讀本」に姦通を是認してあるとて國家的な騒ぎを演じるならば、それは寧ろ批難者の心の狼狽と、教授の背

景にある全民衆の姦通觀の進展に對する恐怖とをさらけ出すのみである。

「川柳末摘花」に「つく〴〵と胡瓜のいぼに下女見とれ」と云ふバレ句があるが、たとへ「猥褻に渉り」、「劣情をそゝる」文書圖畫を片ッ端から禁じても、民衆の日常生活を圍繞する凡ゆる風壞氣分を禁制する事は出來ないであらう。芥川龍之介の「河童」には、音樂の韻律が警官に「猥褻感」を起さしめたとて音樂中止が命ぜられる場景が描かれてゐる。確かに音樂が性的亢奮を惹起するのは事實で、「音樂は性的近接を容易ならしめる」（ヴァスシード・ヴルパ）とすら考へられてゐる。

ところが文書、圖畫 演劇、映畫には單に刺戟を與へる以上、他に强い心理的效果をもつてゐる。それは人々のリビドウ纒綿の對象の代償となり得る點である。人々は情熱ある戀を求めて映畫館に行き、そこに銀幕へ自分自身の「投出」を行ふ。姦通や殺人の願望を銀幕へ轉位し、昇華し、代償し、投出する。これは小說にでも美術にでも云へる事である。中には「無理に春畫の眞似して筋違ひ」（川柳末摘花）と云ふ風な模倣者もあらうけれども――。所謂大殺陣大亂鬪の劍戟映畫が大流行した頃でも實際にそれを模倣した犯罪者は必ずしもふえなかつた筈である。寧ろ殺人的氣分をスクリーンに投出し盡して卻つて安全であつた位ではなかつたか。

探偵小說などが怪奇味本位になつてゐたが、それによつて怪奇的生活が實行された筈はない。寧ろその樣な神經症的な氣分は、それらを讀んでゐる間の空想的情緒に乘つて發散されてゐる。

以上、縷々述べ來つたが、これを要約すれば――

一、檢閲制度は刻々に進化すべきこと、

二、現實的事物に眼を馴らさせること、

三、出版物・興行物などが錯綜した慾望の代償作用を果たす安全瓣になれるを知ること、

四、一切の根柢は、社會情勢と人間自然の本能とにあること、

五、大人の性教育として性生活を美化し或ひは理性化する出版興行を許すこと、

六、性生活及びその記錄と教導を暗黑化しないこと、

七、性風俗の取締りが、根本的に「見當ちがひ」であること、

八、性の「お行儀」の淵源は原始的タブーにあるのを知ること、

九、檢閲制度の過酷は人間自然の健康性を奪つて一層病的に「醜陋」にすること、

十、一切を開放し指導すべし、明るみへ〳〵！

六、緊急に檢閲禍をとくべきもの

最後に筆者は今迄に記述しなかつたもので出版・興行を許さるべき諸例を列擧しておくであらう。曾て見聞して必須なものと思はれるもののみである（全譯全寫眞再版）

Havelock Ellis, Psychology of Sex
Fuchs, Erotische Kunst
Heinrich, Kisch The sexual life of woman
Krafft-Ebing, Psycho-Pathia Sexualis
Krauss, Das Geschlechtsleben der Japaner
Albert Moll, Sexualwissenschaften
Ploss-Bartels, Das Weib
Stratz, Frauenkleidung
Wolffen, Sexuelverbrecher
Stratz, Die Schönheit des weiblichen Körpers
〃 Die Körperformen in Kunst und Leben der Japaner

Van de Velde, Die yollkommene Ehe

愛經（カーマスートラ）、黄素妙論、痴婆子、如意君傳、愛壇（アナンガ・ランガ）、愛祕（ラハスヤ）、薫園祕話（ヤルダンパルヒユーム）、

ファンニーヒルの思ひ出　眞實の愛（トルウラブ）
大東閨語（傳春臺）　春風帖（傳淙隱）
幽燈錄（傳山陽外史）　はつはな（傳塙檢校）
甲子夜話　訓蒙好色圖彙（甲鎚）
褻瀆語辭彙（外骨）　佳撰開十八品ノ圖
西鶴全集

これらのものを發賣禁止し、却つて外國の學究にゆだねておいたり非合法出版に突落しおく事は蠻行である。その他、興行物としても、人間に樣々なる部分本能がある以上、それらをなるべく無害に充し得る樣な機關を解くべきではなからうか。

さもなくば、種々と錯綜した社會狀勢の下では倒錯した性慾は常に闇の中で卑陋に潛行し犯罪となつて行く。そして其の傾向はます／＼强くなるであらう。明治十四年桑野鋭氏（後に東宮御養育掛）は、淺草奧山の兩手なくして足藝を巧みに行ひつゝチラ／＼と局部を現はす見世物「手無娘」の見聞記を「東京新誌」に發表して雜誌ともに筆禍を蒙つたと云はれるが、これは確かに當時官憲の方が正しく思へる。から云ふ窃視慾を充す爲の観覽

物は観者には自由に見せて、その上、宣傳的になるものは公表を禁ずべきである。尤も、この兩立はむづかしいであらうが…。

要するに、禁止に依つて事態を一層惡化せしめることがあると云ふ逆説な皮肉な事實に當局者の眼を開かれむことを希望するのが本文の目的である。(完)

新刊紹介

☆『近世英國唯美主義の研究』——本間久雄氏の近著「近世英國唯美主義の研究」は同氏十數年來の研究の成果である。記者がこの書を讀んで感じた點、或は本書の特色と云はるべきものを數へて見ると

一、唯美主義運動に於ける日本趣味の參與の調査に於いて、非常に詳密であること。これは從來の人々が漠然と考へてゐたことではあるが、これほど判然と數數の證據を擧げられたことは、日英兩國の文化のために大きな功績である。

二、ワイルド研究に詳しいこと。この書はむしろ、ワイルドを中心に全精力を傾注された方がよくはなかつたかと思はれる程——勿論他の部分もよく出來てはゐるが——殊にワイルドの條が精彩を放つてゐる。

三、理論的な抽象的な詮議よりも、具體的な事實を細かく調べ美的又は道徳的判斷に於ては、濫りに一家言を弄せず、諸家の諸説を擧げて努めて中庸の判斷に達しようとしてゐること

四、著者は「唯美派の運動をどこ迄も一個の社會的現象として觀察しようとした。…言葉を換へて云へば、文化史的解釋を主としてこの運動を見ようとした」と云つてゐられるが、文化史的であるためには當然更に心理學的な觀察を加へたら唯美派のやうな文藝は一層面白い研究成果を示したことであらうと思はれる。

五、裝幀、用紙、印刷、製本とも相俟つて、如何にも唯美的な書籍を現出し、挿圖も極めて豐富で興味を誘發すること。(定價七圓五十錢、發行所麹町區九段下・東京堂)

☆『東洋精神の復活』伊福吉部隆著、東京神田三崎町二、第一出版協會發行(定價一圓五十錢)——著者が制度學者權藤成卿氏の影響を受けて考覈したる現代文明批評である。西洋文明を無理想なる自然征服の思想と見、東洋文明を自然との調和に生きんとする思想と見、前者の覆滅と後者の再興とを主張せる詩人的情熱に富める論策。東洋文明を自然の化育に安んずる思想とすれども、記者が同書を讀過しつゝある際、宛も富山縣下の大洪水の慘禍は盛んに新聞紙上に報道せられつゝあつた。記者はなほ自然の暴威を今少しく制するに非ざればその化育に甘ずる能はざるもの多きを、却つて痛感するもの

である。著者は干支の年暦を以て東洋史學と世界觀との根幹なりとす。誠に一家の見たるを認むるに吝でない。併し著者にして干支の十二を甲乙の十との最少公倍數、即ち六十の年數を以て一時代と見るその循環的世界觀の哲學的根柢を闡明せられたならば、なほ一層この發見はその意義と價値とに於いて重且大を加へ得たであらう。たゞこの循環的世界觀の心理的根柢を一日の明暮、四季の交替、一年の巡廻にありとしたるは分析的見解と一致するものあり、大いにわが意を得てゐる。たゞ六十年を以て一期としたるその哲學的、心理的根柢や如何、その文明觀との關係や如何、著者の再説を俟つものである。要するに讀者は著者の田園的詩魂――と云つては著者に叱られるかも知れないが――なほ盡きざるを欣ぶと共に、その學理の屢々詩魂のために掩はるゝなきかを危ぶましめらるゝを如何ともすることが出來なかつた。

☆『ロゼッティ「生命の家」研究』小花和武夫著、牛込早稲田鶴巻町四四三、泰文社發行、二圓五十錢――英國十九世紀の畫家詩人D・G・ロゼッティの詩篇「生命の家」を中心として詩人の全般を組織的に研究したる好著である。第一編文學史的背景、第二編生命の家各論、第三編ロゼッティ總評、附錄(ロゼッティ經歷年表、參考文獻書誌)、挿圖六葉を收む。序文中で日夏耿之介氏は「凡テノ文學及文學史ノ研究家ハ鑑賞カラ情念ヲ主ニシテ研究ニ入ルニ非ズンバ、考撰カラ理趣ヲ主ニシテ入リ、ソノ後各々足ラザルトコロヲ補ヒツヽスヽムノガ常道ノヤウデスガ、小花和君ハ後者ノ道ヲトッテ進程ヲ綴ルベキ人ト私ハ考ヘタノデスと」云つてゐるが、その意味で誠によく行屆いて書かれてある學究的(よい意味で)な好著である。著者は臺北帝大の講師であつたが、今や既に亡し。これは遺著である。謹んで著者の靈に敬意を表する。

☆「性とホルモン」理學博士石川千代松著、牛込若松町一一二、日本生化學研究所發行、非賣品――男女兩性はどうして決るか、胎兒の性別は豫知し得るか、精卵と性、生殖細胞と受精、女らしい女と男らしい男、內外泌腺の種類とホルモン、綜合ホルモン作用の働き、性ホルモン作用と若返り法…などの諸章から成つてゐる。精神分析と生物學者の交渉點に興味を持つ人、殊に本號所載フェレンチーの論文を讀む人には一讀をすゝめたい書である。發行所へ申出れば、無代で配付せられる。

資料

順性と逆性

長谷川誠也

この標題の語は、バイブルの和譯にあるものである。使徒パウロは、人間が神を忘れ、偶像を禮拜するやうになつたから、遂にあさましい行ひをするやうになつたのだと見て、左のやうに言つてゐる。

「此に縁て神は彼等が恥べき慾をなすに任せ給へり、其婦女さへも順性の用を變て逆性の用となす、此の如く男子は又婦女の順性の用を棄て互に嗜慾の心を燃し男と男と恥ることをなして其悖戻に當るべき報を已が身に受たり。」（ロマ書第一章二十六、二十七）

改訂譯は左のやうになつてゐる。

「之れによりて神は彼らを恥づべき慾に付給しへり、即ち女は順性の用を易へて逆性の用となし、男もまた同じく女の順性の用を棄てゝ互に情慾を熾し、男と男と恥づることを行ひて、その迷に値すべき報を已が身に受けたり。」

兩譯ともに、原文は總ふりがな付きであるが、今は、必要と思はれるものだけを遺して、その他は省いた。

この文章には、別段むづかしいが所もないが、「順性」と「逆性」との二種が、どういふ意味か、やゝ不分明である。參考のために、イギリスの欽定譯を見ると、左のやうに言ひ表はしてある。

For this cause God gave them up unto vile affections: for even their women did change the natural use into that which is against nature; And likewise also the men, leaving the natural use of the women, burned in their lust one toward another; men with men working that which is unseemly, and receiving in themselves that recompence of their error which was meet.

これは四十七人の學者が寄合つて作り上げた文章であるから、その頃においては、模範的のものであつたらうが、今日においては、なんとなくぎこちない書き方だ。殊に「ミート」といふ語の使ひ方は舊式であるから、現代文を讀みつけた者は、これに接して、まごつかざるを得ない。

『第二十世紀新約』バイブルは、左のやうに改譯してある。

That, I say, is why God abandoned them to degrading passions. Even the women among them perverted

the natural use of their bodies to the unnatural; while the men, disregarding that for which women were intended by nature, were consumed with passion for one another. Men indulged in vile practices with men, and incurred in their own persons the inevitable penalty of their perverseness.

さすがに現代語で書いてあるだけに、意味がはつきりしてゐる。これによつて「順性」といふ語の意味は「肉體の自然の用」であることが判明する。

バイブルの日本譯は、支那譯を參考にしたものだと聞いてゐるが、ここに引用した文章中に「性」の字を用ゐてある所から見ると、たしかにさうであらうと想ふ。この字は『中庸』に用ゐられて以來、問題となるものである。程子は「天の自然なる者を言へば、天道と謂ひ、天の萬物に付與する者を言へば、天命と謂ふ」と言ふ見方から「生をこれ性と謂ふ」と言ひ、あるひは「性中もとこの萬物（善惡のこと）あひ對して生するにあらず。幼より善なるあり、幼より惡なるあり。これ氣稟然ること有るなり。善は固より性なり。然れども惡もまた姓と謂はざるべからざるなり」と言つてゐる。これに據れば「性」の意味は「自然」である。朱子は「性即ち理なり」と註してゐるけれども、少しく狹過ぎるやうである。宇野哲人氏が「人のみでなく、凡そ物の天に禀けて生るゝ所、卽ち先天的に具有する生れ付きである」と解してゐるのは、まことに穩當である。また、この書をイギリス語に譯したレグも「性」を The Nature と譯し、脚註において、朱子に從つて、この語を「理」の義とすれば、不可解になつてしまふ、と言ふ意味を述べてゐる。要するに漢譯バイブルにある「性」といふ字は、『中庸』の「天命之謂性」の「性」を「自然」の意と解して、これを借用し、わが國の譯は、それを踏襲したのであらう。

「性」といふ字の意義と『第二十世紀新約』の譯し方とを合はせ考へて見ると、パウロの言つた意味は、一そう明白になる。

「ロマ書」の書かれたのは、紀元後五十六年頃であらうといふことだ。そのうちにある上記の引用文を見ると、パウロが、いかに、その頃の男女の亂行について惱んだかを想像することができる。なほ彼が、コリント人へ送つた書を見ても、その頃の亂倫狀態が、なか〳〵烈しかつたことを想像し得る。

「現に聞く所によれば、汝らの中に淫行ありと、而してその淫行は異邦人の中にもなき程にして、武人その父の妻を有てりと云ふ。」（「コリント前書第五章、一。改譯新約に據る。以下同）

「自ら欺くな、淫行のもの、偶像を拜むもの。姦淫をなすもの、男娼となるもの、男色を行ふ者、盜するもの、貪欲のもの、酒に醉ふもの、罵るもの、奪ふ者などは、みな神の國を嗣ぐことなきなり。」（同上第六章、九、十）

右の二引用文を見ただけでも、當時の狀態を、能く想像し得るであらう。ついでに言ふ、コリント人への書は紀元後五十四年頃に書かれたものであらうと言ふことだ。これと「ロマ書」とを通讀すると、紀元後五六十年頃のロマや、コリントの社會狀態は、キリスト敎徒の間においてすら「逆性」行爲の流行したことが分かる。だからパウロも訓戒のためには、相當に惱んだらうと想ふ。

男女の生活に關するパウロの理想は獨身主義であるがそれは、パウロのやうな人にして初めて實行し得ることで、普通の人間には望まれない。パウロとても、その點は十分に承知してゐるから、結婚生活を許すのである。

「男の女に觸れぬを善しとす。然れど淫行を免れんために、男はおの〳〵其の妻をもち女はおの〳〵其の夫を有つべし。夫はその分を妻に盡し、妻もまた夫に然すべし。妻は己が身を支配する權をもたず、之れをもつ者は夫なり。斯のごとく夫も己が身を支配する權を有たず、之を有つ者は妻なり。相共に拒むな、ただ祈る身を委ぬるため合意にて暫く相別れ、後また偕になるは善し。これ汝らが情の禁じがたきに乘じてサタンの誘ふことなからん爲なり。されど我が斯くいふは命ずるにあらず、許すなり。わが欲する所は、すべての人の我の如くならん事なり。

「我は婚姻せぬ者および寡婦に言ふ（中略）もし自ら制すること能はずば、婚姻すべし、婚姻するは胸の燃ゆるよりも勝ればなり。われ婚姻したる者に命ず（命ずる者は我にあらず主たり）妻は夫と別るべからず。もし別るる事あらば、嫁がずして居るか、又は夫と和げ。夫もまた妻を去るべからず。」（コリント前書第七章、一―十一）

これで一夫一婦主義が嚴重に規定してある。なほ、「ロマ書」には、夫の死後の再婚を許容してある。

「夫ある婦は律法によりて夫の生ける中は之に縛らる。然れど夫、死なば夫の律法より解かるるなり。然れば夫の生ける中に他の人に適かば淫婦と稱へらるれど、夫、死なば、その律法より解放さるるが故に他の人に適くとも淫婦とはならぬなり。」（第七章、二―三）

東洋の婦德は「貞女兩夫に見えず」といふ原則を核心とするもので、これに較ぶれば、パウロの敎訓は大いに寬大である。東洋の倫理思想に養はれて來たわれ〳〵から見れば、西洋婦人が、夫に別れた當座は、泣きたいだけ泣きながら――それこそハムレットの母のやうに――幾許もなく再婚するのは、いかにもだらしがないやうに思はれる。士君子の模範と言はれたフィリップ・シドニ

イの夫人は、夫が戰死し後、エリザベス女王の寵臣エセックスに再婚し、彼が斬罪に處せられた後、また他に嫁いでゐる。この例などは、吾々日本人の同情し難いものである。しかし、パウロの教へを奉ずる西洋人から見ればあたりまへの事であらう。彼等から見れば、母の再婚を歎いたハムレットの心理の方が却つて不思議であるのかも知れん。

パウロは、テモテに送つた書の中に、寡婦について注意を與へてゐる。

「眞の寡婦にして獨殘りたる者は望を神におきて、夜も晝も絶えず願と祈とを爲す。されど佚樂を放恣にする寡婦は生けりと雖も死たる者なり（中略）六十歳以下の寡婦は寡婦の籍に記すべからず、記すべきは一人の夫の妻たりし者にして、善き業の聲聞あり、或は子女をそだて、或は旅人を宿し、或は聖徒の足を洗ひ、或は惱める者を助くる等、もろ〳〵の善き業に從ひし者たるべし。若き寡婦は籍に記すな、彼らキリストに背きて心亂るる時は嫁ぐことを欲し、初め誓約を棄つるに因りて批難を受くべければなり。彼等はまた懶惰に流れて家々を遊びめぐる、啻に懶惰なるのみならず、言多くして徒事にたづさはり、言ふまじき事を言ふ。されば若き寡婦は嫁ぎて子を産み、家を理めて敵に少しにても謗るべき機を與へざらんことを我は欲す。」（テモテ前書第五章、五――十四）

若後家といふものは、とかくパウロの言ふやうになりがちのものだ。彼は、その醜態を見るに忍びないで、六十歳以上ならば、寡婦の資格があるけれども、それ以下の年齢の女には、

「夫もし死なば、欲するまゝに嫁ぐ自由を得べし。」（コリント前書第七章、三十九）

と許したのであらう。彼は學者でもあり。大旅行家でもあり。社會の各層を仔細に觀察した經驗も豐富であつたから、再婚の自由を許す方が、かへつて風紀維持の上に效果が多いと見たのであらう。

ところで、父の娘に對する態度についてのパウロ説には、父の横暴な無意識的心理の蔭が現れてゐる。

「人もし處女たる己が娘に對すること宜しきに適はずと思ひ年の頃もまた過ぎんとし、かつ然せざるを得ずば心のままに行ふべし。これ罪を犯すにあらず、婚姻せさすべし。されど人もし其の心を堅くし、已むを得ざる事もなく、又おのが心の隨になすを得て、その娘を留め置かんと心のうちに定めたらば、然するは善きなり。されば其の娘を嫁かする者の行爲は善し。されど之を嫁がせぬ者の行爲は更に善し。」（コリント前書第七章、三十六――三十八）

ここにある「人」といふ語は、『第二十世紀新約』には「父」となつてゐる。これで見ると、おやぢは娘を何時までも膝下に留めて置いてもよいことになる。若しこれを實行する者が多くなると、おやぢ階級との衝突が、一

そう激烈になるだらう。一體、パウロは剛毅な親父的權威の滿ちみちた人であつたらしい。さもなければ、あの時代において、ロマから小アジア沿岸に亙る廣い範圍內のキリスト敎徒を統制して、第二の開祖となり得なかつたらう。彼が、世の父に向つて、娘に對する態度を說く所に、その權威の一端が迸發してゐる。

西洋婦人が、いかな場合にも脫帽しない習慣は、われ〱から見れば、まことに變でもあり、無禮のやうにも考へられる。しかし、それには幾多の理由のあることであらう。さうして、パウロ說は、たしかに有力なものの一つであらうと想ふ。

「凡ての男の頭はキリストなり、女の頭は男なり、キリストの頭は神なり、すべて男は祈をなし、豫言をなすとき、頭に物を被るは其の頭を辱しむるなり。すべて女は祈をなし、豫言をなすとき頭に物を被らぬは、其の頭を辱しむるなり。これ薙髮と異なる事なし。物を被らずば、髮をも剪るべし。然れど髮を剪り、或は薙ることを女の恥とせば物を被るべし。男は神の像、神の榮光なれば、頭に物を被るべきにあらず、然れども女は男の光榮なり。(中略) この故に女は御使たちの故によりて頭に權の徽を戴くべきなり。(中略) 汝等みづから判斷せよ、女の物を被らずして神に祈るは宜しき事なるか。なんぢら自然に知るにあらずや、男もし長き髮の毛あらば、恥づべきことにして、女もし長き髮やらば、その光榮なるをそれ女の髮の毛は、被物として賜はりたるなり。假令これを抗辯(あらが)ふ者ありとも斯のごとき例は我らにも神の諸敎會にもある事なし。」(コリント前書第十一章、三――十六)

このうちの「權」といふ語は、「夫の權」の意味である。『第二十世紀新約』には「服從の徽」とある。この方が意味明白だ。これによつて見ると、婦人の帽子は、順性の徽章である。毛髮については、パウロ說以外に、いろ〱の說を立てることもできる。從つて、婦人の被物――帽子――についても、別な解釋が立つわけだが、ここにはそれらの事を說くまい。パウロ說が、西洋婦人と帽子とを、いかに結びつけるものであるかを知つてもらへば宜しいのである。

今こそ下火になつたが、婦人の斷髮は、一時大いに流行した。パウロ主義から言へば、これは神の賜物を粗末にすることである。逆性の一つであらう。しかし、婦人の無帽主義は發生しなかつた。それどころかわが國にも民國にも、婦人で帽子を冠るものが、だんだん多くなつて來た。パウロならば、この世界的流行は、婦人の順性の、いかに根深いものであるかを證明するものだと言ふであらう。(をはり)

蚯蚓恐怖

澁田見勝亮

私の幼時記憶として割合に強く印象に殘つてゐるのは四歳位の時の夏の出來事だ。

當時は私の住んでゐた所は郊外と云つても小都會（九州小倉市）の郊外で未だ農家等が相當點々としてゐた。が、夕方になると、かう云ふ郊外地方特有の夕涼みが始まる。家の前に社寺の參詣道路にある茶屋の腰掛臺の樣な四、五尺四方位の涼み臺を出して村人が數人づゝこゝかしこと集つてさんざめく。

私の家は他家とあまり交際はしてゐなかつたが、それでも竹で編んだ二間四方位の掛出しと云ふものがあつたので、近所の人二三人が集つて話しに來たものだ。婆さん連中が主で、中に一人爺さんが黑一點、嚴然とは行くまいが、控えてゐた。その爺さんが實にユーモラスな爺さんで、何時も僕の相手になつて吳れたものだ。孫の女の子なんか連れて婆さん達の中で何か一人で冗談をたゝいては笑はせてゐた。

どう云ふ動機からであつたかは忘れたが、何でも此の爺さんに煽てられたものらしい、僕が裸芝居を始めたのである。芝居と云つても三、四歳の子供の事だ、何でもない、唯腹に黑い帶をしめ、黑い覆面の樣なものを被つて腰に竹光の秋水を落しざし、爺さんのカチヤ〳〵と云ふ拍子木につれて見得を切るだけの事である。僕は小さい時は內氣な方で、あまり他の小供達とは一緒にそんなことをしたこともなかつたが、やはり一人居ると却て他の子供の眞似がしたい氣持があつたのだらう。內に居ると何時とはなしにそんなことを始めてしまつた。母もその樣な滑稽な仕草を惡いとは思ひながら、子供らしいことであるのと、自分の子がやはりさう云ふ事を爲得る樣に迄成長したと云ふことの嬉しさのためとであらう、別に怒りもせず唯笑つて皆と一緒に見てゐた。婆さん連もユーモア爺さんの拍子の取方が面白いのか、僕の恰好が子供らしくをかしいのか、夏の陽氣の爲か、それとも單調に退屈仕切つてゐた爲か、キア〳〵笑つてさんざめいてゐた。僕は得意になつて（今考へると實にをかしいが）刀を拔いてかけ廻り、目をむいて、切つたり、突いたり他の子供のを見て來た通りにやつたものだつた。

二日、三日と經つにつれて掛出の上の芝居は盛大になつて來た。見物の人數が一人二人と殖える。子供までが婆さんに從いて見に來る樣になつた。僕も何か技巧を凝らし出した。母に强請つてチヤン〳〵子を着たり、白い

覆面に變へたり、墨で畫いたり、花道の出方（當時こんなことを知つてゐたのではないが今から考えるとこんなものだらう）を前稽古と云ふ風だ。爺さんも鉢卷をしたり大きな拍子木と拍子木臺を作つたりして力んで來た。

外に出て見ると、子供達仲間にも段々評判になつてゐるらしい。之はと驚いた。僕は恥かしくなつた。外に出るのが何んだか嫌になつた。だが、芝居も仕たい氣がする。何か口實があつたら止めよう。何か理由があつて止めないと他人に對しても都合が惡いし、又自分の心にも咎める。何か口實があれば、それで止めたので他の子供が嫌味を云ふから止めたのではないと云ふ自尊心の滿足も手傳つて、私かに何か事が起つて呉れることを願つて居た、こんな判つきりした考へからであつたかどうかはわからぬが、少くとも之に近いものであつたのは事實である。

丁度其時、〇〇の先端が變に脹れ出した。始めは少しも氣にしてゐなかつたが、段々脹れるのでコレダ〱いゝ口實と思つたが心配にもなつた。今まで平氣で出してゐたのに何かしら恥かしい。早速芝居を止めた。自分でも之を如何にもひどい病氣でもあるかの如く考へやうと出來るだけ努めた。だが、心の中では大したことでない樣にと念じてゐた。夕方になると爺さんが「坊チヤンどうした此頃一寸も芝居はしませんな。今晩は一つ？」つて云ひ出すと、僕は「フヽン」と云つたゞけで、心持恥づかしくて飛んで逃げて行つたものだ。婆さん連まで「坊チヤンの元氣な所が見られなくて淋しい」なんて、お世辭を云ふ。母までがどうしたかと心配しだした。他人には「もう倦いたのでせう」と笑つては居るものゝ、內心妙に心配してゐるらしい。體でも惡くはないかと祕かに聞く。何ともないと答へると、では何故芝居を止めたかと來る。僕は普通の時は云ふのもどうとも思つた事もないのに、不思議に變つて來た身體が何か惡戲をした爲ではあるまいか、云つたら惡戲が知れて叱られるだらう、それと云ひ出すのが後れたので――早く云はないとひどくなる樣な氣もしたが――今更云ひ憎くゝなり、すねて默つてゐたが、追及愈々急なので遂に打明けた。

怒る氣持より自分の子供が先づひどい事ではなかつたと云つた氣持の方が强かつたらしく、母は案外平氣でホツとしたかの樣に、そんな事なら心配しなくてもよい、外でおしつこをしたでせう。ネ。だから土の上に居るミミズが怒つて罰を加へたのです。ミヽズを探して自分で水をかけて洗つてやればよい。之から決して外でおしつこをしてはいけませんよ――と云ふ意味の事を云つてやさしく非難した。僕も安心した。さう云へば、二、三日

前外で小用をしたことがある。てつきりあれだと思つた早速女中にミヽズを探させて念入に行水させ、それからミヽズにパチ〳〵手を拍たいて「之から決して致しませんから、どうぞ早く治ります樣に」と祈つた。ミヽズは心得たと云はぬばかりにチヨロ〳〵とくねつて居た。

その後間もなく治つた。時機が來たのかも知れぬが、僕は少くともミヽズを洗つてやつたためだと信じた。小供の座興だ。勿論芝居は何時の間にか忘れてしまつた。この母の敎訓？　は僕にとつて外で小用をさせないことには大いに役立つたらしい。

以來數年間にもならうか（之は確かではないが）決して外で小用はしなかつた。すれば必ず脹れると信じた。脹れる事も恐ろしかつたが、爲てはならぬ何か惡い事をやるかの樣に何處からか、强い聲が聞える樣で、心が責められて、どうしても出來なかつたのだ。

その內に年が經つにつれてそんな馬鹿なことがあるものか、脹れるなら脹れて見ろと、反抗心も出來て、何時とはなしにこの敎訓も解消してしまつたが、外で小用をする度每に當時を思ひ出し「フヽン」と微笑すると同時にやはり何かしらハツとする一種の身震ひを感ずるのである。

今も尙他の小動物には、何の感じもないが、道端にミヽズが轉がつて居ると、何だか避けて通りたくなる。跨ぐのが恐ろしい樣なすまぬ樣な不思議な氣がするのである。幼時定着の如何に根深いものであるかゞ思はれるが併しこれは勿論私一人の個人的經驗としてのみは解釋されない。蛇恐怖と共通する何物かがあつて、その起源はトーテミズムに存するに相違ないと思はれるが、今は確言を避けておく。（完）

海は恐ろしい

奥本島田

水泳中に海水の靑いのと、海底の狀景を見て恐怖を感ずる。その心理を自己分析して見た。

〔聯想〕海底には藻、石塊、泥等がある。その中に何だかわけのわからぬ動物が居る。その狀景は陸上の景色よりも幾分かぼんやり見える。それは陸に於ける夕暮の景色を思はせる。水の靑いこと、底の暗いことは、山々の靑葉鬱蒼たる景色、又は暗い夜を聯想せしめる。

幼時に海や溜池へ行かうとしたことがあつた。又行つてよく遊んだものだつた。そういふ時代には、おばあさんが海やツツミ（溜池）にはミトチ（怪物）が居て水の

中へ引いてしまうから深い處へ行かれぬ、と私共に云つてきかせたことが再三あつた。うす暗い夕暗、やみ夜等にはおばけが出て來る。狐狸がだます。山へ行くと恐ろしいものが居る等々幼兒時代からよくきかされたものだつた。青い水面と死人の皮膚の色とが聯想されて何だかいやらしい感じがする。ある日のこと溜池の水が青ずんでゐた。堤には青い皮膚をした溺死者がゐるのを見たことがある。ゆふれいに濱風。海へはまつて死んだ。

〔註釋〕夕ぐれの仄暗さ、夜の暗さ、青々とした山の中死人の蒼い色、溜池の蒼ずんだ水。――これ等は怪物の出現するとされてゐる時の狀景(條件)である。

海はこれ等の條件をいつも具へてゐる。海はいやらしい恐ろしさを常にもつてゐる。陸に於ける恐怖が海のそれとされてゐる。それは「海にはミトヂが居るのだ」といふことによつて強く最初に定着されたのだつた。――おばあさんの愛を一身に集めてゐた幼兒時代にはよくおどかしで禁制されたことがある。

怪物によつて害されると再びこのおばあさんの愛は受けられないこととなるのである。おばあさんは其當時に於ける對象であつたのだ。ミトヂに引かれると再びこの地へ歸へれない。卽ち死である。死の恐怖の中にはおばあさんの愛を失はねばならぬと云ふこともあつたかも知れぬ。海のいやらしい恐ろしさは陸上の恐怖と海の恐怖とのコムプレクスである。その恐怖は死の恐怖である。死の恐怖は無意識の胎內憧憬より生じてゐたのだつた。端的に云へば、海の恐怖は胎內憧憬のアムビファレント的恐怖だ。そこには生物學的な根據がある。フェレンチーの「性交と受胎」(本號所載)を讀むと重大な啓示を得ることであらうと樂みにしてゐる。(昭和九年六月十七日)

性慾心理參考文獻

――邦語の部――

生形要

性慾心理の研究は、古くから、洋の東西をとはず、行はれて居たやうである。そして、それは、宗教的にまたは藝術的に、乃至は生理學的、言語學的、社會學的に、いろいろ言はれて來て居る。その外國語の文獻の如きは、優に數千種を算へるであらうし、また、

山本宣治氏、「性學文獻解題」(「山本宣治全集」のうち「性教育」の附錄)

杉浦淸氏、「モルル氏性科學文獻」(「モルル性科學大系」のうち各卷末の附錄)

等々、外國語の性慾研究資料については、すでに、立派なビブリオグラフィーと思はれるものが、わが國でも出版されてゐる。しかし今日のところ、いまだ『性慾心理邦語參考文獻』といつたものがないやうなので、こゝにその一般的なものを蒐集しアルファベット順に整理した次第である。

なほ性慾心理研究は、元來わたくしの專門とするところではないので、この方面の研究家である日本醫科大學の榛葉勇吉氏から、資料について、種々教導にあづかつたことを附記し、同氏に對し、感謝の意を表する。また外國語の性慾心理文獻は、すでに出來上つてゐるので、不日、『精神分析』誌上で、發表したいと思つてゐる。

凡例

一、性慾心理に關する各方面の邦文資料を著者（譯者）名をアルファベット順に配列。

一、著者不詳のものは、最後に一束し、これは、書名別アルファベット順に配列。

一、雜誌、新聞所載の研究資料は、すべて、その個所、例へば、卷、號數、又は頁數を記入。

一、「精神分析」所載分、春陽堂版フロイド全集各卷、及び本紙前號所載「戀愛心理文獻」は擧げず。

一、早急に整理したため、正誤、補遺を要する點があるであらうが、これらは、諸賢の叱正教示を俟ち、他日改訂したいと思ふ。

阿部余四郎　現代遺傳進化學

足達三郎譯（フイルド）幸福なる結婚生活　昭八・三　性科學研究所

足達三郎譯（ロング）正しい性生活　昭八・一〇・　性科學研究所

赤神良讓　キッスとダンスと自殺の學說　昭・五・

赤津誠內　性典（大日本百科全集のうち）

秋元洗二　婦人性學

秋山尙男　男を弄ぶ女變態性慾者の實例（「性と愛」第二卷第一一號）大一一・一一・一　性愛社

靑樹繁譯（ザッファマゾッホ）性の受難者、二五五頁。大一三・二・二五　金正堂

靑樹有　變態性慾衝動と臀部との關係（サジストと異性の臀部）（「性」五八頁　第七卷第五號）昭二・五・一　日本體性學會

靑柳有美　戀愛讀本

靑柳有美　色情の意識關係（「性公論」第二卷第六卷）大一四・二

靑山倭文二　變態遊里史　一〇〇頁　昭二・六・二　文藝資科研究會

青山倭文二　艶情小説集（世界性受獵奇全集第六卷）
荒川芳三譯（エリス）性と文明
淺　蟷　子　熱帶地に於ける賣笑婦（「性」一三頁、第七卷第一號）大一二・一・一　性研究所
朝倉無聲　見世物研究
淺野玄府譯（ハンス・ハインツ・エーウエルズ）十一人の支那人と一人の花嫁（「犯罪科學」二〇四頁、第一卷第三號）昭五・八・一　武俠社
蘆原覺了　性の新教典
渥美清太郎　女裝の男（「犯罪科學」第一卷第一號）昭五・六・一　武俠社
武俠社　近代犯罪科學全集　全一二卷
武俠社　性科學全集　全一二卷
文化普及會編纂　人間奇話研究　第一卷（變態心理研究の奇話　二三七頁）第二卷（心靈現象の奇話　三一一頁）第三卷（戀愛性慾精神病の奇話　一一七頁）第四卷（幽靈の奇話　二一四頁）昭八・三・五　帝國教育研究會
文藝資料研究會　戀愛十二史
文藝資料研究會　戀愛文獻叢書
文藝市場社　世界好色文學史
千葉龜雄　戀愛と性慾と貞操（「性公論」第二卷第六號）大一四・二

大日本文明協會譯（ケツネエリイ）婦人の解放と性の壞滅
大日本文明協會譯（エビング）變態性慾心理　大二
大日本文明協會譯（ドンケスタア）性の決定
大日本文明協會譯（ロビンスン）性的知識
大日本文明協會譯（フオーレル）性慾研究
談奇館同人譯（アリベール）同性愛の種々相
出口米吉　原始母神論
出口米吉譯（ハワード）性の崇拜
土肥慶三　世界黴毒史
海老名靖　性的犯罪考
衞藤利夫譯（ルカ）戀愛の近化　大三　文明書院
福永渙譯（ラッセル）結婚と新道德　アルス
藤井武　聖書の結婚觀
富士川游　性慾の科學（性科學全集第一卷）武俠社
藤澤衞彥　追補變態傳說考（二形丹後と半男女文獻）（「變態資料」第一卷第二號）大一五・一〇・二五　文藝資料研究會
藤澤衞彥　變態傳說史　一一四頁　大一五・一一・二〇　文藝資料研究會
藤澤衞彥　蛇性の婬研究（第十回變態性（兩性）の表徵としての蛇性の婬其の一）（「性論」第二卷第五號）昭三・六・一　性論社
博文館　東西浴場奇態風俗鑑（「講談雜誌」第一六卷第一一號）昭五・一〇・一　博文館

半田孝海　嫉妬の研究
花房四郎　ペッチ・ルイザ其の他（「犯罪科學」第一巻第七號）昭五・一二・一　武俠社
羽太鋭次・澤田順次郎　變態性慾論　七〇四頁　大四・六・一五　春陽堂
羽太鋭次　性愛研究と初夜の知識
羽太鋭次　性及性慾の知識
羽太鋭次　性典
羽太鋭次　性慾研究と其疾病療法
羽太鋭次　戀愛性慾論
羽塚隆盛記（ラクラル）　ナポリの祕密博物館
原　浩三　日本好色美術史
原田實譯（エレンケイ）　戀愛と結婚（岩波文庫六六六―六六九）
原田實譯（リンゼイ）　友愛結婚
巴陵宣祐　人類性生活史　昭七
巴陵宣祐（ラガルト）　古代醫術と分娩考
日夏耿之介　女人妖魅考（性科學全集第十巻）武俠社
平井蒼大　大阪賤娼誌（「犯罪科學」一四一頁　第一巻第七號）昭五・一二・一　武俠社
平岩警邦　性現象並びに發生に關する讀書指針（岩波生物學講座第一三巻）配本昭六
平野馨譯（ヴェルデ）　完全なる夫婦　全三部　昭七　平野書房
平野馨譯（ヴアツヤヤナ）　カーマ・スートラ　二七六頁　昭七・七　平野書房
帆足理一郎　聖と愛の世界
報知新聞社　今様辨天小僧（「報知」昭三・七・二〇）
本田一郎　變態を賣る幇間（「文藝時代」第二巻第十一號）昭五・一一・一　新潮社
本間久雄（エレン・ケイ）　思想の眞髓
飯野明　結婚術
今田謹吾　異狀風俗資料研究號（「犯罪化學」別巻）昭六・七　武俠社
今田謹吾　戰爭と性地獄（「犯罪科學」増刊、昭七・六）武俠社
今村螺炎　朝鮮の半陰陽文獻（付、各國半陰陽文獻）（「變態資料」四八頁第二巻第四號）昭二・五・二五　文藝資料研究會
伊勢孫藏（ゴリカン）　結婚の心理　大三　文明書院
石川千代松　性と生命　性科學全集第二一巻　武俠社
石川巖　江戸文藝と男色（「奇書」第一巻第四號）昭三・九・一〇　文藝資料研究會
石角春之助　變態乞食の性的犯罪（ウールニングの乞食垣見の乞食）（「犯罪科學」第一巻第五號）昭五・九・一　武俠社
石原純　科學的戀愛論（性科學全集第十巻）武俠社
伊藤竹酔　變態廣告史　六六頁　昭二・三・二〇　文藝資料研究會

井東憲 變態人情史 九六頁 大一五・九・二 文藝資料研究會
井東憲 變態作家史 九二頁 大一五・一二・一五 文藝資料研究會
岩田準一 本朝男色考（「犯罪科學」第一卷第一、四、五、七各號）昭五・八・一――一二・一 武俠社
井澤三樹譯（ウィッテルス）愛の精神分析 昭和五年十一月 アルス
泉芳璟・竹内道之助譯（マラ）アナンガ・ランガ
泉芳璟譯（ヴアツヤヤナ）カーマ・スートラ 大一二・一〇
泉芳璟譯（――）ラテイラ・ハスヤ（性愛秘義）大一五・九 印度文學研究會
蛟川春水 接吻の變遷 昭六・四 日日書院
賀川豐彦 愛の科學
片山孤村譯（ワイニンゲル）男女と性格 大一四
加藤・荒木 殺人と性的犯罪（犯罪科學全集第九卷）武俠社
加藤玄智 日本宗敎風俗史
加藤咄堂 尼間信仰史
河原萬吉 猥談奇考 三三二頁 昭三・五・二〇
河原萬吉 日本十日物語（日本デカメロン）三二六頁 昭三・六・二〇
河原萬吉 日本情痴集 五四三頁 昭三・一二・一〇
木下策夫譯（マルゲリツト）戀愛無政府
木村松代 結婚社會學
木村鷹太郎 東西古今娘子軍
木村宇佐治 法律の觀たる娼制度
本間久雄（カルソン）結婚の革命 大一三
北川草彦（本名、喜多壯一郎）女の匂ひと香 昭六
北野博美 性的行事としての盆踊の研究 大九
小泉鐵譯（シュマールハウゼン）性的解放時代
久保良英 精神分析法 昭五・七
藏井生 疑問の男（「新性」第一卷第二號）大一三・二・二〇 新性社
前田誠孝 性的誘惑の種々相と其の對策
前川堅市譯（スタンダール）戀愛論（「岩波文庫」七三五―七三九）
馬島僴譯（ストープス）避姙の研究
馬島僴譯（ストープス）避姙の栞
馬島僴 產兒調節の理論と實行（性科學全集第九卷）武俠社
丸木砂土 世界艷笑藝術（性科學全集第六卷）武俠社
正木不如丘 人性醫學（性科學全集第十二卷）武俠社
松本豐吉 性愛受難相
松村松年 戀愛と年齡その他
三村德藏 新東京陰間園（「犯罪科學」第一卷第二號）

昭五・七・一　武侠社
三田村鳶魚　江戸の珍物
宮地嘉六　女裝の男（「文藝時代」第二巻第六號）昭五・六・一　新潮社
宮武外骨　賣笑婦異名集
宮武外骨　半男女考
宮武外骨　奇慾流行史
宮武外骨　猥褻廢語辭彙
宮武外骨　猥褻風俗史　明四四
水上技譯（ハテフニアク）　戀の革命家
元田勇次郎、他三氏譯（スタンリ・ホール）『青年期の研究』（明治四十三）同文館
守田有秋　變態性慾秘話　三六五頁　昭五・七・一〇
守田有秋　自由戀愛秘話　平凡社
村上啓夫譯（ワイニンゲル）　性と性格
村谷新次譯（コロンタイ）　戀愛の道　昭三
村山知義　變態藝術史　五二頁　大一五・一・二　文藝資料研究會
村山知義　性慾と社會　昭四・三
室町欣彌　野郎若衆日記　俳優異聞（「講談雜誌」第一六號第一一號）昭五・一〇・一　博文館
流山龍之助　エログロ男娼日記　一〇五頁　昭六・七・五　三興社

長濱繁　性及性病の知識（萬有知識文庫）昭九・六
永井潛　兩性問題と遺傳及び優生學（「性扁」のうち）
永松淺造　性慾犯罪篇（世界犯罪叢書第八卷）
永代美知代譯（ミューラック）　ジョンハリフアクス・愛と眞實
中村古峽　變態心理と犯罪（犯罪科學會　第七面）武俠社
中村古峽　變態性格者雜考　一〇四頁　昭三・六・二五　文藝資料研究會
中代富士郎　エロオンパレード（「文學時代」一三七頁　第二卷第一一號）昭五・一一・一　新潮社
中山太郎　日本婚姻史
中山太郎　賣笑三千年史
中山太郎　日本民俗志
南方熊楠　南方隨筆　正續二册
中山善三郎　裏から覗いた淺草（ルンペン淺草記）（「中央公論」第四六卷第一號）昭六・一・一　中央公論社
二階堂招久　初夜權　大・一五・南海書院
西村眞次　人類性文化史（性科學會第五卷）武俠社
日本醫學研究所編　モヒ性慾科學大系　昭九・七
日本蒐癖家協會編　世界珍書解題
野口歸洋　男性及女性及び世にも不思議な女彫塑家、男子禁制　大一三・一二・二五　グランド社
野口歸洋　女性化せる男と男性化せる女の實例、男子禁

制 大一三・一二・二五 グランド社
越智貞造 人類及び家畜の人工的姙娠術
小川劍三郎 醫術と遺傳
小原國芳 結婚編
岡康雄譯（モーデル） 戀愛と文學 大一二・六 文明書院
奥むめを 婦人問題十六講 大一四
小野金次郎 伯爵夫人と變態性慾（「實話雜誌」第一卷第一號） 昭六・四・一 非凡閣
大知良作 性病典
大道和一 情死の研究 明四一
大隅爲三譯（ヴァッヤヤナ）（カーマ・スートラ 大四・七
大杉榮譯（ルハルノー） 男女關係の進化
大槻憲二 ヒステリーと性慾（犯罪科學 昭七・五月號）
武俠社
大槻憲二 處女性の精神分析（文學時代、昭七・三月號）
新潮社
大槻憲二 處女性と童貞の尊重（婦人公論、昭八・六月號）中央公論社
尾高三郎 總入日本性愛奥義篇（世界性愛談奇全集 第三卷）
尾崎久彌 江戸軟派雜考
六合館 酒落本大系 全一二册
齋藤昌三 變態崇拜史 七七頁 大一六・一・一五 文藝資料研究會
齋藤昌三 變態蒐癖志 九八頁 昭三・一・一九 文藝資料研究會
西條軍之助 戀愛の解放
酒井潔 愛の魔術
酒井潔 佛蘭西好色文學史
酒井潔 らぶ・ひるたあ（媚學）
榊保三郎 性慾研究と精神分析學 大八・三 實業の日本社
坂田俊夫 日本猥談集 五〇三頁 昭三・三・五
坂田俊夫 江戸猥談 五一〇頁 昭四・五・五
山東社 萬國性愛奇書集（世界性愛談奇全集 附錄）
山東社 世界性愛談奇全集 全六卷
佐々謙自譯（――） 世界珍書及艶書解題 昭三
佐藤八郎 女裝男の戀と死（「講談雜誌」第一七卷第三號） 昭六・三・一 博文館
佐藤紅霞譯（フックス） 變態風俗史
佐藤紅霞 好色祕事談綺
佐藤紅霞 日本性的風俗字典
佐藤紅霞 性慾學語彙上卷 一五八頁 大一五・一一・二五 文藝資料編輯部
佐藤紅霞 性慾學語彙下卷 一一七頁 昭二・六・一五 文藝資料研究會

佐藤紅霞　世界艶語辭典
佐藤紅霞　世界性慾學辭典　三三一頁　昭四・五　弘文社
佐藤孤星　體臭と變態性慾者（「性」第七巻第一號）大一二・一・一　性研究所
佐藤正逸　女子マゾヒズムスの特性（マゾヒズムスの起源と退行的特性及び江戸時代に於けるマゾヒズムスの遺傳の法則）（「性」六九頁第七巻第五號）昭二・五・一　日本體性學會
澤田撫松　變態仇討（文藝市場」一六頁第二巻第三號）大一五・三・一　文藝市場社
澤田撫松　變態刑罰史　七六頁　大一五・七・二〇　文藝資料研究會
澤田・河合　性慾より生ずる罪惡史
澤田四郎　古典時代の同性愛（「新性」第一巻第一號）大一三・一・一　新性社
澤田順次郎　性に關する傳說の研究
澤田順次郎　神秘なる同性愛　三〇〇頁　大一四・一・一〇　成光館
澤田順次郎　變態性醫學講話　昭九・七　通俗醫書刊行會
瀬木俊郎　闇に咲く女裝の美少年（「實話雜誌」第三巻第一二號）昭八・一二・一　非凡閣
關榮吉（フロイド）トーテムとタブー　二八七頁　昭五・八　アルス
關原吉雄　小學校兒童の生命と性問題
關根重四郎　江戸花街沿革史
瀬戸義直譯（フィールディング）性の社會的考察
柴田茂譯（ヴァツヤヤナ）カーマ・スートラ　大一三・五
澁川玄耳　支那閨房祕志　昭三
島次郎　半男半女物語（「實話雜誌」第一巻第一號）昭六・四・一　非凡閣
新潮文庫　トルストイ性慾篇
新潮社　世界の怪奇と美とを探る座談會（「文學時代」一一二頁、第二巻第一一號）昭五・一一・一　新潮社
小生夢坊　繪入世界性愛文學面（世界性愛談奇全集第四巻
春秋社　現代醫學大辭典（全二五册
相馬二郎　變態處方箋　昭五
菅原　愛の還俗（「變態心理學講話集第一編」）
杉江董　被動的ソドミヤの一例（「性」四二九頁　第二巻第五號）大九・一〇　天下堂書房
杉田直樹　病的性慾心理（「性扇」のうち）
杉田直樹　近代文化と性生活（性科學全集第二巻）武俠社
杉田直樹　Masochism の女のはなし（變態性資料」第二巻第一號）昭二・一・二五　文藝資料編輯部
杉浦淸譯（モルル）性科學大學
杉浦淸譯（モルル）性科學文獻（「モルル性科學大學」のうち

杉浦泉三郎　見世物女の變態的性生活の種々相（「犯罪科學」第一卷第一號）昭五・六・一　武俠社

杉浦有志太郎　禁慾及節慾（「性扁」のうち

橘源太郎　性と戰爭　昭八・五　高瀨書房

高木乙熊　花柳病豫防に關する報告　內務省衛生局

高峯博　夢學

高峯博　性と神經衰弱

高岡直方　日本獵奇史

高田義一郎　變態性慾編（性科學全集第八卷）武俠社

高田義一郎　變態性慾と犯罪（犯罪學全集第一卷）武俠社

高山樹　性慾五千萬年史　昭七

瀧本二郎譯（ド・ブレス）　世界性業婦制度史

瀧本二郎　社會勞働問題と產兒制限論

田中香涯　江戶時代の男女關係　三四〇頁　昭四一・一・一五

谷崎潤一郎　祕密（「明治大正文學全集」第三五卷）昭三・三・一五

田村吉久譯（ヴアツヤヤナ）カーマ・スートラ

天人社　世界犯罪叢書　全十卷

寺田精一　科學と犯罪

寺石正路　食人風俗志

東京社　青春と戀愛座談會（「婦人畫報」昭九・五）

富岡直方　明治獵奇史　二九五頁　昭八・二・五

利光偏譯（ゲケロウ）　性慾論

ＴＳ生　女性の如き男性「性」第七卷第一號）大一二・一・一、研究所內

內山資次譯（コロンタイ）　グレート・ラブ　昭三　アルス

上田恭輔　生殖器崇敎の話　大一〇

上森健一郎譯（ネフザウイ）　匂へる園

梅原北明編　明治性的珍聞史、一一七頁・中・一二〇頁・大一五・九・一―一六・一・一〇

梅原北明　變態仇討史　一〇八頁　昭二・五・四　文藝文料研究會

梅原北明　獸姦雜考（「文藝市場」第三卷第七號）昭二・七・一　文藝市場社

梅原北明　秘戲指南　昭四・五　文藝市場社

梅原北明　繪入戀愛術（世界性愛談奇全集第一二卷）

梅原北明　世界好色文學史

梅原北明譯（エリス）　女子性典

梅原・小生　世界艷情小說集（世界性愛談奇全集　第五卷）

梅辻英郎　綠林夜話（「怪奇クラブ」第一一卷第五號）昭五・八・一　成海堂

和田德太郎　婚姻と雜婚

綿谷摩耶夫　性愛嫉妬考　昭四

矢口達（ストープ）　結婚愛

矢口達　世界性的風俗史（性科學全集第七卷）武俠社

山本宣治　性學文獻解題（山本宣治全集第三卷）
山本宣治　性教育（山本宣治全集）
山本宣治・安田徳太郎　性學文獻解題（「性教育」のうち）大一三・八
柳田國男　石神問答
柳沼澤介　資料寫眞集（「犯罪科學」全集別册）昭五・三　犯罪科學研究同好會
横溝正史　ある女裝冒險者の話（「文藝時代」第二卷第一號）昭五・一・一一　新潮社
横山桐郎　生物界の兩性生活（性科學全集第五卷）武俠社
吉岡永美譯（フロイド）トーテムとタブー（昭三・三）啓明社

×　×　×

江戸性的小咄考（「談奇黨」第一號）
古今性的小咄集（「變態黄表紙」第一卷第三號）
民族資料としての性祭典（「新性」第一卷第一號）
性的小咄集（「變態黄表紙」第一卷第二號）
（なほ卷末補遺參照）

——以上——

前號正誤

頁數	行數	誤	正
表紙第一面	上から第二列	第二卷第七號	第二卷第六號
本文　二	九(三段)	*長崎文治	△長崎文治
六	一二	拂つて身體	拂つてゐる身體
七	七	論じてゐるゐる	論じてゐる
七	一六	自己慾情的を	自己慾情的な
一三	一一	菅澤の	菅澤への
二〇	下段八	あるやうに考へられる	外部に向けられる
二三	下段八	生命本能	本能
七三	下段二〇	意圖に多なら	意圖に外なら
七五	下段七	困つた	困つて
表紙第四面	上から九列	Tomohi	Tomohide

講座

對象愛の種々相

岩倉具榮

一、自己戀愛と對他戀愛

自己戀愛が對象愛に轉ずるのは、如何にしてであるか。その主な轉じ方をフロイドは表に作り上げてゐる。この表は本誌前號に既に大槻氏が引用してゐるが、論述の必要上、こゝに再錄することにしよう。

一、ナルチス型の戀愛對象（1、現在の自分。2、過去の自分。3、自分自身の一部。4、自分のあり度きもの。）

二、依憑型戀愛對象（5、養育する母。6、保護する父）

最初の四つの場合では對象愛への轉向は自己戀愛を通過してゐる。依憑型 Anlehnungstypus といふ術語は、リビドーの外部に向けられた要素が、その存在の最初の形に於て、云はゞ自己保存本能の上にそれ自身を托し、從つて自己保存本能を滿足させてくれる者に向ふに至ると云ふ意味である。

（1）は對象選擇の最も簡單な形である。それは單に原始的自己愛（「現實」自我への愛）が同化の原則に從つて他愛に轉位（置換）せられたに過ぎないことを示すものだ。このやうに、吾々は吾々自身に似たものを愛する傾向のあるのが、全く一般的である。その類似は智能、性格、道德標準、社會階級、種族的の型、或ひは肉體的の特徵その他何たるを問はない（例へば、統計の示す所によれば、概して丈の高い男は丈の高い女と結婚し、丈の低い男は丈の低い女と結婚する如きである。勿論、丈の低い男が丈の高い女を殊に選ぶやうな場合もあり得る。これはナルチスムスでなく、劣等感の補償作用であらう。）この型の選擇の一つの特別に重要な現象は、同性愛に導く所のものである。何故なら、自分と同性の者はある重要な點に於て、異性者よりも自分自身に似てゐるからだ。このことゝ關聯してゐるのは、同性愛的の戀愛選擇は强烈な自己戀愛者が非常に屢々なすといふことである。異性愛をなすには同性愛をなすよりも大體に於てリビドーが愛他の方面に於いて一般に發達してゐることが必要である樣に思はれる。

（2）は、ナルチスティッシュなビドーが個人の發達のある段階――普通には、本人（男或ひは女）が未だ若さと美の肉體的魅力を保つてゐた時期――に定着を受けるのが屢々だといふ事實に基くのである。此の如き個人はかくしていつまでも、一定の年齡に於る自分自身を愛し續けてゐる。（かゝる定着はある時には、實際その個人の容貌をいつまでも若々しく見せるやうに思はれる。）この種類の定着したナルチムスが他の人に轉位せられる時には、それはその定着が起つた年頃の彼自身に似た者を對象として擇ぶ。かくしてそこに男性間の性交（Paederasty）が起きる。併しそれは亦もつと微妙な形で作用することもある。例へば婦人が、若い男に於いてなつかしく認めるあの『少年らしさ』の要素は、彼女自身が思春期に、自分が女性心理の特徴を獲得すると同時にある程度迄喪失（抑壓）せざるを得なかつたものである。

（3）は、子供等に對する兩親の愛の特徴たるナルチスティッシュな對象愛の特別な形である。その子供達は（殆ど文字通りに――特に母親の場合には）兩親自身の一部分を構成してゐると見做されるのである。非常にナルチスティッシュな女は、たとへ彼女が夫をあまり愛し得ないにしても、（卽ち夫としては彼女のナルチスティッシュな愛を牽付け得ないにしても）母としてはその夫との間に出來た子供を愛するとことのあるのは、この型の置換に基くのである。併し、一體吾々は自分等が手盥にかけた凡ゆるものを、ある意味に於て吾々自身の個性の擴張と見做すものであるが、兩親の子供に對する愛は、さう云ふ極めて一般的な傾向の極端な場合に過ぎない様に思はれる。蒐集家がその蒐集物に對する、發明家がその發明品に對する、著者がその著作物に對する態度の如きを想像すれば、讀者諸氏に於いても思ひ半ばに過ぐるものがあらう。實際、著者がその作品を製作する骨折は屢々、母親が子供を生み育てる苦勞に比較されてゐるのである。

若し（1）が『現實自我』に纏綿してゐるナルチスティッシュなリビドーのあの部分の轉位に依るとすれば、これに依つてよりよく説明されるのである。かゝる種類の（4）は超自我に屬するあの部分の轉位に依る。愛者がその戀愛對象を不合理に買被ることは、他の凡て以上に、その愛者は屢々、彼が禮讃する人の價値と比較して自分自身を全く價値がないと考へるのである。（丁度彼の現實自我が超自我の標準によつて判斷されると價値がない如く）。これが一層特種に作用した場合に於ては、この對象愛の型は愛者のとは異つた、或ひは正反對の性質を持つてゐる對象を選擇せしめることがある。從つて被愛者

は愛者自身に缺けてゐる性質への「補償」である。（これは、アドラーが個人を取扱ふ時に强調した「器關劣等」に對する補償の投出された形に相當するものだ）。故にこの型の戀愛は第一の型とは反對の特徴を示す。

（５）と（６）との型は精神分析をあまりよく知らない人々の間にも最も一般的に了解されてゐる。それ故ここでは極く短かく論及しておいてもよからう。何故なら、精神分析擡頭以來、エディポス・コムプレクスは斯學に關する凡ゆる討論に於て最も多く問題にされて來たからである。フロイドの最も根本的の發見の一つは、愛と憎との双方の最早期の對象として父と母が極めて重大な役目を果すと云ふことであつた。これをこゝで讀者に思出して貰へばそれで十分であるに違ひないと思ふ。父を殺して母と結婚したエディポス王の神話は、母の時間と愛とを自分で獨占しようと男兒のするのを妨げる競爭者で父はあると感じた、その原始的心持が大人の言葉として飜譯されたのである。少女の場合にも、必要なだけの變更を加へれば、同樣のことが云はれる。ただ少女の場合にはその發展はむしろ一層複雜して居る。少女の極早期の戀愛對象は、少年の場合と同樣に、母であるからだ。實際少年、少女何れの場合に於いても、兩親に對する態度はある程度迄アムビバレントである。但し、常態の發展に於ては愛は主に異性親に向ひ、憎みは兒童と同性の親に向けられる。併し乍ら、愛と憎しみの凡ゆる可能な結合は、十分に發展した『常態的』なエディポスから『變態的』なエディポスに至る迄いろいろある。このコムプレクスの『變態的』の形としては、男兒は自分自身を母と同一化し、母の位置に立つて父を愛さうと求めるのがある。從つてこの場合、母の方が父よりもむしろ競爭者となる。少女の場合にも勿論、之と（性だけは反對だが）同じ態度をとるのがある。この變態的のエディポス・コムプレクスは、同性愛的對象撰擇がなされる場合に於て（ナルチムス以外の）もう一つの重大な要素である。

二、エディポス型戀愛とその轉位

幼兒が始めから持合せてゐる愛と憎との相反並存感情はエディポス・コムプレクスに體現されて主要な抑壓を段々と受けて行き、その結果、變形と轉位とを示すやうになる。憎しみは屢々非常に廣範圍に亘つて抑壓され、表面だけは愛でその中に憎しみが隱されてゐることがある。が、憎しみは生涯を通じて色々な（それと認められない）轉位によつて性格に影響する。愛それ自身も近親相姦の非常に强いタブーに依つて抑壓を受ける。このタブーは人間社會の發達の凡ゆる水準に於いて最も顯著な

る特徴の一つであり、又その影響は種々の異族結婚の規則と實行とに痕跡をとどめ、それに依つて多くの原始民族の特徴が判然する。この抑壓の結果として、一方、戀愛に於ける肉的要素と、他方、獻身や尊敬の感傷的要素との間のある分裂が生じて來る。この分裂は社會生活及び性生活の双方（特に男性に於る）に對して極めて重要なものであるが、その眞の性質と原因とについては吾々は未だ十分の知識を持つには至つてゐない。

子供の兩親に對する態度に次いで重要なのは、その兄弟姉妹に對する態度である。ここでも亦アムビバレントな感情が一般的に起きる。弟や妹は屢々最初に競爭として見做される。只（特に若し年齢に於て相當の差異があると）その間の愛に對兩親的な愛に似たものがあると、やはり危險になることがある。之等同胞間の愛もやはり親子間に作用するのと殆ど同樣に甚しい近親相姦のタブーに依つて抑壓を受ける。

個人の性格及び社會の敎養、双方の大部分は、家庭内に起きた種々の愛と憎しみが漸層的に轉位されたものに基いてゐるのである。ここでは、吾々はこの轉位の一番重要な形のあるものを、極ざつと示しておくに止めておかう。

男女何れに於いても兩親の定着があまりに强いと、結婚したり兩親の家庭を離れたりすることが不可能になり或は相當の自恃心と性格の獨立性とを成就することが出來なくなるものである。兩親を尊敬する感情の現實の轉位は肉親關係（卽ち、父母から兄弟、姉妹、伯父、伯母、從兄弟等に至る）、年齢、姓名、性格、その他さう云ふ事情等の線に沿うて起る。卽ち、之等の要素の中のどれでもが、轉位の仲介として作用するであらう。最後に擧げておいた型の特別に重要な例は、子供時分に經驗して愛の障害となつたエディポス型を後期の戀愛の本質的條件として繰返さうとする如きがそれである。この樣な場合には、第三者の妨害のない戀愛は魅力がなくて、例へば婚約してゐるとか結婚してゐるとかの異性者のみが性的執着の相手となり得るのである。この傾向は『三角關係』の問題となつて種々な程度で文學や戲曲に描かれてゐるのを見ても、非常に屢々人々の示すところであることが分る。

發達がうまく『常態的』に行つた場合には、兩親と兩親關係とから漸次に離脫し、かくて終局に本人は幼兒期の家族狀態には關係の少い方法で自由に生活し戀愛するやうになる。併し乍ら、絕對的の自由にはどうしても到達することが困難である。何故なら、分析して見ると愛と恐れと憎しみとの元の對象であつた兩親との何等かの

關係が、殆ど大抵の場合出て來るからである。

このやうに、社會的團體や制度に對する態度に於ても個人に對する吾々の態度の場合と同樣に、同じ影響が作用してゐる。人々の生國に對する愛の中には大部分、父或ひは母との關係が色づけてゐる。(Motherland 或はFatherland と云ふ言葉にも見られる通り)亦、故鄕、學校、敎會(“Mother Church”)大學(「母校」“Alma Mater”)及びその「母國語」“Mother tongue” でさへ同樣である。彼の祖國の敵は宛かもそれ等が彼の母の掠奪者であるが如く扱はれる。が、また彼自身の屬する團體內の權威ある地位に居る者に對しては、當人がかつて父に對して感じた愛と憎しみ、尊敬と侮い怒りなどと同樣にアムビバレントな感情を示すのである。政治は實際、エディポス・コムプレクスに關係して起きて來た幼兒的態度の再生と再活動とに外ならない。そしてこのことが十分に了解されない內は、政治的分野に於る人間行動がもつと合理的な、もつと現實に適合したものとなる望みは少いのである。

エディポス段階に於る定着が更にどのやうな影響を及ぼすかについて、なほ少し論じて見るならば、――一體兩親に對する定着の强い子供は、兩親の力、知識、善良さなどについて自分で形造つてゐる誇張した考へを捨てることを好まない。彼は兩親も亦普通人なみに缺點と限界を持つた人間であつたことを了解する樣になると、現實の兩親は彼が想像した偉大なる兩親と比較して非常につまらないものとなる。かくして、極めて屢々見られる『養子空想』“foster-child phantasy” が起きるやうになる。養子空想と云ふのは、子供が自分を取代られた子供であると考へてゐることである。眞の兩親は富、地位、性格或ひは力に於て現在のみすぼらしい親よりも遙かに優つた人間であつたと空想してゐることである。これは種々の時代を通じて『英雄誕生の神話』に表現されてゐる幻想である。その神話では、神々や王侯貴人の息子たる若い英雄が動物や百姓によつて育てられる。モーゼ、ペルセウス、ロムルス、ローエングリンなどは、この型の多くの傳說的英雄の數例に過ぎない。が又、モーグリMowgli や類人猿のターザン Tarzan は類似の人物の近代文學に現れた代表である。

三、エディポス型戀愛と宗敎心

併し求めて求め得ざる理想の兩親に對するこの頑强な要望を何とか醫する凡ゆる方法の中で最も一般的のものは、兩親を神として天國に投上げる(project)ことである。何となれば神々と女神達は吾々幼兒期の萬能の兩親

であり、永久にその高い狀態に位してゐるからである。この投出行爲(projection)によつて、大人になつた者も神が結局は自分自身の努力に頼つて造り上げたものだといふ事實を痛ましくも知ることから救はれ、そして常に吾々の幸福について心配し、見守り、愛してくれる兩親が何處かに居るといふ子供らしい考へを保持することが出來るのである。『苦しい時の神頼み』と云つて、誰しも困つた時には、この空想にすがることになるのである併し神々は親切であると共に怒りつぽいものである。そして神のこの特質は兩親の恐ろしいが又(特に高級の宗教では)道德的でもある特質と符合するのである。神は審判者又は復讐者として超自我と同じ機能を果たし、そして超自我と等價で外部に存するものとして、說明される。神の要求する刑罰、犧牲、及び禁慾行爲は、その一般的意向に於て、超自我の要求するものと同樣であり、又罪障感によつてそれ等の行爲が促される點に於いても變りはない。この罪障感が如何に强く、從つて神から復讐して貰はうとの要求が絕えずあることは、例へばキリスト教會の組織に於いてその建設者のもつと純潔な、積極的な、愛情ある道德では滿足されないことによつて明かに分る。『われ汝を罰せず』と云ふキリストの言葉に含まれてゐる態度は『刑罰の要求』を滿足させない。この要求は神經症に於ると同樣に、宗教の重大な特徵である。キリストは罪と憎しみとを去れと云ふが、それは極めて少數の選ばれた人々のみが到達し得るもので、又もし大規模にそれへの到達が出來るとすれば、それは只罪障感の神經症的及び準神經症的要素を一般的に了解せしめることによつてである。而もそれは精神分析學だけが成遂げ得るものと思はれる。兩親に對する幼兒期の態度に重大な定着がある以上、そこには兩親の代理視せられてゐる者に對して依賴心を起す(それは單に吾々を意氣地なく又非進步的ならしめる)ばかりではなく、それ等の人々に對する憎しみ(それは同樣に吾々を殘酷ならしめる)も存在するといふことが、殆ど避け難い樣に思はれるのだ。人類の神に對する態度が深くアムビバレントであるといふことは、宗教的信仰と儀式とを徹底的に分析して見れば明になるが、特に犧牲と云ふことを分析して見ればよく分る。犧牲はその窮極の動機が神自身の殺害であり、從つて又かくて凡ての大なる罪の原型(親殺し)の繰返しである。愛を以て貫く宗教や社會的態度は兩親に對する吾々の幼兒的反應と關聯する憎しみ、並びに從つて、罪惡感を一般的に卒業して了ふ限りに於てのみ可能であるやうに思はれる。(完)

精神分析語彙（十三）

一、超心理學 Metapsychologie——「總ての心理現象を動的、局所的、並びに經濟的の三見地の綜合に於いて見んとし、それが心理學の到達し得る窮極の目的であるとするにある。この試みは手脚のない胸像に終つた。二三の論文（本能と本能の成行——抑壓、——無意識、——悲哀とメランコリー、その他）の後にこの試みを中止した。」（フロイド「自傳」）、併しこれ等三見地そのものは斯學の方法として必然である。三見地の各個の意義についてはそれ〴〵の條下を參照のこと。

一。超自我 Überich——「自我は單純なものではなく、その核心として一つの特殊な審判機能なる超自我を包含してゐる。この超自我と自我とは多くの場合、合流し並流してゐて、兩者の區別が我々には立たないほどであるが、而も他の方面の關係に於いては兩者は截然區別されるのである。超自我は發生的には兩親的審判機能の遺產である。超自我は自我を屢々嚴格なる屈從に强ひ、嘗て幼年時代に兩親（又は父親）が子供を扱つたのと、實際に於いて同じやうに自我を扱ふのである」（フロイド「フモール論」）併し「自我のこの部分（超自我）は他の部分に比して意識とは密接に聯絡してゐないと云ふこと」（フロイド「自我とエス」）を注意せねばならぬ。

一、治療上の消極的反應——分析治療が進展すれば、普通ならば良好の結果を齎すか、若しくは症狀が一時的に停止する筈であるに拘らず彼等は却つてその病勢を亢めるを云ふ。

一、知力喪失症——從來「早發性痴呆症」と呼んだものを、フロイドはかく解しかく呼ぶ。「早發性痴呆症」の條參照。

一、月——太陽と共に人間心理に於ける象徵の材料として利用されて來た天體であることは、各民族に月神の神話あることに徵して明かである。アメリカの精神分析學者 W. A. White の『醫學に於ける月の神話、リビドー象徵としての月』と題するやゝ纏つた論文がアメリカの分析雜誌『精神分析評論』一九一四年七月號誌上に揭げられてある。

一、抵抗 Widerstand——無意識の快樂原則の滿足が、それの意識化に依つて破られんとする時に、無意識の示す苦鬪を云ふ。

一、定着 Fixierung——人間心理の發達途上の或る個所に於いてリビドーが或る經驗をなし、それが原因となつて、向後に於いて類似の經驗を反覆せんとする傾向の生ずるを云ふ。この定着と類似の事柄が觀念的に結びつき、定着に伴ふ感情がその觀念的類似物に轉位せられる狀態をコムプレクスと云ふ。故に定着とコムプレクスとは混同すべきではないが、これが同一物であるかの如くに一般に考へられる傾向がある。

——未完——

内外彙報

「イマゴー」誌本年度第一册

一、『轉嫁と戀愛』ギインのL・イェーケルスとE・ベルグラーとの共稿——對象纏綿の奇蹟、愛せられむとする意志、超自我の發達、戀愛と罪障感、などの諸項に亘つて詳說。

一、『ゲシタルト心理學說について』ギインのS・ベルンフェルド稿——近頃流行のゲシタルト（形態）、全體、構成などの諸概念につき、心理學諸派の說を分析的に吟味せるもの。

一、『雪女郎の精神分析』ロンドンのグランド・ダフ稿——グリム童話中にある Schneewittchen の話を研究せるもの。

一、『精神分析と實驗的方法』ベルリンのW・ヴォルフ稿。

一、『機械時代の遲延』在ボストン（本來ドイツ人）ハンス・ザクス稿。

「精神分析教育雜誌」本年度第一册

この雜誌の存在に就いては既に本誌上に屢々報道したことはあるが、その內容を紹介するのはこの度が最初である。同誌は今から八年前の創刊に懸り、發行者は犯罪學者として有名なアイヒホルン、ギインの分析學界に勢力ある（古澤氏留學中の直接指導者）P・フェーデルン、フロイドの愛孃アンナ・フロイド、その他の人々で、編輯主任はW・ホーフェルである。同誌同號は「幼兒研究號」の特輯である。

一、『幼兒分析心理學』ギインのS・ベルンフェルド稿。

一、『精神分析的見地から見た幼兒教育』アンナ・フロイド。

一、『幼兒教育家を敎育せよ』G・B・エッシェンブルグ稿。

一、『幼稚園に馴染まぬ園兒について』H・フィッシャー及びL・ペルラー共稿。

一、『或る二歲兒の分析記錄』E・ステルバ稿。

一、雜報（ロンドンに於ける斯學界の近況）

ユング派の兒童研究

ユング派のギッケス氏 F. G. Wickes が『兒童心理の分析』„Analyse der Kinderseele" と題する書をストゥットガルトのユリウス・ホフマン書肆から公刊した。ユングが序文を書いてゐる。「高度の意味では科學的であるが、必ずしも所謂科學的でない。兩親の心的態度が如何に兒童に影響するかを、實例について說明した」と廣告に書いてある。

最近國內事實

☆『精神分析學派の政治觀に就て』(一) 戸澤鐵彦稿 (「國家學雜誌」七月號。)

☆『ユウデン・オニイルの精神分析的研究』山口太郎稿 (「新演劇」七月號。)

☆『女と不平』シカゴの分析者カレン・ホーネー女史が最近の精神病學大會で述べた説――何かしら不平を云ふ種を見付けないと幸福に暮せない女の心理に就いての説――を「朝日」と「都」兩紙の家庭欄で紹介してゐる。(七月十八日)

☆『どうして息子は父を憎むか』金子準二談、八月十日都新聞家庭欄。

☆『性慾心理の話』大槻憲二稿 (「人生創造」七月號。

☆『男女青年の性心理』同氏稿 (同誌八月號)

☆『書物蒐集癖』同氏稿 (春陽堂 新刊月報」七月號に「書物趣味」創刊號から轉載。)

☆『劇界分析隨筆』同氏稿 (「新演劇」八月號)

☆『ローレンスと精神分析』同氏稿 (「浪漫古典」八月號)

☆『森田神經質説の行動主義的契機に就て』布留武郎稿 (「應用心理研究」八月號)――本誌第一巻第三號に掲載せられたる大槻憲二稿「精神神經症の分類(森田正馬氏の示教を乞ふ)」に對する答辯。

☆本誌前號内容に關しては、本號巻末廣告を參照ありたし。但し同廣告には生形要氏稿『トーキー居酒屋に就いて』及び高橋鐵氏稿『初戀ガイド』が洩れてゐる。兩氏の原稿が遲れたためである。

本研究所研究會七月例會

七月十七日、午後五時半例により神田驛前アメリカン・ベーカリにて開く。

會食前、本誌七・八月號所載「自己戀愛と超自我」に就き、大槻憲二氏より講義あり。會食後まづ新出席者の紹介があつた。それは土屋喜一、福間光、小杉禮三、越田辰次郎の四氏であつた。紹介を終つて、直ちに研究談に入り、まづ髙橋鐵氏、『英雄色魔とその心理』に就いて研究發表あり。眞の色魔は「ネクタイの如く女から選擇されるものでない」などの啖呵あり、それに就いて、かゝる問題の研究に入つた高橋氏個人の心理的動機について質問を發する向あり、またその心理に對する分析解釋を下す向きあり。なか〳〵愉快であつた。續いて種々の面白い感想が斷片的に諸氏から述べられ、長谷川氏のローレンスに關する研究談がある筈であつたが、時間少く已むなく次回(九月中旬、多分日比谷美松階上貴賓室にて)に延すことになつた。

出席者は、右言及諸氏の他に、大久保眞太郎、立川玄一郎、大槻岐美、小杉長平、小山良修、霜田靜志、田内長太郎の諸氏であつた。研究會が漸次充實して行くは賴母しい次第である。

相談

仲人の横戀慕に困る

問——初婚が不幸に終つたものは二度と幸福な結婚生活をなし得ないと固く信じ、誰に何といはれても嫁ぐ氣になれず七八年を過しましたが、相當親交ある或る夫妻より親切に人の道を說かれ再婚する氣になりました。

先方のAは四十歲近くのやはり再婚で、三四ヶ月交際致しますうちにお互ひの氣心もよく分り、式の日を共々樂しみに待つてをりましたところ、こゝに不可思議なことに、私達の仲を取りまとめて下さつた夫人の態度が日增しに嫉妬に燃えてくるやうになつたことです。或る夜、Aが私を訪ねて來て樂しく談笑してをります中へ、醜い心の姿を動作に現はして突入しAを連れだして行きました。

私は思ひます。Aの配偶者として世間にうとい私なら、何事も感づかず、夫人は今後とも絕えずAに近づいて暮せると信じあれ程熱心に私を說き伏せたのだといふことを……。然し現在のAは私なしの生活は將來絕對に出來ないと申し、私としてもAを得て幸福な道に進むことが出來ると信じて居ります矢先き惱みの種はこの夫人で御座います。夫人のこのけがらはしい態度にはホト〲當惑して居ります。

さうかといつて今後私共は、この土地を離れて住むことは商賣上どうしても出來ません。それだけに生涯つきまとはれては到底幸福な結婚生活は望めません。私は今のうちに身を引くべきで御座いませうか。（M子）

答——「仲人も少しは惚れた女（男）なり」と云ふ川柳もある位で、仲介者と云ふものは時々、自分の多くは無意識的に愛する人を世話したくなるものです。それはもし自分が結婚出來るなら、自分で結婚したいのだが、自分にそれが許されない場合には、自分の代償（自分の近親者又は入懇者）にそれを結びつけると云ふ形となつて表れて來ます。この場合、併し仲人にはやはり近親者又は入懇者は自分の「代償」である位ですから。仲人とても好意のある事に變りはないのです。「Aの配偶として世間にうとい私なら、何事も感づかず、夫人は今後とも絕えずAに近づいて暮せると信じ、あれほど熱心に私を說き伏せたのだと」貴女がお考へになるのは、人間の心理を知らな過ぎます。それは少し惡意にとり過ぎてゐます。夫人はそんなに惡い底意があつたとは私には考へられません。既に申しましたやうに仲人は貴女を代償としてAに嫁せしめようとしたので、さていよ〲話がまとまつて見ると、代償は代償でその原體自身でないことがはつきりして來ましたので、今更のやうに無意識の本人が頭を擡げて來たのです。貴女の察せられるやうな底意があつ

たとすれば、結婚前にその嫉妬を貴女に感づかれるやうなヘマなマネはしないでせう。仲人も今は自分の良心と本能との間に板挾みになつて祕かに苦んでゐるに違ひないと思ひます。その意味で仲人は氣の毒な人でさへあると私は思ひます。これがまだしも他人（仲人）だから、貴女の惱みはまだ少いです。これが、貴女かAの親であつて御覽なさい。（さう云ふ場合さへ、實に屢々あるのですよ。）貴女は非常に困りますよ。仲人の事を恨む前に、自分も年とつたらこんな心理になる可能性があると云ふ事を考へて相手を許す氣持になる方が、遙に人間としての修養になります。同時に仲人に對してAが母コムプレクスを起さないやうに、分析的に注意してあげる方に力を致すのが、よろしいでせう。

そして、第三者に侵されない心構えを持つて煩はされる事なく圓滿な結婚生活を營まれるやうに希望致します。貴女のやうにそんなに大袈裟に考へることはありませんよ。全く平氣な顔をして仲介者とつき合つておいでになるのがいゝのです。貴女の方から妙なことを云つたり、批難がましいことを云つたりしたら、貴女の方がまけです。少くともAとの間がこはされて來ます。どこを風が吹くと云ふやうな顔をしてゐる修業が出來るか出來ないか。こゝが人間を練る好機だと思つて一つやつて御覽なさい。（K）

性慾心理文獻補遺

資料欄に掲げてあるもの以外に次の數種をその後に發見しましたから補つておきます。但し本誌讀者には直ぐに分るものは、凡例にも斷つておきました通り、特に掲げませんでしたから、そのおつもりで……（生形生）

靑山正夫譯　（エフ・リュイス）性慾の合理化

林　髞　譯　（フロイド）異常性慾の分析、昭八、

石川千代松　性とホルモン　昭九・八、日本生化學研究所

希望閣譯　（グリアン）革命と性生活　昭三

大槻憲二　嫉妬の精神分析、讀賣新聞、昭八・十一

大槻憲二　同性愛の精神分析、讀賣、昭九・六・一五

大槻憲二　性慾心理の話、人生創造、昭九・七月以下連載中

讀賣新聞　動物界の性生活、昭九・八

編輯後記

酷暑と闘ひつゝ本號を編輯し終つた。編輯も大變だつたが、執筆も御苦勞の事でありましたでせう。感謝します。お蔭で御覽の通りに、充實した雜誌になりました。

×

例に依り新執筆者を御紹介申上ます。

式場隆三郎氏は大正十年新潟醫大精神病學科卒業。昭和四年歐洲留學、その間に學位を受け、昭和六年から靜岡腦病院長となられた。著書としては「ファン・ホッホの生涯と精神病」(二卷)、テオ・ファン・ホッホの手紙」、「犯罪者の精神研究」「兒童の個性調査」、「小說集自分の影」、「青春生理讀本」等がある。

×

霜田靜志氏は明治四十五年東京美術學校師範科卒業、その後東京帝大に三年聽講生として美學、心理學、美術史等を研究、昭和三年渡歐、その間具さにニイルの精神分析的教育の實際を調査せらる。師範、女、中、小學校に轉任。目下吉祥寺のトモヱ幼稚園主任。著譯には「名畫解說」、「子供と繪、手工」「問題の子供」「問題の親」「問題の敎師」「子供への理解」などがある。

×

西澤揚太郎氏は昭和五年早大英文學科卒業、主として演劇研究に從事せらる。

×

辻修氏は山梨縣人。昭和二年以後東洋大學專門部に入り、高島平三郎、西山哲治氏等に師事。また音樂を兼常淸佐氏、ザルコリー氏に、童謠を北原白秋氏、童話を小川未明氏等に學ぶ。多趣味の人である。精神分析に興味を持つに至つたのは、伊豆大島藤倉學園にて低能兒訓練の實際に關與して以來である。

×

澁田見勝亮氏は、熊本第五高校在學中の方である。

×

平塚氏譯のドストエフスキー論は本號に原稿が輻輳しましたので、それに氏の原稿が少し遲れましたので、次號へ廻させて頂きました。同氏及び讀者諸氏のお許しを願ひ上げます。

×

本誌讀者諸氏はなるべく特別誌友(その義務としては直接購讀のみ)となつて本研究所と仕事の上で直接提挈せられむことを希ひます。

×

七月以降、前納誌代御送附下された方は左の通りであります。こゝに芳名を記して受取に代えます。竹之下學山、海老原光久、本田了惠、池田多助、入江敏夫、藤木義輔、福澤一郎、小杉長平、山本鎭雄、浪越春夫の諸氏。

×

なほ次號は豫告以外に興味ある記事が多數ある筈です。題目未定のために豫告してありませんが……。期待ありたし。

(合本)「精神分析」

第一卷・上(五月創刊號から八月號まで)

第一卷・下(九月號から十二月號まで)

第二卷・上(九年一月號から四月號まで)

總布装美本　各册(二圓五十錢　送料ナシ)

單册は――携帯に、書入れに、素讀に………

合本は――書齋に、精讀に、保存に………

總目錄は毎卷最終册尾に附けます。

バックナンバー單册も多少あり。(創刊號六十錢、その他各五十錢)

研究所事業案内

一、分析部

●神經症治療　ヒステリー、强迫症、恐怖症、妄想症、その他)

●性格改造(惡癖、奇習など現實生活に不適當なる性向にして無意識病根に基くもの)

●客員の診察(分析的又は醫術的)希望の方には、紹介の勞をとるべし。

二、教育部

●當研究所主催の講演會、公開講習會、演劇、その他。

●所員並に客員に對して他より依賴の講演又は講習會。

三、出版部

精神分析に關する雜誌及び圖書の出版。

四、研究會

每月一回開催その都度通知、出席希望者に對しては別に資格制限を設けず。會費は食費、會場費、通信費とも出席の都度、六十錢。(但し誌代を別に申受く。)

五、講習會

每月一回、於研究所開催。その都度通知。會費五十錢。

昭和九年八月二十五日印刷 ・第二卷
昭和九年九月一日發行 第七號

(隔月刊) 定價五十錢 (郵稅二錢)

編輯及發行　東京市本郷區駒込動坂町三二七　大槻憲二

印刷所　東京市牛込區改代町廿四　理想社印刷所

定價一部　五拾錢(郵稅二錢)
半年分　一圓五十錢(送料共)
一年分　三圓(送料共)

御注文規定

●本誌の御注文は一切前金に御願ひ致します。

●御送金はなるべく安全至便なる振替を御利用下され度く、振替口座東京七八八一七番へ御拂込み下さい。

●郵券代用の場合は一割增に願ひます。

●本誌廣告に關しては、御照會次第部員を伺はせます。

發行所　東京市本郷區駒込動坂町三二七　東京精神分析學研究所　振替口座東京七八八一七番

大賣捌所　東京堂・東海堂　大東館・北隆館

次號內容豫告

夫婦生活研究號

戀愛心理と性慾心理とを研究して來た我々は、更に夫婦生活の心理を研究することに依つて畫龍の點睛としなければなりません。近來夫婦生活の種々な破綻と悲劇とが、連りに新聞紙上を騷がせてゐますが、實際無事に偕老同穴の一生を送ることは實に偉大な努力であり、藝術であり、奇蹟であるかも知れません。この藝術を仕上げるために、我々はその方法を次のやうに研究する筈であります。

多數の夫婦生活の心理を觀察して……宮田修
性慾と不安症(?)……早坂長一郎
或る夫婦の心理關係……長谷川誠也
夫婦生活に於ける法律的關係と性的關係……大槻憲二
ドストイエフスキーの作品分析(メイフェルト)……平塚義角
マンヌフィールド作品飜譯……岩倉具榮
夢と象徵……田內長太郎

フロイド精神分析學全集第五卷

性慾論・禁制論

矢部八重吉
對馬完治 譯

定價一圓七十錢　送料十二錢

(口繪) フロイド肖像畫及び筆蹟

性説に關する一二論文

性的對象に關する變態、同性愛、性對象として性的未熟者及び動物、性目的に關する變態、變態性慾一般論、神經病者の性本能、部分本能と性帶域、性的變態の目立つ所以、幼兒性感について、幼兒時代の性的潜在期、幼兒の自慰、幼兒が性を知りたがること、思春期に於ける性感の變化、性的亢奮の問題、リビドー説、男女の別、對象發見……など。

禁制と徵候と杞憂

全十一章に亙る

附錄

フロイド先生會見記(譯者)

春陽堂 (本研究所宛申込の方に限り一割引)

月刊雑誌
定價五十錢
送料ナシ

精神分析

半年 二圓九十錢
一年 五圓八十錢
送料 ナシ

昭和九年五月
第二巻第五號

ドストイェフスキー研究號
（又は人間性研究號）

東京精神分析學研究所出版部
本郷區動坂町三二七
振替・東京七八八一七一番

隔月刊雜誌
定價五十錢
送料二錢

半年一圓五十錢
一年三圓
送料ナシ

昭和九年七月　戀愛心理研究號　第二卷第六號

東京精神分析學研究所出版部
本郷區動坂町三二七
振替・東京七八八一七番

(合本)「精神分析」製本出來！

第一卷・上（五月創刊號から八月號まで）

第一卷・下（九月號から十二月號まで）

（一年十二部を三册に分ち四部を以て一册とす。）

總布裝美本　各册二圓五十錢（送料ナシ）

單册は――携帶に、書入れに、素讀に………

合本は――書齋に、精讀に、保存に………

總目錄は每卷最終册尾に附けます。

バックナンバー單册も多少あり。（創刊號六十錢、その他各五十錢）

長谷川誠也著

文藝と心理分析

定價二圓七十錢　送料十六錢

本書の四大特色

一、精神分析各派を綜緻的に研究せること、

一、英文學界に於ける斯學影響の研究に詳しきこと、

一、文明批評的見地をとれること、

一、參考資料に精しきこと、

主要目次

一、心理分析の文學

二、文明に對するアムビバレント心理

三、內省と自我

四、リビトオ說と心理タイプ

五、無意識の意義

六、フロイドの無意識說

七、アドラーの優越慾說

八、ユングの集合無意識說

九、夢と象徵

十、白日夢と文藝

十一、心理的タイプと美學說

十二、溯源的研究の危路……（その他）

日本橋區通三丁目八　振替東京一六一七番　春陽堂

大槻憲二著

精神分析概論

定價三十錢　送料四錢

本書の四大特色

一、斯學の組織的知識を與へること

二、具體的例を入れ興味的に說ける事

三、簡明にして要を得やすいこと

四、現代日本人が讀者たるを忘れぬ事

第一章　精神分析とは何か

(1)無意識の發見、(2)夢の解釋、(3)無意識と精神症、神經症

第二章　精神分析の機能

(1)病氣の治療と記述、(2)各種の理論、(3)理論の應用

第三章　超心理學としての精神分析學

(1)動的見地、(2)局所的見地、(3)經濟的見地

第四章　精神分析の發達

(1)シャルコー及びジャネー、(2)フロイドの史的地位及び特徵、(3)ユング、アードラー、その他、(4)國際學會と研究機關

第五章　精神分析研究手引

(1)我が國に於ける研究史及び文獻、(2)術語表解

本研究所出版部・取次

振替東京口座七八八一七番、郵劵割增無用

フロイド精神分析學全集

（第一卷）夢の註釋　定價一圓五十錢　送料十二錢　大槻憲二譯

（第二卷）日常生活の精神分析　定價一圓七十錢　送料十二錢　大槻憲二譯

（第三卷）社會・宗教・文明　定價一圓八十錢　送料十二錢　長谷川誠也譯　大槻憲二譯

（第四卷）快不快原則を超えて　定價一圓五十錢　送料十二錢　對馬完治譯

（第五卷）性慾論・禁制論　定價一圓七十錢　送料十二錢　矢部八重吉譯

（第六卷）分析藝術論　定價一圓九十錢　送料十二錢　大槻憲二譯

（第七卷）トーテムとタブー　自我とエス　定價一圓八十錢　送料十三錢　矢部八重吉譯　對馬完治譯

（第八卷）分析療法論　定價一圓九十錢　送料十二錢　大槻憲二譯

（第九卷）分析戀愛論　定價一圓八十錢　送料十二錢　大槻憲二譯

（第十卷）精神分析總論　定價二圓　送料十二錢　大槻憲二譯

東京市日本橋區通三丁目八番地　春陽堂書店　電・日本橋・一五一番　振替東京一六一七番

WILLIAM MORRIS BIBLIOGRAPHY

昭和九年四月下旬から五月上旬にかけて日本橋丸善書店階上で催されたキリアム・モリス誕生百年祭記念展覧會に際し編輯せし書誌であります。　社會思想，工藝美術，文學殊に英詩などの研究家は必ず座右に一本を具ふべき好著であります。

一、**口繪**――英國政府から松平大使を經て東京帝大圖書館に寄贈して來たケルムスコット・チヨウサア（モリスの丹精込めて作つた美書）の内容外觀寫眞四枚を始め、モリス肖像、日本舊文獻、ドイツ文の珍しい研究書など、八枚。

一、**題簽**――市河三喜博士。　**序文**――大槻憲二氏。

内容一般

一、モリスの原著作。
一、モリスに關する邦文獻。
一、モリスに關する英文研究書及び參考書。
一、モリスに關する獨佛文研究書及び參考書。
一、工藝美術作品。
一、ケルムスコット・プレス出版書。
一、モリス原著作のドイツ譯書。
一、モリスに關する歐文研究書及び參考書。
一、モリス著作の年代表。
一、ケルムスコット印刷書の出版書目年代表。
一、モリス年譜。

東京ヰリアム・モリス研究會編

丸善株式會社發行

本郷動坂町三二七番地　東京精神分析學研究所出版部　◇　定價四十錢・郵券代用可當方に御申込の方には送料なし

藝術殿

坪内逍遙博士會號執筆

九月號（第四卷第九號）要目

一部　定價五十錢（送料一錢五厘）

編輯　財團法人國劇向上會　東京市淀橋區戸塚一丁目　振替（東京二〇二九〇番）

發行　梓（あづさ）書房　東京市神田區駿河臺町一ノ八　振替（東京七八六四四番）

田園調布驛東口際

精神分析學診療所

醫學博士　古澤平作

東京市世田谷區東玉川町三五八七

田園調布驛東口下車

電話田園調布一〇三二番

昭和八年七月七日第三種郵便物認可
昭和九年八月廿五日印刷納本
昭和九年九月一日發行
隔月一回一日發行

精神分析

九・十月號

定價金五十錢　郵稅二錢

II. Jahrgang, Heft 7, Sept.-Oct. 1934. Erscheint Zweimonatlich.

ZEITSCHRIFT FÜR PSYCHOANALYSE

Herausgegeben vom „Tokio Institut für Psychoanalyse."

(Sonderheft für Geschlechtpsychologie)

Inhalt

Preis des Einzelheftes, 50 Sen

Tokio Psychoanalytischer Verlag
327, Dozakacho, Hongo-ku Tokio Nippon.